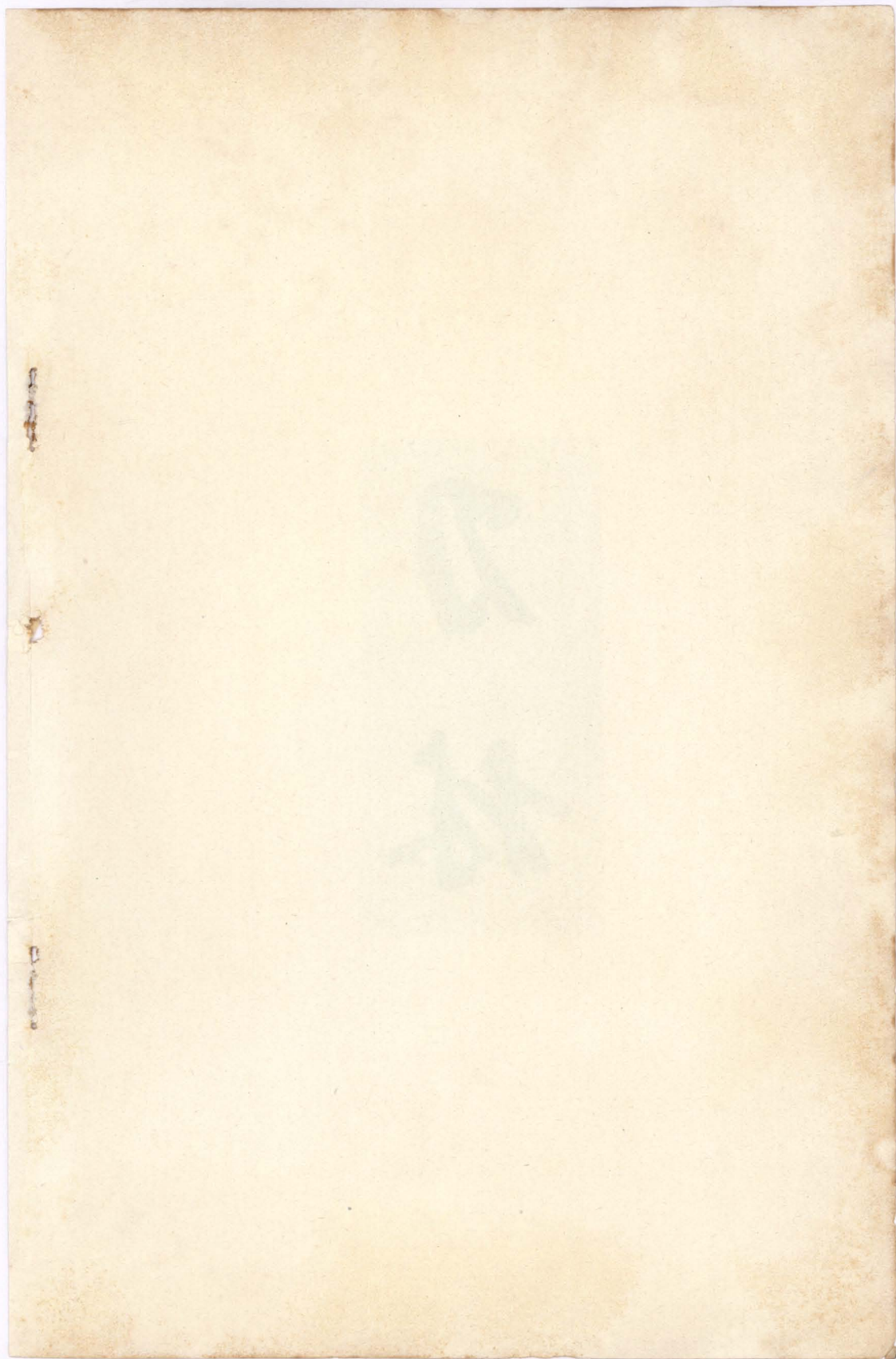






刀
林



刀林

第六號 目次

表紙 瀨尾賓三 題字「刀林」 茂木先生
版画 瀨尾賓三
漫画 禿皮生 「佛心鬼手」 茂木先生

祝賀歡迎送別の辞

感謝の辞

臨床座談

同窓會報告

會員近況

御禮

學術方面

病院近況 〔外科整形科〕

係りより 〔図書室の塵埃してと題して〕

医局だより

謝恩親劇會

入局員紹介

漫画「夏の医局」

(一一四)

(一)

(四)

(九)

(二)

(二)

(三)

(三九)

(四四)

(五八)

(六四)

(六六)

入局員歡迎旅行

(七九)

茂木先生御招待御宿ゆき

(八五)

(文藝欄)

折にふれて

(九三)

アワタテヤマ

(二六)

咲かざりし花

(九四)

宿題(童謡)

(二七)

俳句

(一〇四)

夏の館山

(二八)

ないとのづくし

(一〇六)

川越と喜多院

(二九)

彼と云ふ男

(一〇八)

似而非者

(三〇)

半歳漫録

(一一七)

病院雑草

(三一)

或る時

(一二三)

院内やなぎだる

(三四)

外科雑詠

(一二四)

白銀の旅

(三四)

旧作二つ

(一二五)

(救護だより)

富士山救護だより

(一六〇)

習志野軍放救護日誌

(二〇三)

外苑救護だより

(一七六)

葉山水泳部救護記

(二〇七)

野外実習救護だより

(一八一)

水上運動會救護

(二〇九)

群馬縣相馬ヶ原軍放救護班日誌

(一八三)

陸上運動會救護

(二一〇)

運動欄

(二一一)

報

(二一二)

簿

(二一八)

編輯後記

(二二九)

簿

(二二九)

簿

(二二九)

簿

(二二九)

簿

(二二九)

簿

(二二九)

祝 賀



論文通過

赤松常信君
昭和六年二月

特選研究生

百溪定七郎君
昭和六年六月

歸 局
歡 迎



橋本文吾君 (陸軍ヨリ)

昭和五年十二月

加藤銀次郎君 (海軍ヨリ)

昭和六年五月

小野田肇君 (海軍ヨリ)

昭和六年五月

田村信介君 (陸軍ヨリ)

昭和六年九月

豊田秀穂君 (銚山病院ヨリ) 昭和六年九月

新 入 會
歡 迎



浜名 元中君 昭和六年三月入局

若林 研爾君 同右

神山地 真氣君 同右

成内 穎三郎君 同右

村山 成一君 同右

栗本 勝之進君 同右

笹島 考次郎君 同右

島田 信勝君 同右

明樂 治郎輔君 昭和六年九月入局 (慶大藥物ヨリ)

照井 侃君 昭和六年十月入局 (大正九年子業臣專辛 慶大病理ヨリ)

送會別



吉野勝喬君 昭和六年一月 信州小諸町樋口病院赴任

河内野弘徳君 同 右 病理二轉科

弓削中君 同 右 縣立宮崎病院赴任

井上太郎君 昭和六年三月 北海道小樽病院外科赴任

渡邊治生君 昭和六年七月 房州錦山病院外科赴任

大養六郎君 同 右 外科講師評任從前通し開業

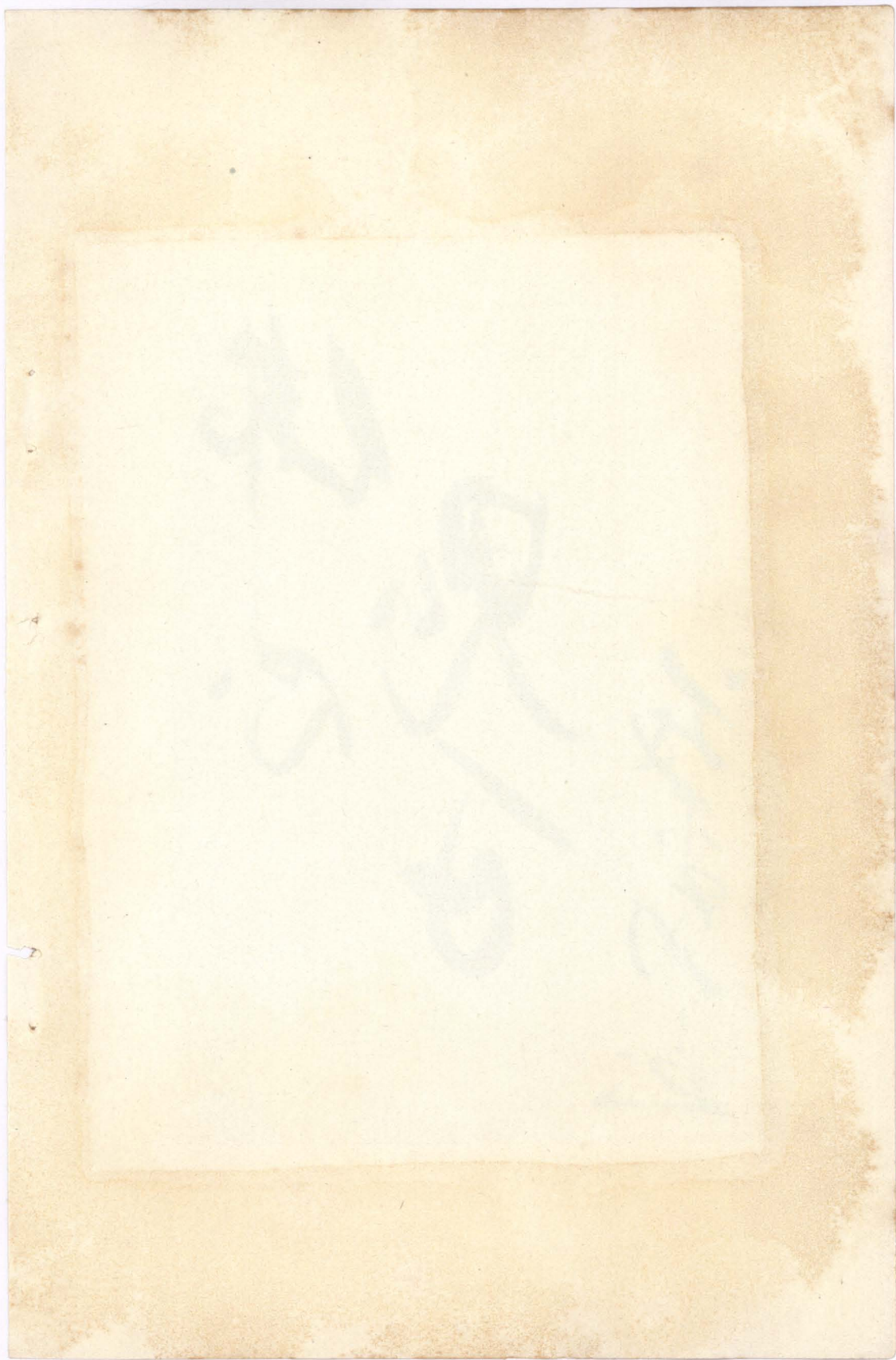
豊田秀穂君 昭和六年十月 生理二轉科

横山虎雄君 同 右 病理二轉科

佛心

見心
子

後未動心



感謝の辞

大 養 六 郎

私は本昭和六年七月末日を以て慶應義塾大學醫學部を辭職させて頂きました。大正九年四月用めて外科教室に任用せられて以來前後十有二年を經た次第であります。此の十二年間の思ひ出は、正木不如丘氏の筆を以てするならば浩瀚なる續診療簿餘白が出来る事でありませうが、斯様な靈筆を持たない私は甚だ遺憾に堪へないと思ひます。

茂木先生が私を慶應外科教室に連れて來て下さつて、色々と容易ならざる御指導と御鞭撻を賜はつた事は、到底筆舌のよく盡し得る處ではありません。唯々衷心感謝致すのみであります。又同僚諸兄の温かき御文誼に預つた事に對しても亦甚深の感謝を致す次第であります。

慶應義塾大學醫學部外科教室が始めて出來たその時には教授茂木先生と助手私共三名とが、教室の全職員であり、病院の開院時にも全員でやつと八名となつて居たのみであります。十二年後の今日では現在の教室員は實に五拾五名と

なり、茂木先生の門下生たる外科同窓會員は、無慮百九名を数ふるに至つて
尾ります。私としては誠に今昔の感に堪へず、又外科教室の發展に對しては慶
賀措く能はざるものであります。

私は教室を去つて、所謂院外団の新米の一人となつた譯であります。院外団
なる同窓會員諸兄が、社會に出て盛に活動し、大に發展されて居らるる事は、
院外団の後輩たる私には非常なる刺戟であり、^衝勸動であり、亢奮劑であります
私も之れからは驥尾に附して、専心開業に従事して行く考へであります。どう
か相変らず御指導を無れ給はらんことを心よりお願い致します。

同窓会の幹事から刀林の原稿を書けとの事で、辞職致しましたのを機として
恩師茂木先生に對し、又同僚諸彦に對し、謹んで感謝の意を表する次第であり
ます。

北里先生ノ薨去ヲ悼ム

昭和六年六月十三日北里柴三郎先生忽焉トシテ薨去セララル、悲シイ哉
惟フニ先生英明ノ天稟ヲ以テ業ヲ醫學ニ修メ、疾ニ血清療法ヲ創始シ
テ名聲既ニ著聞シ、豪邁ノ氣ヲ以テハ退イテ北里研究所ヲ興シテ博ク
万民四海ヲ利潤シ、崇高ノ學徳ヲ以テハ率テ教育ニ盡シ慶大醫學部
ヲ開キテ生等ノ至ラザルヲ擊ム、仁徳並ビニ高ク學勲宇内ニ洽シ、忽
チ訃ヲ聞ク、慟哭何ンゾ恸エンヤ
此處ニ刀林第六号ヲ發行スルニ方リ同窓會員一同更メテ哀悼ノ意ヲ表
シ、永ク先生ノ訓恩ヲ記銘スト云フ

昭和六年十二月

外科同窓會

臨床座談

四條 龍作

一、頭蓋「ヘルニア」ノ手術一例

九月上旬不幸ニ生レツイイタ頭蓋「ヘルニア」ノ畸形児ガアツタ、後頭結節ノ下方ニ頭蓋ノ四分ノ一位ト思ハレル大キナ「ヘルニア」(超手拳大)ガ肩迄垂レ下ツテ居タ。發育ハ稀ニ見ル程良好ノ成熟児デアツタ



産婆ノ驚キ若イ両親ノ歎キハ目モ當テラレナイ。父親ハ初子ノ男児ヲ可愛ヤハ一通リデハナイ。此ノ儘デハ親戚ヤ近所ノ人ニ合ハセル事モ出来ナイ。シサリトテ故意ニ生命ヲ絶ツコトモナラズ思案ノ末ガ医師ニ掛ケテ其レデ死ンダナラ寧ク本望ヲカ

ラ是非即刻手術シテ貰ヒタイト決心シタ、依頼ヲ受ケタ私ハ恐ラク手術中ニ死ヌカクウカラ御免蒙リタイト辞退シタガ死ハ覺悟ノ上カカラト再三ノ懇望ニ退ケ兼木テ受諾シタ

皮膚及硬腦膜ヲ切開シ腦ヲ剝離シヨウトシタガ蜘蛛膜ノ癒着ガ強ク出血モ多クテ頗ル困難ヲ感ジタ、尚若干ノ凝血モアツタ、腦實質ハ「ヘルニア」ノ囊ノ廣サニ比シテ小サイ所ヲ見ルト幾分萎縮シテ居タ様ニ思ハレル、凝血ハ多分出産時ニ出血シタモノト思フ。

大部分ノ剝離ヲ終ツテ腦實質ノミヲ選納シヨウト試ミタガ「ヘルニア」門ガ小サイ（約一錢銅貨大）上ニ強壓ヲ加ヘルト痙攣ガ未サウニナルノデ詮方ナク莖部ヲ腦實質ヲ切断シテ四五本ノ結紮ヲ施シ「ヘルニア」ノ囊ヲ切除シ手早く皮膚縫合ヲ以テ手術創ヲ閉鎖シタ（縫合線長約五釐）、手術時間ハ約二十分ヲ要シタ、出血量ハ三十瓦位タツタロウカ、幼児ハ俄ニ泣クコトヲ止メタ、見タラ貧血死ノ形ニナツテ居タ、申譯ニ小児用カンフル一筒ヲ注射シタラ暫ラクシテ動キ始メ呼吸モ始メタ、産婆ハ急イテ息ノアル内ニ両親ノ許へ届ケヨウト自働車ヲ運レ帰ツタ。

死七診斷書ヲ貰ヒニ未ルノヲ心待チニ待ツタガ二日シテモ未ナカツタ、往診シテ見タラ翌日一日ハ余リ泣カナカツタガ昨日カラハ乳モ飲ムシ大聲ヲ泣クト云フ、「先生コノ児ハ育ツテモ満足ナ小供ニナリマシヨウカ」ト寧口生カサナイ

方ガヨカツタト云フ風ニ詰問サレタ。

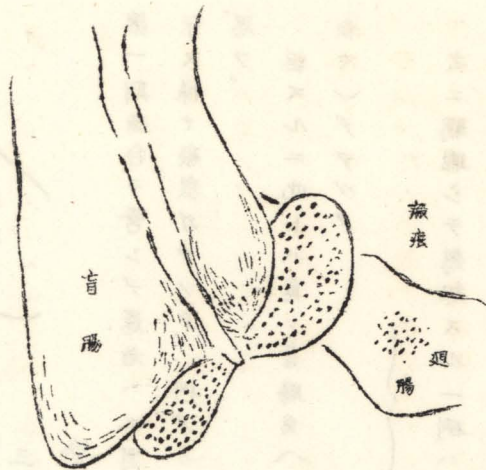
六

私モコレニハ因ツタガコレ丈ケノ大手術ヲ助カル位カカラ多分大丈夫カウ
ウトト逃ゲタ。其ノ後繃帶ヲ代ヘルコト数回ヲ創ハ全治シタガ未ダ骨ノ發生ハ
ナク幾分膨隆シテ居ルガ元氣ハヨイ、コノ不幸ナル男児ガ腦ノ働キガ將來完全
ニナリ得ルヤ否ヤ今後ヲ見タイト思ツテ居ル、御教示下サル方ガアレバ幸甚ノ
至リデアル、切除シタ腦實質ハ超驚卵大デアツタガ當時正確ニ計量シ保存シテ
置カナカツタコトハ今尚ホ残念ニ思ツテ居ル

二、原發性盲腸炎

患者ハ三十歳ノ体格榮養共ニ良ナラザル男子、二十歳頃迄ハ非常ニ病的デア
ツタガ其ノ後ハ何等病氣ト云フ事モ知ラナイデア園藝ニ従事シテ働イテ居タ、所
ガ突然激烈ト腹痛ヲ覺エテ内科医ニ受診シタ、蟲様突起炎ト診断ヲ下サレ余ニ
依頼シテ来タ。

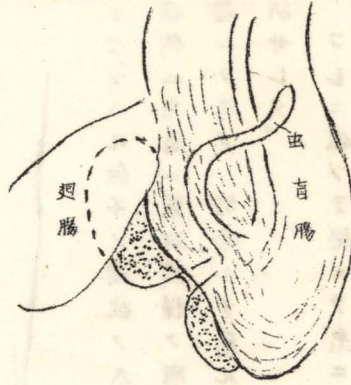
發病後約六時間デ体温三十七度五分脈搏之ニ比シ稍頻數迴首部ニ限局性ノ自
然痛及壓痛アリ、發病後十二時間ニシテ開腹手術ヲ行フ。



チコツヘル鉗子ノ頭位ノ太サデ全長三釐半ノ蟲様突起ガ釣針形ニ曲ツテ盲腸ノ後側ニ密着シ紫液膜様ノ癒着ヲナシ其ノ尖端カケガ網膜垂カト思ハレル程ニ遊離シテ居タ、切除シテ見ルト内腔モアルシ間違ヒナク蟲様突起デアアルコトガ遊離サレタ。

コレニ依ツテ始メテ先ニ病的變化ヲシタ蟲様突起ト思ツタモノハコトニアレ

腹腔内ニ指ヲ入レテ探ルト盲腸部ニ固ク觸レルモノガアリ見ルト示指大ニ腫脹シテ紫藍色ヲ呈シテ居ルツノ周リニ澄明ノ腹水ガ少量アツタ、痼ムト患者ハ腹痛ヲ訴ヘル、大事ニ盲腸ト共ニ引出シテ見ルト上圖ノ如ク形ガ一寸変テ頭モナケレバ根モナイ、然シ病的變化ヲシタ蟲様突起ガ癒着シテ絞レテ居ルト思ツタノデ利離シヨウトシタガドウモ違ツテ居ル、ソコデ尚仔細ニ探シテ見ルト其ノ裏側ニ萎縮シテ僅ニ根跡ヲ留メルト云フニ過ギナイ、即



八

デ絞レタ盲腸下端ノ一部デ瘻室狀ニ膨隆シテ之ニ
 何カ腸内容ガ詰ツテ炎症ヲ起シテ居タコトガ明ニ
 ナツタ

ソコデ内容(硬度ハデルブ)ヲ静カニ上方ニ壓
 出シテ見ルト膨隆部ハ幾分小サクナリ其ノ色モ若
 干恢復シタ。切除ハ危険ト思ツタカラ其ノ上ニ
 三ノ綴縫合ヲシ手術ヲ終ツタ。

愈ノ為メ小サイタンポンヲ入レテ置イタガ殆ンド
 第一期癒合ヲ營ンデ患者ハ二週間後ニ全治退院シタ。尚迴腸ノ下端ニ近ク圖ニ
 示ス様ナ瘻痕ガアツタ。何ヲカ自分ニハ分ラナイガ多分幼時腸ヲ患ツタ跡クト
 思フ。

要スルニ此レハ眞ノ盲腸炎(蟲様突起炎)或ハ蟲様突起炎ヨリ續發セルモノニ
 非ズ)デアツタ

之ニ關聯シテ想起スル一例ハ緩慢ナル發病後丸二日後手術シタモノデ蟲様突

二ノ外

起ノ根節ヲ牽ク盲腸ノ一部ガ乳房状ニ腫脹シテ之ニ小指頭大ノ不整形コンペイ
糖ヲ触レル様ナ内容ガ箱頭シテ蠱様突起ト同様ノ症状ヲ呈シタ例ガアル。根治
手術ヲ全治シ十二日デ退院シタ。

昭和七年度同窓會役員

(〇ろは順)

- | | |
|-----|-----------|
| 會長 | 茂木 藏之助 先生 |
| 評議員 | 大養 六郎 君 |
| | 大 庭 國 紀 君 |
| | 大曾根 幾次郎 君 |
| | 上 石 英 造 君 |
| | 竹 下 貢 一 君 |
| | 梅 村 六 郎 君 |
| | 柳 壯 一 君 |

三ノ内

會計報告

同窓會昭和六年度決算報告

會計

古川明君
古川明君

町田謙二君

吉野史朗君

神山敏雄君

幹事

川田正雄君

木村博君

前田和二郎君

山本順君

昭和六年十一月廿五日改選（いろは順）

収入之部

支出之部

昭和五年度繰入金	七七七.三四	一般支出	一八三.七二
昭和六年度一般収入	五一七.五〇	十週年記念祝典支出	一三七.九一五
十週年祝典寄附金	三五九.〇〇	計	一五六二.八七
計	四八八〇.八四	差引残高	三三一七.九七

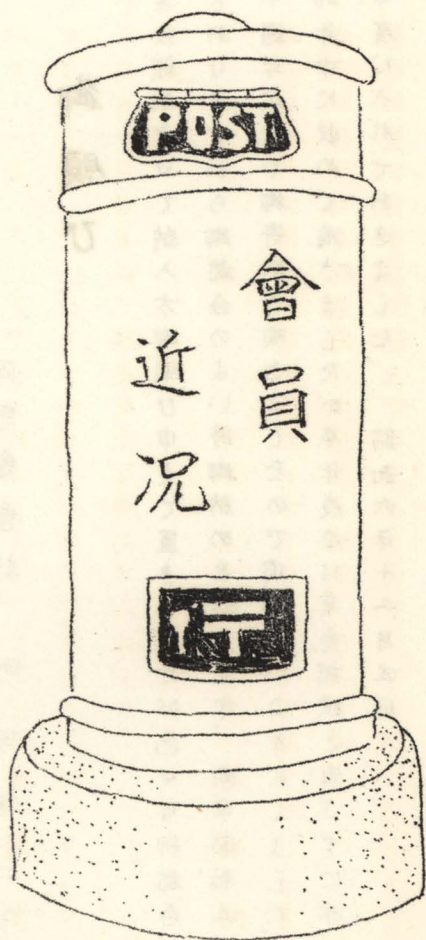
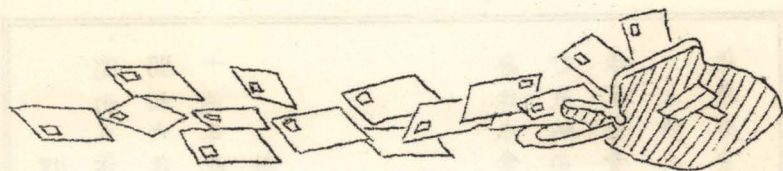
同窓會會計

町田謙

二印

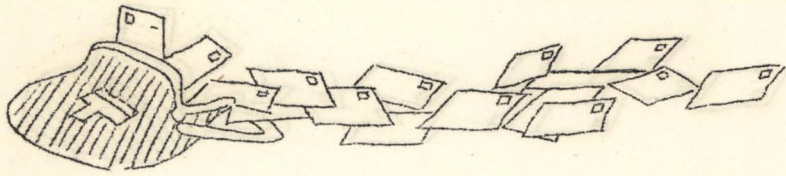
御願ひ

毎年未會費集金郵便を以て納入方御願ひ申して置きましたが色々な御都合で未納の方もありますから御都合のよい時御納めを願ひます。尚ほ昭和五年度會費は十週年記念で御寄附を頂きましたので頂かないことにしました。二三の人は昨年中に収めて頂きましたが本年度分は集金郵便を出さずに昨年度分を本年度に入れておきました。昭和六年十二月五日



○
當時御報せいたして置いた筈ですが小生は本年六月から福岡に轉
宅してゐます、別に開業してゐるわけでもなく又研究に没頭してゐ
のでもありません。
昨今は元慶應の教授だった下田博士の教室に御厄介になつて少し

成松清敏



く神経の研究？をやつてゐます。御地に出たい心ではあつたが故郷が老齡の両親のみで遠くへ離れることを寂しがりますので只今では上京の望みを断つてゐます。

いつ一人前になることやら今でも頭髪茫々の一書生慶應医局時代と何等変ふことはありません、只パパになつた夫のちがひでしょう。

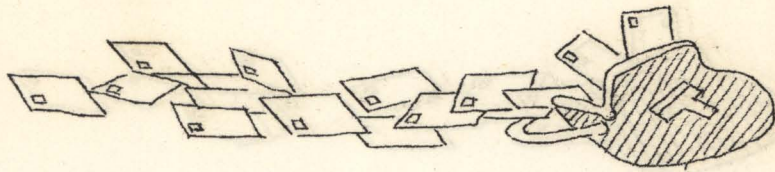
昨年十月五日目に男児が生まれましたので少しく心機一轉？と福岡市まで進出したわけですが相変らずの彷徨性で何が出来ませう。好きなキネマでも見て或る幻想を追つてゐる位です。

大 変 國 紀

御學修中の刀棟發刊に御骨折り下さいますして深謝いたします。

諸兄のお便りと御業蹟の御發表を切望いたします。

殊に町醫には學界の動きが乍により渴望いたす処であります。



一四
戸 田 四郎平

拜啓小生は時々上京しておつて皆様も御存じの事と思ひますが
家庭の内容を御知らせ致します。

妻 万壽子（三十二歳）

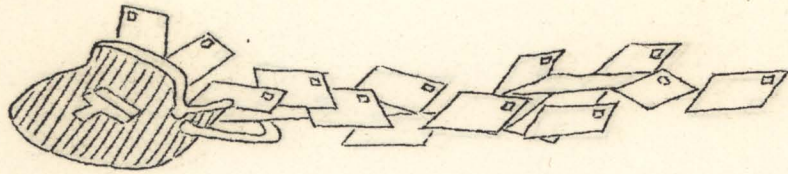
長女 慶子（九歳） 目下横濱香蘭女學校附屬小學校二年生

看護婦二人 見習二人 女中二人 これは何れも女です。

犬二匹 何れも♂ 自轉車一台番蹄八三一

中 村 武 重

刀林第六號の發刊を祝し上げ候。いよいよ初冬の候と相成り候
処益々御發展の既賀し上げ候。小生宅あはらやむる為此頃夜にむ
ると風が吹きこみ甚だ困却仕り候。過日出生致し候女児九日目に
簡單に死去せしも、碯子戸の破れに重大關係ありし様存じ候。現
在四歳の女と二歳の男とあり候。姉の方は先生茂木先生御來富の
時落成致せし物に候。二人共幾分小生に似て居る莫有之由に候。



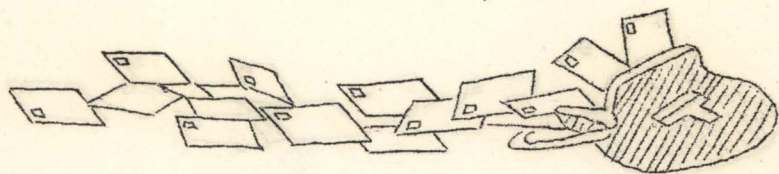
安心致し居り候。スケートと炬燵と火事が当地の名物の様に存じ候。

○ 山 田 晟

拜復又しく御無沙汰申して相済みません。小生は退社後もまだ健康の回復に努め居り目下は留守宅を御里におき表記の場所にて病めるものの悲哀と失業者の無聊と將來への野心とのカクテルを味つて居ります。味は？ 曰く云ひ難しであります。アハ……。乍未筆皆様によりしく御傳言下さいます。先は御返事まで。

○ 關 市 衛

近況御問合せ被下難有存候。御蔭様にて至極元氣家族一同無事に消光致居り候。シヨウバイの方は蔭張り繁昌不致わけて(十月)は一層閑散に候へ共ド一なり其日暮らしには差支へ無之候故老入の内職には丁度よいだろうと満足いたし居り候。



○

林 利 治

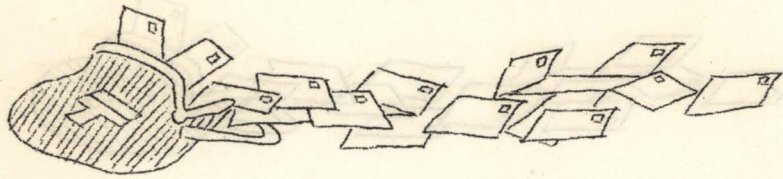
一六

本年三月一杯で大学院の年期が切れ以来研究生として相変らず
茂木先生始めの医局各位の御厄介になつてゐます。本職は渋谷にあ
る韃重兵第一大隊と東京第二衛戍病院との掛け持ちで相當に忙し
いのですが暇も相当にある、家庭は子供が五つと二つの二人、先
づ無事。

○

濱 野 碩太郎

晩秋の候となりました。茂木先生を始めの教室の皆々様御勇健の
御事と存じます。小生日頃は御無音に打ち過ぎ誠に申し譯ありま
せん、近況としては何等申し上げる様な変つた事柄もありません
ギツブスコルセットを造つて見たりし始めました。昨今感冒より
由未した腎臓周囲膿瘍の切開して大いに面目を施してゐるのがト
○出のために氣を吐いた位です。終りに諸先生医局の皆様へ宜敷
く御傳へ下さい。

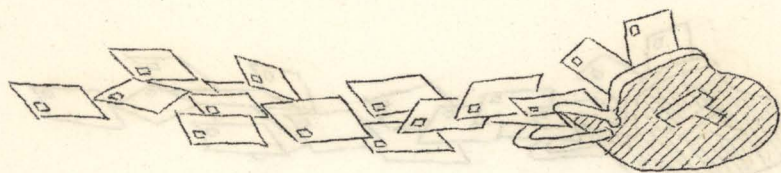


○
豊田 秀穂

八月末今迄赴任してゐた鶴山病院を渡邊君に御願して上京九月始めから約一ヶ月あつかしい外科医局に御世話になりました。外科医局の發展は驚くばかりで五十人の医局員はその名を知るだけでも大変で小生一ヶ月で失禮ながら新しい方に至つては或は覺えられぬかつた様に思ひますこと程左様に盛大なものです。医局員の勉強振りに感心しました。十月から茂木先生、町田先生の御盡力で生理学教室で研究してゐます。入つたばかりで何も判らず困つてゐますが實驗が面白いので矢鱈に機械をいぢくつてゐます。家族一同無事息災です。

○
渡邊 治生

健康に恵まれず、御心配ばかりおかけしたが、皆様の御力添で豊田君の後任として、鶴山病院に参りました。病院の近くに食しい家庭を持つて居ります。本當の田舎でわづかにラヂオによつて



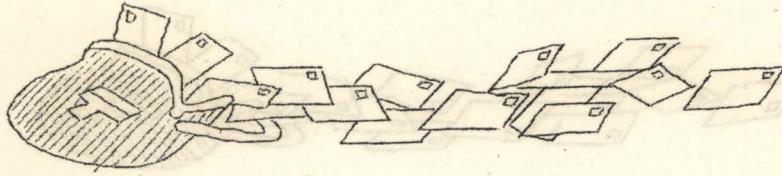
都そしので居ります。こちらに承てからは幸に無病息災、此の
分なら、もう、御心配をかけずにすむだろうと思つて喜んで居り
ます。

放送の拳闘聞くや菊の秋

○

高 兼 三四一

御無沙汰致してゐます。教室の諸考益々御盛んの事と存じます
私も無事で東北の山國で愈々第三回目の冬を迎へて了ひました。
早いものです。最早どんなズウズウでも分かります。疲弊した、
恐らく日本一文化に取り残された營縣の事ですから献身的努力し
たら医者發展の余地も多い様ですが、田舎人の無智と經濟的無力
等の為め面倒も他地方より多いかも知れません、兎も角も体も元
氣で真面目に勤務してゐます。すつかり東北化してしまひました
茂木先生始めの諸先生へよろしく。



謹啓

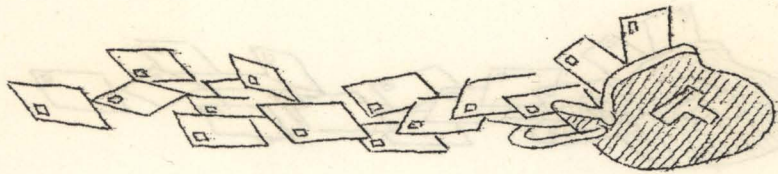
各位愈々御清栄奉賀候

陳者「刀林」第六号御發刊の御通知に接し慶賀に存候。早速何かと存候へ共多忙の為遂々其の意を得ず、甚だ延引乍ら新く粗稿出来上り候間至急御送り申し上げ候。何卒御寛恕の程願上候。先は右御返事まで如斯に御座候。敬具

四條 龍 作

木 村 守 江

○
茂木先生始の諸兄に御無沙汰致してゐる、然し生きて俺は慶應を出て来た医者であることを大言してゐるから安心して呉れ。先日同窓會幹事より、何かと往復葉書を貰つたのを忘れてゐた。で満洲問題で騒しい時。日本として満洲の權益を離れた時母が子を産んで着物が無い様に大切なものであり故に表面から端的に武力に依つてのみ満洲を獲得しようと思ふから聯盟の干渉に會ふので

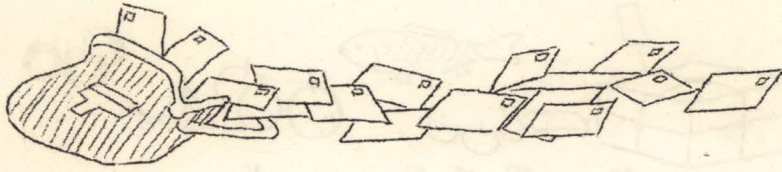


ある。歐洲諸國がやつてる様に漸進的の精神方面から侵略し得る宗教を以てする様に日本は医の仁術を以て滿洲人を心から引きつけぬはならぬ。日本内地は帝大や医專にまかせて那家の為めに滿洲の野に三色旗をかかげよ、野球に狂ふ三色旗よりかはよほどよいと思ふ。特に米國野球團に金を出して見物してぬる非國民達の多いのには驚く、少しはK.Oの意氣を見せろ。今は野球なんて見てる者は非國民だよ、それに米國の者達の金儲をさすとは何だ。以上。

○
近況のことですが、別に変わった事ありません。

鎗田 榮

如何に速く治療するかに就て平生考へてぬます。医療分業問題で医者が泥を食つたり博士でも、おどかしの利がなくつたのは時世とは云ひ真によい傾向です、來春は來春次男が長女が生れる予定です。



○

吉 岡 勝 衛

拜啓秋冷の候と相成候、平素御無沙汰致し申しわけ無之候
 當地に参り早や十ヶ月、朝夕浅間の煙を眺め暮し居り候
 當地は御承知の養蠶地にて昨今の悲境町の景氣も淋しくしたが
 つて病院も平々凡々に御座候

家族は母、妻、三人暮し、吞氣に田舎生活を送り居り候、未筆
 下ら先生始の医局皆様の御健康を祈り上げ候、匆々

スポーツ看護婦

(神宮競技場ヨリ)





御禮

季節毎に其の折々土地土地の珍品名産を遙る々々御贈り下さる先輩諸先生方の御好意に常に私共は感謝申上げて居ります。

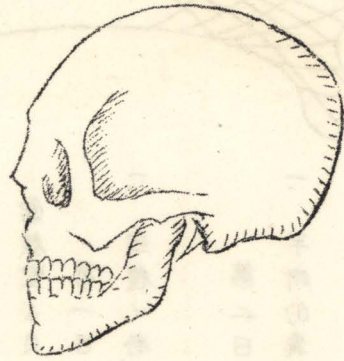
御贈りに預つた品は医局員一同喜んで頂戴して居ります。

各地に散られて吾外科教室の前途の爲御奮闘下さる諸先生方の何時まで経つても尚時折教室の事を御思ひ下さる其の御志に對しましても此の刀林なる小冊子をより有意氣なるものとして吾々医局員一同の感謝の念を具体化し其の實を擧げたいと存じます。

其の都度御挨拶申上げては居りますが、此處に改めて刀林誌上に御礼申上げます。

學術的方面より

伊藤 藤生
酒井 生



◎ 日本外科學會總會（第三二回）

櫻菴未だ袂はぬ花の都は刀圭界の的となり、會場の東大は雑沓のふ山と化した。此の祭ある期に昨年拾週年記念を祝した吾教室は更に光輝ある記録を外科學會史上に標したのであります。即ち我茂木先生には日本外科學會創立三十週年に際し第三十二回總會の會長として重且大なる職に就かれ而かも終始其の任を全ふせられたのであります。先生は偉大なる整姿と象の腦裏にしみ入るが



如き獅子吼にて開會の辞に或は開會の辞に最近の我國外科學界の歐米醫學に對し獨創的發達を歎はれ將來の爲め一層の進歩の責徹に向ふべく會員に希望されたのであります。

此のエボツクに面したる吾々教室員一同の學會に於ける先生の至言を遵奉し、より大なる奮勵と努力研究の程を期して止まないのであります。

尚幹事として町田講師、鎌田、神山西君が献身的に奔走されました。

當教室よりの演題は

第一日（四月一日）

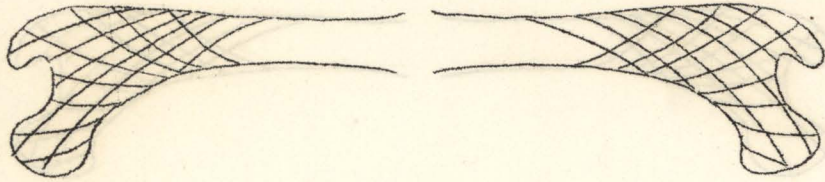
一、或種ノ粉末重湯ノ從來ノ重湯トノ營養價比較ニ就テ

百 溪 君

第二日（四月二日）

一、手術的養癰閉鎖ノ一新法

木村 教授
藤 原 君



第三日（四月三日）

一、紫外線照射ノ血液ニ及ボス影響（茅二類）

志田 君

第六回日本整形外科学會總會

（於東大法經講堂七號室）

整形外科学會總會も各教室よりの發表も多く尚前田教授には幹事として盡力された。

當教室より演題として

第一日（四月二日）

一、「ゲルソン」ハルマンドルフエル氏無食塩食餌療法ヲ施セル
骨關節結核六例ノ成績

前田 教授

堀 田 君

二、四肢骨折ノ牽引療法ニ就テ

（其ノ一）下肢骨折ノ牽引療法

前田 教授

第二日（四月三日）



一、骨關節結核患者ノ血液型ニ關スル研究

(血清各型ニ於ケル種患者率及赤血球沈降速度ニ於テ)

岩原君

二、赤血球沈降速度測定法トシテ「ゼラグラフィー」ト「B」氏法トノ比較

小方君

◎ 外科集談會 (於神田一ツ橋學士會館)

第二九九回 (五月廿二日) 當外科教室當番

一、腸管囊腫の一治驗例

桑野君

二、頭蓋陥没骨折の治驗四例

瀬尾君

三、臍疝に續發せる食道肋膜腫瘍の一例

全

四、日本住血吸蟲卵の存在する糸門瘻の一治驗例

土方君

五、「チストマ幼蟲」に因る多發性腹膜腫瘍の一手術例

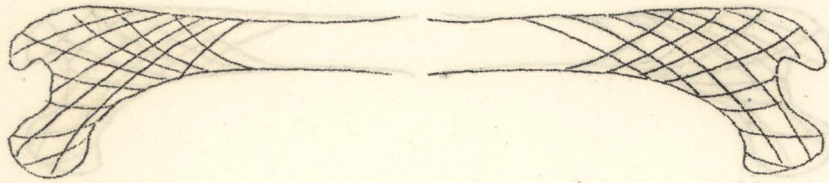
中村君

六、馬鼻疽と誤られたる陰莖瘻の腹壁轉移の一例

古川君

七、男子股「ヘルニヤ」二例

森之君



八、外傷に因る腹腔尿管腫の一治験例
 九、「エプリス」の一例

全 川 田 君

第三〇一回（七月廿四日）東京鐵道病院當番

一、胃肉腫の一例（標本供覽）
 ニ、胃に發生せる「ジンパトアニオーム」の一治験例

横 山 君
 全 君

（標本供覽）

◎ 整形外科學會集談會

第五十五回（五、一、一一）於慈大整形外科
 一、駢指趾を伴へる尖塔頭の一例

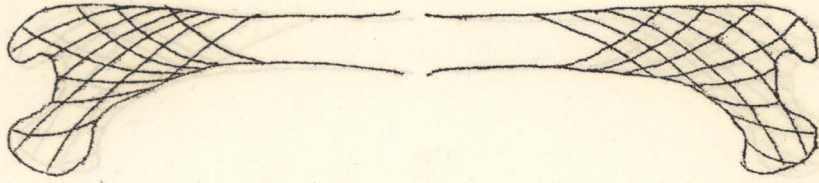
古 川 君

第五十六回（六、二、一一）於嘗整形外科

一、耻骨「カリエス」の二例（患者供覽）

武 藤 君

ニ、「ゲルソン」氏減塩食療法を施せる骨關節結核の六例



(患者供覽)

三、下肢骨折の裝釘牽療法

(大腿骨折及下腿骨折患者供覽)

前田 教授

前田 教授

第五十九回(六、一〇、三) 於横濱十全病院

「ミエログラフィー」と興味ある脊椎内手術例(其の一)

岩原 講師

◎ 慶應醫學會總會(昭和六年十一月六日東校會講堂)

「ミエログラフィー」の臨床經驗

岩原 講師

「ミエログラフィー」の統計的觀察

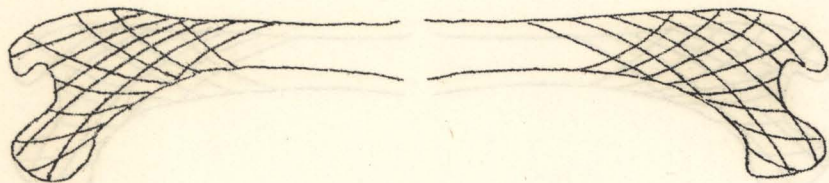
松井 君

◎ 日本泌尿器科學會集談會(日本大學醫學部)七月七日

「腎丸肉腫ニ對スル追加

腎丸肉腫再發患者」ミエログラム

岩原 君

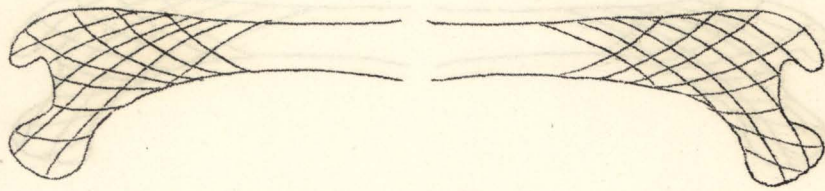


◎抄讀會（昭和五年十一月一十六年十月）

第六十回（十一月廿一日）

- | | | |
|---|-----------------------------------|-----|
| 一 | 蟲様突起炎ノ成因ニ就テ | 相見君 |
| 二 | 肩胛關節ノ強直ノ予防及治療 | 小方君 |
| 三 | 一側肺結核ノ斜角筋切除ヲ附加セル横隔膜神經抽出術ノ治療的効果ニ就テ | 富田君 |
| 四 | 追加レ火傷ノ單寧酸療法 | 百溪君 |
| 五 | 大腸ニ於ケル有莖小腸片ノ移植手術後ノ「イレウス」療法ノ胃内容吸引法 | 林君 |
| 六 | 瘻孔ニ對スル新平板縫合 | 川田君 |
| 七 | ホーク氏ノ「ギプス」牽引装置 | 小澤君 |
| 八 | クラウデン注入ニ依ル粘液囊炎ノ萎縮治療 | 田村君 |
| | | 辻岡君 |

第六十一回（十二月十八日）



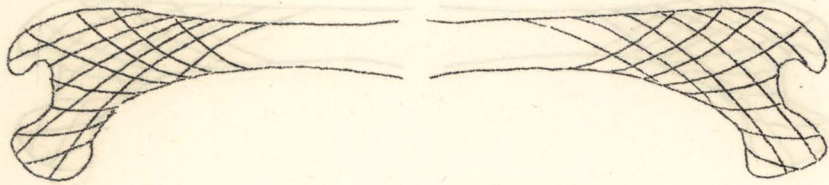
四 大氣中ニ於ケル紫外線ノ消耗
 志田君
 五 脊髓麻酔藥トシテノ「スピンカイン」ニ就テ
 中村君
 六 斷端埋没ヲ行ハザル蟲様突起切除術
 森之君

第六十二回（一月廿二日）

一 蟲様突起手術後ニ來ル肝臟障害及ビ「イレウス」ニ就テ
 橋本君
 二 側弯寫真測定術ニ就テ
 布留君
 三 長二頭膊筋ノ特發断裂
 寺田君
 四 女子耻骨「カリウス」ノ膿瘍移動ニ就テ
 武藤君
 五 蟲様突起炎ノ原因診斷及ビ治療ニ就テ
 井上君

第六十三回（二月十八日水）

一 葡萄状球菌ニ由ル敗血症
 酒井君
 二 脊髓麻酔後ニ於ケル頭痛ノ療法ニ就テ
 森豊君



三、關節部ニ於ケル小創傷ノ繃帶法ニ就テ
 四、慢性虫様突起炎ノ一他覺症候

高橋 君
 古川 君

第六十四回（學會予習）（三月廿六日）

一、紫外線照對ノ血液ニ及ボス影響（第二報）

（出血性素因ニ及ボス影響）

志田 君

二、手術的糞瘻閉鎖ノ一新法

木村 教授

三、或種ノ粉未重湯ト従来ノ重湯トノ栄養比較ニ就テ百漢 君

以上外科學會ニ發表ノモノ

一、骨關節結核患者ノ血液型ニ關スル研究

（血液各型ニ於ケル罹患率 赤血球沈降速度ニ就テ

岩原 君

二、赤血球沈降速度測定法トシテノ「セジグラフ」ト「ラ」氏法ト

ノ比較

小方 君



以上整形外科學會發表ノモノ

昭和六年度

第六十五回（四月廿三日）

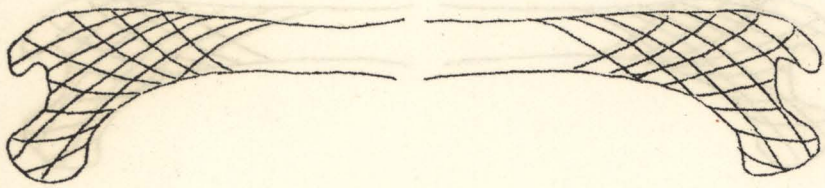
- 一、補助診断トシテノ「ヘット」氏帶
- 二、急性感染症ニ對スル無機塩類ノ影響
- 三、丹毒ノ減蛋白療法
- 四、臍胸ノ開腹術後ノ吸引療法手技ニ就テ

第六十六回（五月廿二日）

- 一、腸側壁吻合術ニ就テノ研究
- 二、鼠蹊單丸ノ療法ニ就テ
- 三、喉咽手術ノ一新法
- 四、免唇手術ニ際シテ顔面神經永結ニ就テ

三二

横山君	鶴島君	伊藤君	若林君	原君	土塚君	土方君	瀬尾君
-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----

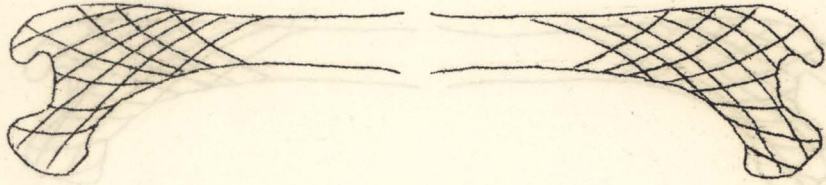


第六十七回（六月十七日）

- 一、陰囊水腫ノ注射療法ニ就テ 浜名君
- 二、直腸癌ノ療法 袖山地君
- 三、無力性甲状腺肥大症ニ就テ 小野田君
- 四、眞性巨大細胞肉腫存柱スルヤ 百溪君

第六十八回（九月廿三日）

- 一、膀胱粘膜炎移植ニ依ル尿道下端ノ治癒 成内君
- 二、白血球ノ病的顆粒及ビ「ヘモグラム」ノ蟲様突起ニ就テ 加藤君
- 三、食物及ビ塩酸ノ混合体殊ニ「ミネラル」中ノ酸及ビ塩基ノ化学分析上並ニ生化学的評價 堀田君
- 四、小児ノ「ヒルスプルング」氏病ニ於ケル「キエンメル」コレコ 藤原君
- 一、氏重積法



第六十九回（十月廿三日）

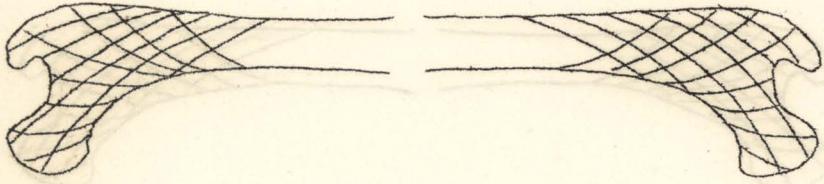
三四

- 一、胃瘻及び胃潰瘍ニ於ケル大網膜ノ細菌検査 村山君
- ニ、カルブンケルレノ新療法ニ就テ 森 豊 君
- 三、氣管枝喘息ノ文感神經切除術ニ就テ 畠 田 君
- 四、小児上膊髁上外傷後畸形 小 方 君
- 五、腹壁縫合ノ簡單ナル減張法 川 田 君

◎ 吾教室よりの文献

吾外科、整形外科教室の研究並に發表も年と共に其の数を増し量を加へ私の覚えなき記憶にても昭和六年十一月より六年十一月の一年一ヶ月に既に廿九の多数に達しました。かゝる教室業績發表の機関の重大なるに拘はらずその掲載の前年度刀林まで等閑に附されたる事を遺憾に思ひ、今年より本欄を設けることに致しました。

○ 昭和五年十一月



一、 晩發性先天梅毒による脛骨骨炎

前田 教授

(診断と治療一七、一一)

二、「ヘルニヤ」に就て(診断と治療一七、一一)

横山 君

三、分娩時外傷としての初生児四肢骨折に就て

井上 君

(「グレンツゲビト」四、一一)

○ 十二月

一、 驗血の實際に就て(診断と治療一七、一二)

町田 講師

二、 鼠蹊「ヘルニヤ」の統計的觀察

横山 君

(診断と治療一七、一二)

三、 血漿中「フィブリノーゲン」量と赤血球沈降速度との關係並ニ結

核患者ニ於ケル診断上ノ價値

前田 教授

(日本外科寶函七卷附)

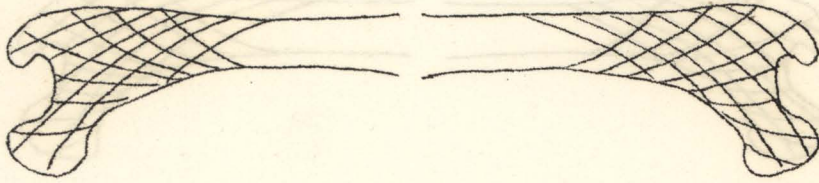
百 溪 君

○ 昭和六年二月

一、 腸チブス「診断と治療(坐談會)

茂木 教授

(診断と治療一八、二)



ニ 骨折治癒經過ニ於ケル赤血球沈降速度ノ動搖ニ就テ

(臨床的觀察)(日本整形外科雜誌五五)

井上 君

○ 三 月

一、注射に就ての座談會(上)(診断と治療一八三)

茂木 教授

ニ、赤血球沈降速度測定法トシテ「ウ」氏法ト「リ」氏法トノ比較

(日本整形外科學會雜誌五六)

田村 君

○ 四 月

一、注射に就ての座談會(下)(診断と治療一八四)

茂木 教授
佐藤助教授

ニ、骨關節結核患者ノ血液型ニ關スル研究

其一、血液各型ニ於ケル罹患者率(結核九四)

岩原 君

○ 六 月

一、日本外科學會略史(日本外科學會雜誌三三三)

茂木 教授

ニ、鎖肛及重複陰莖(臨講七)

木村 教授

三、特發性脱疽に就て(診断と治療)(一八六)

町田 講師



四、骨關節結核患者ノ血液型ニ關スル研究

其二、血液各型ニ於ケル赤血球沈降速度ニ就テ（結核九六）

岩原 講師

五、駢指趾を伴へる尖塔頭の一例

古川 君

（グレンツゲビート）五、六）

○ 七月

一、痔の座談會（診断と治療）一八七）

茂木 教授

木村 教授

佐藤助教授

二、輸血（外科的方面）（治療醫學）八七）

町田 講師

三、赤血球沈降速度測定實施法（診断と治療）一八七）岩原 講師

○ 八月

一、頭部竇状血管腫（診断と治療）一八八）

佐藤助教授

○ 九月

一、光線療法一般（診断と治療社版）

佐藤助教授



二、或種ノ粉末重湯ト従来ノ重湯トノ營養價比較ニ就テ

(「クレンツグビート」五七)

百 漢 君

○ 十月

一、昆蟲毒(診断と治療臨時増刊「中毒と其の處置」)町田 講師
 二、赤血球沈降速度ニ關係アル外的條件ノ二三ニ就テ

其一、検査誤差範圍(反應醫學一、一〇) 岩原 講師

三、日光紫外線ノ研究

第一篇 日光紫外線最短波長ノ時間的並ビニ季節的変動ニ

就テ(日本外科學會雜誌三三七) 志 田 君

四、紫外線照射ノ血液ニ及ボス影響

(紫外線ノ出血性素因ニ及ボス影響)

(日本外科學會雜誌三三七) 志 田 君

五、取骨「カリウス」に就テ(「クレンツグビート」五一〇)

武 藤 君

○ 十一月

一、四肢骨折の牽引療法

前田 教授

其の一、下肢骨折牽引療法の成績

堀 田 昌

病院近況

外科近況

A 生

純學術的殿堂として嚴然としてその存在を主張して居た西病舎も、復興の威容成れる大東京にはあまりに不釣合なバラック建築であると云ふ理由で陽春三月學取色めき立てる頃衰れ取り毀しの悲運に會した。虎は死して皮を残すとかや、我が木村教授は亡き西病舎の生のある燦然たる業績「手術的糞瘻開鎖の一新法」を、前田教授は「ゲルソン、ヘルマンズドルフェル無食塩食餌療法」を擁して學界に氣を吐かれた。西病舎亦冥すべきである。かくて西病舎に居残れる患者を收容せんが為め「ほ号病棟」の裏に「西病棟」が建築された。しかしベツ

ト数外科整形科併せて廿二に過ぎず、昔日の面影はない。總回診の度毎に西病棟の窓より進捗しつつある新西病舎五事場を眺めやがて出現すべきその風觀を想像して脾肉の歎をかこつてゐる。

病棟を全部本館に纏めてからは外科總回診は毎週月金兩日(号より)号より日号迄を茂木部長、西病棟を木村教授担任され、整形外科は毎火木土前田教授が回診されてゐるが整形外科の近況に就ては別に報告される筈なので茲には其の詳細を譲ることにする。

世は不景氣風吹き荒み都下の大病院青息吐息に悩むで居る際我外科は独り繁昌を極めて居ることは大方の先輩諸氏の御安肚を請ふ。これ偏に我茂木先生の信望の絶大なる事を哀書するものであつて御同慶に耐へぬと共に今更に先生の御苦勞に感謝しなければならぬ。

手術日は毎火木土であつて當日は手術場は戦場の如き觀を呈し、轟様突起突の如きは依然全國に冠たるの誇を捨てず茂木先生の神杖に入れる手術は吾人を恍惚たらしむるものがある。又手術日には必ず術長の部長回診あり、その病の嚴重を問はず一々丁寧なる廻診慰問をされ、主名医及患者を感服させておられ

る。其他茂木先生は殆んど毎日朝夕二回特に重病患者の回診をされる。我外科の入院患者たるもの多幸であると云はなければならぬ。

外未は毎月水金に部長の診察があり、火木土には木村教授及佐藤助教授が診察される。新患は平均十四名、旧患は平均六十三名に昇る。本年は十一月未迄新未患者四千四百九十一名であつた。部長は特に火曜日再來の診察に従事される。學用患者の診察は第三診察室に於て木村教授、佐藤助教授、町田講師、神山、原、川田の諸先生が當てられてゐる、淳乎として流暢なるホリクリ講義をされた大養先生を矢つた事は第三診察室の爲めに惜しんでも尚餘りがある。夏季休暇中は西教授共休まれ、入院患者診療の指導には専ら町田講師が之に當られ、外未の診察には佐藤、町田、神山、原、横山、川田の諸先生が當られ、フライの診察には当日の當直が之に當つた。

當直は定員三人である、滿三年以上在局ハウプトとなり、滿一年以上及新入局員各一名宛が之に當る。ハウプト當直は午後十時迄となつてゐるが、臨時當直、特志當直、深夜當直等々で當直室は常に滿員の盛況である。従つて事件突發の際も決して手不足を告げる事はない。當直は病棟の廻診及重症患者の夜半

廻診をする事になつてゐる。我外科の威信益々確立すると共に當直の責任益々重大を如へ当直子は緊張を以てその責任を累してゐる。

入院患者は各医局員定員を定めて受持つてゐる。四月より八月迄は三人制度を復活し、八回生はエルスト、ネーベン九回生はツワイテ、ネーベンとなり、ハウプトについて患者を受持つてゐたが九月よりは八回生は一本となり患者を受持つてゐる。警局員中には特殊な患者を受持つて研究されて居る諸君がある。神山君のスポーツ外傷、原君のフルンケル、カルブンケル、百溪君の火傷、瀬尾君の膿胸等である。それら立派な成績を擧げてゐる。

本年初頭より十一月末までに入院せる主なる患者数は左の如くである。

蟲様突起炎	三九五
肛圍炎及痔瘻	八七
痔核	五二
ヘルニア	五七
イレウス	三二
胃瘻	二一

胆石 一〇

殊に蟲様突起炎の早期手術の多い事は誇るに足る所であらう。

現在入院患者は左の如くである。

蟲様突起炎	一七	筋炎	一
取圍炎及痔瘻	六	淋巴腺炎	二
痔核	一	脱疽	三
ヘルニア	一	外傷	四
関節炎	一	癰疽	二
癌(胃及腸)	二	イレウス	一
肋骨骨瘍	四	其他	七

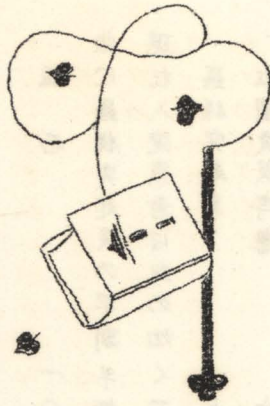
整形外科

蕪 故人

整形外科ハ前田部長ヲ迎ヘテヨリ年ト共ニ隆盛ノ度ヲ加ヘテ来テ、今日デハ
 外未患者新旧合セテ一日百名餘、入院患者ハ常ニ四五十名ノ間ヲ往来シテヤル。
 患者ノ種類トシテハ結核性脊椎炎、関節炎、骨折、神経痛、脱臼等ガソノ主要

ナルモノデアロウガ、針頸、免唇モシバシバ来院スル。今年ハ岩原講師ガ主ト
 ナツテ、ミエログラフィーレヲ行フ様ニナツタガ、ミエログラフィーレヲ行ツテ然
 ル后正シキコラミネクトミーレヲ行ヒ、好結果ヲ得テ感謝ノ真心ヲ披歴シテ未
 タ患者モ仲マニ多イ。ツイ最近ニハ、コストランズヴェルゼクトミーレモ行ハレ
 タ。

外来ハ月水金ガ部長、火木土ガ講師ノ診察日、月水金ノ午后一般ノ処置ヲス
 ル様ニナツテキル。總回診ハ一週三度火木土ノ午前八時半ヨリト決マツテキル。
 整形外科ノ後療法トシテナクテハナラヌ、マツサージレデハ、新ニ黒田、内田
 両君ガ来テ、前任者ト愉快ニ仕事ヲシテオリ、義肢研究所デハ長谷川君ノ代リ
 ニ柴君ガ働キテキル。



圖書室の塵

書物の背中を敲く男より

新しい圖書館が鮑屑の中から生れ出た頃昭和四年の夏圖書館を一寸片付けたのが縁になつて圖書館の整理を始めてから二年の歳月が過ぎた。特別に珍書奇書が有るわけでも無いがどうやら入並に本が列んで整理の目的も一体終つた。一先づ締結する要があると思ふ。

初めて圖書館に這入つた時は何か手を取付けて宜いか判らぬ位雑然としてゐた。新に引越した所爲でもあるが大行列べた圖書も列が乱れ貴重な圖書が机上に雑然と積んであり、棚の上にも下にも新聞とも雑誌とも附かぬものが一杯押し込んであつて足の踏場も無く、入用な本を探し出すには一方ならぬ手間を要した。

旧圖書館の頃は色々不便があつたので新圖書館に成つてからは愈々完備した圖書館を作る豫定で誰が為たともなしに色々新しい準備があつたが餘り雑然としてゐるのでいざとなつて誰も手の下し様が無い有様であつた。

自分には圖書管理の経験が有るのでも何で無かつたが現在有る本を新しく出来た棚に陳列すれば良い様な事を言はれて整理を始めた。實際に當つて見ると色々注文が出て其れだけでは濟まなくなり、つい深味に嵌り込んで了つた。

公共の圖書室が私有の圖書室と異なる處は一目して誰にも利用出来る事、多人数の使用に因つても一冊も散逸させない事だと思つたので其處に工風を凝らし、併し片手間で此の目的に合つた管理が出来る様成るべく簡單に濟ませ様としたが、合理的な分類陳列、カード目錄、圖書の上に記す記号、欠本の補充、貸本の方法、種々な帳簿と是等の處はどうしても為さなければならぬ事が判り、つい複雑になつて了つた。結局後で顧ると普通の圖書館で為て居る事を現在に行つて居る様に思はれる。

先づ第一行つたのは欠本の補充であつた。此の内で金さへあれば簡單に濟むと考へて案外一番骨の折れたのは邦文醫學雜誌の欠本の補充であつた。當時可成りの種類の雑誌が假綴りになつて備へてあつて種類と数では現在と幾らも変らなかつた。併し今日になつて見ると容積では現在の三分の一も無かつたと思ふ。如何に瘦せた欠本の多い物であつたか判る。當時其外に山程あつたバラ雑誌を整へて補ひにし、残りの足りない分を高人に注文する事にして欠本目錄が苦心の後出来た。後は高人の手で簡單に集ると思つたのは大間違で高人は始め安受合として手持ちのある間は頗る熱心に用を辨じてくれる、喜んで居ると

是が段々無くなると思け出して来る。とう／＼三度高入を取替へた。今でも四〇冊分残つて居るが是は最も困難なものが残つたらしい。

古雑誌をどれだけ買入れたか概略調べて見ると

購入古雑誌 一二四四冊

雑誌製本数 三四二冊

是は昭和四年十一月から昭和六年十月迄の二年間に買入れたのである。

改文の雑誌は主に中央圖書館に属して居て幾んど完全であるが尚数種のバツクナンバーと欠本を補充したいのだが中央圖書館が間に這入つたり高價であつたりするので陸張り場が開かない。

圖書の方の入用な物で缺けてゐるのは中央圖書に属する独逸物は先輩の御蔭で良く行届いて居たので幾んど手を触れる必要が無かつた。医局所属書では日本物の外科書を少し買ひ入れ、一般医学書が薄弱であつたので一通りは買入れたり寄贈を乞ふたりした。医局所属書は是が為の急速に膨張して四倍には成つた。この医局所属書の中寄贈は別として二ヶ年に購入したものだけの数を記すと。

新購入圖書

五八冊

圖書製本

四五冊

圖書製本とは古い圖書の表紙の取替へや糸の直しを行つたものである。

この外整理を要したものに整形外科に属する圖書と雑誌があるが是は前田先生直接の御努力に因つて完備したものに爲つた。

猶この外整理の一部である分類や圖書目錄等に附いては枝葉であるから此處で述べる必要はない。

何と言つても圖書室の重心は圖書雑誌の數と質である。質に附いての大体は以上で想像出来るものとして昭和六年十月末日現在の書籍數は左の通りである。

外科圖書

中央圖書所屬書

二三〇号

二八〇冊

外科医局所屬書

二〇四号

二五九冊

計五三九冊であるが重複三九冊昔からの欠本三冊で現に活動中のものは四九七冊と見るべきである。

整形外科所屬書は外科と別個に購入して居るので多少重複があるから別に記す。

整形外科所屬書 一三六号 一五二冊

雜誌の冊数を大体数へると

歐文外科雜誌 一七種 六三七冊

歐文整形外科雜誌 六種 一七三冊

邦文醫學雜誌 五〇種 三九三冊

計一ニ〇三冊である。邦文外科雜誌は萬一を慮つて二通り作つて有るので重複四〇冊となる。

圖書雜誌外科整形一切の本と名のつく物は合計一八九四冊で二千冊に重んじて居る。

以上二年間の整理に就て財政的援助はどうであつたか。最初假綴りにしてあつた雜誌や山の様にあつたばう雜誌の大部分は茂木先生及び木村先生の御寄贈に與つたもので現在医局數十種数百巻の邦文雜誌の存する遠因は此處^處に有るのである。商人から買入れたものは其の一部の缺本を補つたに過ぎない事は全く感謝すべき事である。又医局所屬書の膨張が急速に行はれた際の寄贈書は数点を除いて茂木先生木村先生諸先輩の御助力に因るものである事を併せ記し感謝

の意を表するものである。此外に更に前記の商人から買入れたものの出費を医局から仰いだのであるが、その中圖書經常費及び我木先生及び諸先輩の圖書費としての御寄附が多額に上つたので医局の全くの臨時費は二年間に僅少で済んだ。是等の財政的援助無くば圖書館の整理は全く計畫のみに終り何等實行が伴は無かつたであらう。此の費用の奥に就ては古川會計係をわづらはした事非常なものであつたことを記し深く感謝するものである。

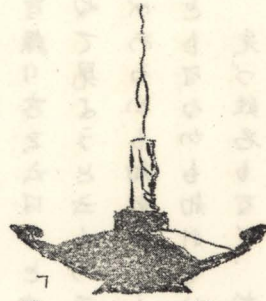
以上を記し終つて最後に二年間を振り返り返つて自分の成し未つた事を静思するに矢張り始めに命ぜられた通り現在ある書籍を新しい棚に列べたに過ぎないと云ふ感に打たれる。圖書室の眞の意味の整理は其の先実である、そして此の眞の整理を成したものは全く我木先生及び諸先輩に外ならぬからである。

現在では新しい邦文雑誌が約五〇種に及つて日々医局を訪れるが大半は矢張り我木先生木村先生の御寄贈に因るものである。猶近時藤波先生よりの御援助があり多々益々辨ずる様になつたことは感言に堪へない。そして是等は酒井、伊藤西君が忠実に整理せらるるので自分の用は最早無くなつた。

又圖書費としては最近木村先生村山氏の御寄附が合計数百圓に上り大部の費

重書の出現を待ちつつある状態にある事を改めて此處に誌し感謝の微意を表する次第である。

茂木外科の隆盛と共に圖書室は益々栄え行くであろう、燈火親しむべき季医局員諸兄の御勉強を祈る。(終)



涙して

と題して

顯坊記

「涙して」と題して安つほい感傷を賣り物にしようとするのではない。フォルマリンのむせ返る様なひどい臭にほんどに涙を流しながら、グロテスクな標本の中からナンセンスを書いて見ようといふのである。

「十年一日」とも云ふ、「塵つもつて山となり」とも云ふ。その一日の様百十年間に我が外科に於て取り出した標本がざつと二千一百點。原簿もなく、分類も確かならざるの時に、兎も函整理にとりかかつたのであつたが、勞多くして切少く、未だに満足な結果を得られないのは、誠にお恥しい次第である。殆ん

と同時に手を付け出した圖書の方は、分類も出来、原簿も出来、カード式索引まで完成して居るのに、こちらはやつと不完全な分類と、千九百三十年分までの原簿をつくり上げた丈で、おまけに顕微鏡標本の方はそれさへも出来てゐない始末、そればかりではない、不要な標本は山程あつても、時々提出を命ぜらるる様な重要な奴が散逸してしまつたり、標本係は何をして居るんだとどなられそうなのがして、泣き度い様な気持ちのすることさへある。併し今そんな繰り言を云はうとするのではない、標本を見ながら、そつと十年の推移を探ねて見ようと云ふのである。それは現今医局に居る人々に對しても何かの興味があるかも知れないし、又古い方々にとつては在命当時の思出を新にする機縁ともなるかも知れないと思つたからである。

先づ姓名もなく、診断も書かれず、日付もない様な一切探索の法を講じ兼ねる幾十の標本を取り除くと、兎も角診断の付いて居る（但し顕微鏡的のそれではない）標本が千九百三十年迄に二千九十九具、その中虫様突起突のみが千三百七十五具（これは千九百二十九年まで）で断然多い。次に多いのが乳房の百十二例と泌尿生殖器の百三例である。前者では瘻腫と診断せられたものが七十

三例で最も多く、外に腫瘍とのみ記されたのが可なりある。結核が四例、ペー
イエットが一例ある。一例の肉腫もある筈である。これ等の中高野じうと云ふ
入のが尤も大きい、大正十二年八月に出たものであるが横径約三十糎、縦径約
十五糎、腋窩腺の轉位もある。この手術はさぞみものであつたらうと思考する。
泌尿生殖器では男が殆んど大部分である、これは婦人科に對して男子科といふ
分科が無いのにもよる。しかも畢丸、副畢丸、陰莖が大部分で、つまり体表に
突出した部分及びその内容が一番多く標本を呈出するといふ事になる。而して
その又大部分が結核である。換言すれば突出部を有するもの即ち吾人男子は、
わけてもこの系統の結核に對して異常の関心を有するものと言ひ得る、腎臓は
僅に八例、~~膿~~膿腫が一例(結石)あるが其中五例迄が千九百二十五年以外のもの
で二十六、七、八年に各一例があるのみで現存では外科の手術場で腎臓に触れ
ることは絶無に近い。

卵巣は十一例ある、囊腫と、外妊娠等であるが千九百二十四年のヒペルネフ
ロームと、二十五年の腔の囊腫様拡張といふのが傑作である、但し後者は一才
の赤ん坊であるから、どなたの受持であつたか知らないが先づ罪はなかつたも

のと推定出来る。尚ほこの部では千九百二十七年の志村某氏の卵巢囊腫が尤も
尨大で一と抱えは充分ある。又齋田某氏の腎結石は手掌に漸く受けられる様な
見事なもの、山口某氏の^{膀胱}膀胱結石は小鶏卵大のもの四個に及ぶ珍しい逸品であ
る。近時こんなものに出會ふことは殆んどない。皮膚、皮下、運動器の九十七
例では余り珍しいものもないが佐藤某氏の^鎖鎖骨結核、劉王氏の結核性筋炎、中
村某氏の肋骨骨髓炎等が珍であらう。後者は岡市衛先生が報告されたものと思
ふ。次に八十四例中の全身病及腫瘍では悪性腫瘍の肉腫が最も多く三十六例も
ある。その中黒色肉腫が二例ある、珍しいと言へよう。尚ほ千九百二十五年に
中井某氏の下唇の腭脱疽がある。確定する位受持匠は相當苦勞された事とお察
しする。三十年に至つて大網膜及腹壁のペラゴニミアーズといふのが出た新
しいが珍らしいと思ふ。中村玄八君が報告した例である。血行器及淋巴系統の
六十九例では腺結核が一番多い。動脈瘤、靜脈瘤などもちよいちまいある。パ
ンチ氏病の大きな脾腫が二つある。消化管では口腔及その付属器より胃に至る
までは腫瘍及囊腫ばかりといつてもよい位である。所で切除した胃がどれだけ
あるかと云ふと、二十九例しかない。勿論散逸したものも多少はありませう。

この中には所謂幽門瘻といふものもあらうと思ふけれども、幽門瘻として切り出したものが外に三例ある。その中一例は日本住血吸虫卵を介在するもので筆者が一審辯じたものです。又舌瘻、口唇瘻、上顎瘻が合計十二例あり、珙瑯腫二例は川上漸教授垂涎の品で或る日先生は標本室に立ちよられ、この標本を見て、「小野さん！何時ごろは、いかに行きませすか？」と問はれた代物である。説明する迄もなく、その時分に未だ泥棒をして行くかも知れないと云ふ警告である。虫様突起を除く腸管五十七例では大部分が腸重積だが、直腸瘻が十例、日本住血吸虫卵による結腸瘻が一例ある。これも横山虎男先生によつて報告された。又メツケルの憩室炎が二例、S字部瘻一例が珍らしいものです。尚ほ腸重積で腸管の切除したものとは近頃は殆んどない。大部分は同時に行つた虫様突起切除の標本であるが、その他の標本は殆んどすべて古い時代のものに属する。手術せられた方、又は受持られた方はどうぞ其の頃の光景を思ひ出して下さい。肛門の標本は肛門の入院患者が多いのに比較すると驚く程僅少である。肛門瘻は一例あり、犬圭コンヂロームも一例ある。尚ほ肛門内異物として鰻の骨があるが、これは筆者が三年のホツクリで見つけたことのある例で、標本を見る

度に當時を思ひ出します。先生はなしか関先生でしたらう。肝、胆、脾、腹膜、腸間膜を一所にすると、ヘルニアもここに算入して五十七例ある。大部分がヘルニアであるが胆嚢炎、胆石も割合に多く十五例十八例ある。腸間膜嚢腫が三例あるがこれは戸田先生がよく御存知の善である。外に特發性總輸胆管拡張といふのが一例ある、波邊治生先生が報告されたと思ふ。甲状腺は三十二例、パセドールが五例、他は單純の甲状腺腫と記されてゐる。千九百二十七年の赤荻をかさんの甲状腺癌が唯一の癌腫です。神経系統の十七例では脱疽の治癒としてとり出した神経節が腹部二人三例、腰部又は腹部と書かれたものが四例あり、神経腫が四例等である。呼吸器では僅に一例、木村先生御令息進君の毛細管氣管枝炎の剖檢標本があるだけで、鶏の卵の様な可愛らしい心臓が永久の収縮を続けて居る。畸形及外因によるものでは二十七例ある。これはもつとずつと多い筈であるが異物が他の場所に登録されたり、不足の手足がゴロくして居たり電氣火傷があつたかと思ふと、レントゲン潰瘍が皮膚に入れてあつたりする始末で標本係の頭の悪さを証據立てて居る。その中陰莖被鉄輪は木村先生が度々謙義に引き出されるもの、又新しいものだが鎖肛の手術後死んだ子供の剖檢

標本で「重複陰莖、單純性鎖肛、三陰囊（但二單丸）二腔心、三葉左肺」といふ素跡しい重複畸形がある。

さて我外科も年々患者の数も増え昭和五年には標本係に廻された通知票が五百九十九票に達し、この中には勿論プロベステイツクの分もあり、過半数が虫様突起の標本である。これ等の標本を処理するのに昭和五年度に請求した物件を善いて見ると、パラフィンオーフエーン一台、顯微鏡一名、フォルマリン三壺（壺は泡盛の壺の如きもの）、パラフィン硬軟取りまぜて三ポンド、九十六多アルコール四鐘（石油鐘と同形）、純アルコール七千五百、炭酸瓦斯ホムベ四本、メルクのメキール五百、オブエクト八千枚、デツキ五千枚、標本瓶大小百八十、別に虫様突起用三百等、等、等で、再製出来るものは小野さんがせつせとやつてゐてくれる。

これで一通りお話したわけになるが、もつと面白いもの、参考となることもうんとあると思はれるけれども、急に思ひ立つて充分の用意もなく書き出したので、まるでつまらぬ雑文になつてしまつたことをお詫びする。

x
x
x
x
x
x
x
x

標本は生きた史料であり、温故知新のよすがである。係に在る人も、ならぬ人もこの辺の消息を充分に理解して欲しい。(一九三二、一一、一五。)

醫局便り

十一月廿五日。伊豆ニ大震災アリ即時救護班出張ス、我ガ外科ヨリ岩原君大イニ活動セリ。

十二月十三日。謝恩忘年觀劇會ヲ歌舞伎坐ニ開催ス

十二月十八日。抄讀會

十二月二十四日。伊藤君ヲブスニテ入院

十二月二十六日。鎌田、桑野、今井、四條、山本、三橋、達部諸先輩ヨリ御歳暮ヲ頂ク

十二月廿九日。吉岡君赴任ト決定、橋本君兵役ヲ終リ出局、送別除隊歡迎會ヲ催ス

昭和六年一月一日。吉例ニ依リ医局新年祝賀式ヲ手術室ニ舉行ス。諸先輩ノ出

席アリ、余興福引等アリテ新春ヲ壽ク

一月八日。横山君ヘルニヤト痔核ニテ入院手術ス

一月十七日。茂木先生御招待新年宴會ニテ一同御招待ヲ受ク、第一會場志美津
天麩羅大食懸賞會、第二會場玉木座工口カンス觀賞會、腹ト胃口共ニ満腹ス

13	木村川博	横網
11	酒香欣朗	大関
9	町光謙二	關脇
9	川田坊正雄	小結
9	寺嶋恭三	前頭
9	小嶋則太郎	〃
8	瀬尾崎隆三	〃
8	橋山又吾	〃
8	野村嶽	〃
7	于ヨシ岩鶴	〃
7	福山實隆	〃
7	紫外山 ^{實隆} _{謙三郎}	〃
7	相見川三郎	〃
7	太郎山太郎	〃
6	鳥森 太平	〃
6	豊森 太平	〃
4 $\frac{1}{3}$	布留崎效	〃
3	横山 處雄	〃
休	君ヶ井 正	〃
15	神山致雄	横網
11	原錦玄名	大関
10	古川 明	關脇
9	信嶽勝郎	小結
9	百ヶ溪定比	前頭
9	森武蕙效	〃
8	鎌ノ里 仁	〃
8	林渴利雄	〃
8	小澤難雄	〃
7	前田川和輝	〃
7	吉ノ山 史朗	〃
7	中ノ村 玄人	〃
7	堀田山盛二	〃
7	藤ノ里 豊	〃
6	藤ヶ原道純	〃
6	田村英信介	〃
5	渡ノ川 性生	〃
3 $\frac{1}{3}$	小武藤 藤太	〃
休	鍋ヶ島 勲	〃

一月廿日。抄讀會

一月廿四日。弓削君宮崎赴任ノ夕メ御園軒ニ於テ送別會ヲ開催ス

一月廿一日。橋本君アツペニテ入院手術ス

二月一日。田村君入營ス

二月三日。整形外科集談會（第五十六回）本院階段講堂ニ於テ開催ス

二月十六日。神山敏君アツペニテ入院手術ス

二月十七日。吉崎先生ヨリ龜味淋付澤山御寄贈ヲ受ク。一同舌鼓ヲ打ツ。

二月十八日。抄讀會

三月十五日。井上君小樽病院赴任ノタメ送別會ヲ澤田屋ニ於テ開催シエロレビ

一ノ余興等アリテ盛會ナリキ

三月十六日。露國商務官アニケーフ狙撃サレ入院ス

四月一日。東京大學ニ於テ第卅二回日本外科學會ハ坂本會長主宰ノモトニ開催

サレ吾ガ送局モコノ一年間ノ研究ヲ発表ス

四月一日。柳橋二兼ニ於テ同窓會開催ス。同窓會一同出席シ余興等アリテ賑ヤ
カデアツタ。

四月十一日。新入局諸君歓迎兼林君送別會ヲ伊東熱海方面ニテ行フ

四月二十日。井上氏ヨリ数ノ子来ル

四月廿三日。抄讀會

五月六日。吉野史朗君嚴父死七、一同哀悼ノ意ヲ表ス

五月十五日。加藤 小野田西君二年現役ヲ終リ本日ヨリ元氣ナ顔ヲ医局ニ現ハ
ス

五月廿一日。抄讀會

五月廿二日。外科集談會各ガ教室當番ニテ總動員ニテ會ニ當ル

五月廿五日。百溪君特選研究生ニ推薦サル。芝浦雅叙園ニ於テ祝賀會ヲ開ク

六月五日。婦人科對ホートレース、第一、第二選手共ニ優勝ス

六月六日。藥物對ノ庭球決勝ニ於テ三對二惜敗ス

六月八日。開局紀念祝賀式ヲ手術室ニ於テ舉行ス、坂木先生始諸先輩出席セラレ
盛會ナリキ

六月十三日。前醫學部部長北里先生腦溢血ニテ急死サル、医局員一同謹ミテ弔
意ヲ表ス

六月十八日。抄讀會

六月廿六日。對小兒科決勝戰ニ於テ外科惜敗ス

七月八日。渡邊君、加藤君、小野田君送別觀迎會ヲ病院職員食堂ニ於テ舉行ス
 七月九日。例年ノ如ク富士救護班先餐小野田君出發ス

七月十日。暑中休暇

七月十八日。渡邊君新妻御同伴館山病院赴任サレ一同西團駅ニ見送ル

七月三十一日。森田婦長骨折入院ス

八月九日。茂木先生御宿ニ御招待舟遊一同一日ニテ黒入トナル。

八月十日。井上氏ヨリ煉製糖ノ寄贈ヲ受ク

八月十一日。暑中休暇半部交代ス

九月一日。大震災記念日ニツキ午前十一時五十八分ヲ期シ一同医局ニ於テ一分

間敷橋ス

九月二日。木村博氏歳又逝去ナル。謹ミテ哀悼ノ意ヲ表ス

九月十一日。暑中休暇終了、全医局員元氣ナ顔ヲ見セル。

九月十二日。大々學リ一グ戰開始

九月十三日。戸田氏ヨリ梨ノ御寄贈アリ

九月十八日。栗本君アツペニテ入院手術ス

九月二十三日。抄讀會、閉會後御宿ニ於ケル舟遊ノ瀬尾アロタクシヨンノ試駕會アリ

九月二十五日。芝増上寺ニテ解剖祭アリ

九月二十七日。對青山外科カツプ争奪戰、五種競技ノ内ホートレースニ於テニ

シートノ差ニテ破ル。木村先生ヨリ香典返リトテ五十圓寄附アリ

九月二十八日。柳橋二葉ニ於テ大養先生送別會ヲ開ク、茂木先生始メ医局員一

同出席、開山居士ノ医局ヲ去ラレル事ヲ悲シム。今後ノ御奮闘ヲ祈ル

十月一日。大養先生退職紀念トシテノ御寄附アリ

一金貳百圓 圖書費

一金百圓 医局費

十月九日。杉崎きん氏(ヘに号下主任)永眠ス、謹ミテ哀悼ノ意ヲ表ス

十月十一日。對青山外科カツプ争奪戰ヲ行フ、残念ナラ勝ヲ讓ル

成内君アツペニテ入院手術ス

十一月廿六日。佐藤太平氏嚴父死亡サレ、一同謹ミテ哀悼ノ意ヲ表ス

謝恩觀劇會の記

六四

昭和五年十二月十三日、外科医局諸先輩及医局員一同、茂木先生御夫妻の御出席をお願ひして歌舞伎坐に於て謝恩觀劇會を催した。

幕の前から先生の濕額を拜することの出来たのはうれしかつた。一番目は左團次主演の荒木又右卫門、寛永十一年十一月六日の午後、大和の團笠置山の麓由緒ありげな辻堂などがありますと云ふところから始まつて三幕七場、上野城下鍵屋の辻で渡辺数馬は目出度仇を討ち、勘兵衛夫妻の駕籠が留を飛んで大坂に行く所で終り、中幕、新宿夜話の前に一同食堂に行つた。年に一度の謝恩の夜と云ふので杓子の柄を析る程に食欲を上げしくされた先生もあつたと云ふ事である。左團次の甚五左衛門、猿之助の弟大八、信濃屋の抱妓お蝶は松蔭、享保の頃の新宿色街の喧嘩の話、二番目は又伊勢屋、宗十郎のぼ次郎で三幕九場不幸な傳次郎も積んど善行の報で再び浮き上り南の風が吹く様になつた。

先生も最後まで御機嫌で御覽下すつた事は我々一同の心から感謝する所であ

一七ノ外
幕間には茶を喫するものあればしる粉屋に入る者もあつた。中には賣店で莫大な御土産を御購入相成り、茂木先生令夫人のお目に止り最も善良なる御父様並に御良人なる事を稱賛せられました方々もあつた。 終り

モダンクリニックを誇る吾が外科教室にては今年三本の教材映画が出来ました。

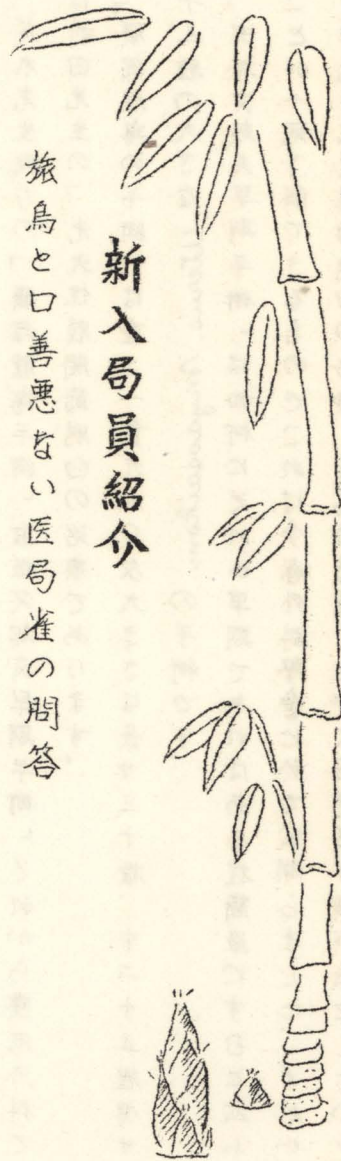
茂木先生執刀の「腹部腫瘍手術」虫様突起炎早期手術」それから整形外科では前田先生の「先天性股関節脱臼の治療であります。

「腹部腫瘍の手術」は重さ一貫九五〇匁大さは長サ三十釐、巾二十五釐厚サ十五釐の大きな *Uterus, Myosarcoma* の手術です。

「虫様突起炎早期手術」は如何にそれが早期であればある程簡單にすむと云ふことが一死了解できるものでこれは今春外科學會に於て公開しました、それから「先天性股関節脱臼の治療」は其の整復、ギプス固定及び後療法としてのマツサージ及び歩行器使用等の實況をしめたもので、何れも學生への講義又一般

への講演として中々重要なる使命をばたして居ます。

六六



新入局員紹介

旅鳥と口善悪ない医局雀の問答

鳥「やあ、しばらく、どうだね医局の様子、俺の留守中に少しは変わった事があつたかい？」

雀「例年の通り四月十日から新顔がふえたよ」

鳥「うんそうだろ、して今年は何回生だね、何人かしら」

雀「今年は何人さ」

鳥「名前は何？」

雀「いろいろは順で、濱名元中」

若林 舜爾

神山地真氣

成内穎三郎

村山 成一

粟本勝之進

笹島孝次郎

島田 信勝

カコフン、面倒くさい名前ばかりだね

ス「あ、一寸読みにくいのがあるよ。」

カ「もう入つてから八ヶ月にもなるから大体はどんな人物かわかつただろうから、一ス一ス例年の通り解剖して見してくれ。」

ス「第一番が寝名君だね……し」

ス「彼氏は美男だよ、若様だね、口の悪い奴はお平の長羊だなんて云ふだね、これも又根拠のない事でもないんだよ、實は口の利き方がとつてもあまいんだからねし」

カ「ぢや人間其のものが柔いんだぬ」

ス「ところが其の又對さ、硬い事く先づ酒も煙草も眞つ平と云つた型だぬ

現代青年の模範だぬ」

カ「カチンくかい」

ス「それでぬ相等に話ば明かつてるんだよ、唯自分が硬い丈で決して人様にまで強ひる様なことはないからぬ」

カ「いやに肩を持つぬ、ありまりお世辭ばかりではなく一寸辛癖な所もやつてもらひ度いぬ」

ス「人間は前にも云つた通り、とても丸いんだよだけどぬ、あんまり丸いと轉り過ぎると俺は思ふんだ、あんまりおとなしいのも一寸どうかと思ふぬ」

カ「他には」

ス「彼氏シヤツクリの大家だよ、どんなシヤクリでも既に研宥すみとあるよ」

カ「何処の人だい」

ス「生れは茨城、出身は下妻中學」

カ「ではお次若林研爾君の番だ」

ス「顔貌稍蒼白にして一見して其の性格を現して居るぬ」

カ「呑助かい？」

ス「其氏は敢て否定もしないぬ、が其の性格と云ふのは酒の誑ぢやないよ、其の物事に熱中する感情を示すぬ。」

カ「熱血漢かい」

ス「よい意味のそれさ、一般には熱血漢と云へば一寸そそつかしい方だがぬ、

吾が若林君は理性が克つて居るからぬ、

カ「特徴はどうかぬ」

ス「要するに穏和な性格だぬ」此の瀆名、若林の二人の區別は一寸むづかしいんだよ、よく医局の人が間違へるんだよ、時々滑稽な事件が起るよ、それに仲間同志ではぬ、先輩高橋福三郎先生とよく間違へるよ、手術場で手術衣を着てる時にぬ、後姿がそっくりだよ。」

カ「他に何かないかい」

ス「運動に多藝だよ、表藝のテニスよし、野球競走何でも来いだよ」

カ「では体は大きいぬ」

ス「うんにや所がどうして中肉中骨と云ふ所だよ」

カ「で出身は」

ス「徳島生れで徳島中出だよ」

カ「次は神山地眞氣君だね、神山敏雄先生の弟さんかい？」

ス「ウウン、讀み方がちがうんだよ、敏雄先生はカミヤマで、千マキ君はコウ

ヤマさ」

カ「美味しそうな名だね五月生れかい」

ス「お相悪様六月生れだよ」

カ「どんなんだい」

ス「ロイド眼鏡のハイカラさんだよ、髪の乱れを見せた事の無いと云ふ身だし
なみのいいんだよ、少しは見ならつたがいいよ」

カ「餘計な事を云ふな、そんなキテンとした人はつき合ひ悪いだろうな」

ス「あんたは人を悪くしよう／＼としてるね、却々朗らかな人好きのするお医
者さんだよ。しかも近々に何かあるかの噂さへあるんだもの御機嫌の悪かろう
筈はないよ」

カ「御目出度かい。」

ス「まあそんな所さ。」

カ「ついでに聞いとくが独り者は何人だい。」

ス「何人かつて、七人半さ。」

カ「七人半？」

ス「神山君が半分さ、あとは皆さん一人宛だよ。」

カ「一へづつつてのも変だね。」

ス「揚げ足を取らないでお嫁さんでも世話して上げろよ。」

カ「冗談は抜いて神山君とはどんな人だい。」

ス「此の人も才能だね、敢て才能と云ふね、テニス、陸上競技、野球水泳加ふるに……。」

カ「はつきりしてもらひ度だね、大概わかるがね。」

ス「エエと、大隈生れの塚中出だよ、お次は成内頼三郎君ですよ。」

カ「先廻りしたね、遠慮なしにやつて呉れ給へ。」

カ「目下天現寺の寄宿の主のやうな存在だよ、予科一からだのからね。」

カ「特長は、」

ス「話のよおく／＼わかる人だよ、時々先方よりよくわからなかつたり何かしらまふ程だよ、江戸つ子肌のチャキ／＼だよ、」

カ「趣味は、」

ス「日本趣味だろうね、舶来も嫌ひぢやないらしいよ、」

カ「十ナンだい、それは、」

ス「お酒の話だろう、」

カ「アアそうか、わかつた、彼氏好きなんだね………」

ス「生れは八王子、府立第二出身だよ、」

カ「まだ聞くことがあるんだよ、運動の方は、」

ス「そう／＼此の方面でも大したものだよ、先輩S先生と共に押しも押されもしない山の人だよ、冬になればスキーに乗るのが仕事だと思つてるんだよ、でも今年最近アツペを切つたばかりで、元氣はあれど体が云ふ事を利かすてしよけているよ、」

カ「他に好きなものは、」

ス「活動とスポーツとそれから……とそれ丈けかしら……生れは山形だし
鶴岡中學出だがね」

カ「フンフン……では次へ」

ス「村山成一君、体の大きな人だよ」

カ「長いのかい」

ス「長いのは後の方にとんでもなく長い人が居るけれども、大きい人だよ、体
中がね、わかるだろ」

カ「ウン／＼で元氣かい」

ス「元氣だよ中々ね、とても要領のいい方だよ、野球のスティールなんかしつか
いしたものだよ」

カ「野球が上手かい」

ス「やるんでなくて見る方だよ、でもね仕事の方ではそんな事は一切しないよ
平常ヌーとして居るけれど、よく圖書室で書物に嗜りついてるよ」

カ「廣い意味での趣味は」

ス「スポーツだね、自分でもやるし、見もするし、野球なんて殊に好きだね又

ホートレースにはなくてならぬ運漕だよ

カ「出身は」

ス「新潟の長岡中學」

ス「次は栗本君だよ、この人も多藝だね、陸上の總てのもの及び水上にまで及ぶよ」

カ「特長は」

ス「そうさね、歩きつかりに特長があるよ、一寸前かゞみでね、早く云やお尻が出てゐるんだよ、でもね、九月の末にアツペを切つたんで未だピンと伸びて歩かないのかも知れないよ」

カ「生來の癖だろう」

ス「はつきり言はないよ、東北人特有の言葉つきだよ、だけど御本人さんは一寸も氣にしてゐないから、からかつても張り合がないよ、枕名もそんな方からついてゐるんだとさ」

カ「得意は」

ス「愛橋のあること、いつもニコ／＼してゐるよ、それに前にも云つた何でも御

本調子でなく先日も咽喉を痛めて弱つて居たよ
カ「そんなに皆さんアツペをやつたのかい」

ス「なに、この二人だけだよ、医局へ来てやらかしたのはぬ」

カ「ではと、お次の番だよつてことにしよう」

ス「世島孝次郎君だね、とつても長い人だよ、六尺にはあと四分足りないんだ
とか云つて居たよ、先日整形でぬ、六尺になつて見たいつて願を掛けて斜面懸
垂つて奴をやつてたには呆れたよ、だけどこれも整形の話だけど相撲の朝潮ぬ
元の男女の川さ、あいつの末を時には流石の彼氏も月光の前の星の様だつたよ」
カ「長い丈で能なしかい」

ス「萬更捨てたものでもないらしいよ、何でも學生時代には水泳をやつてたど
かであるで河童の子見たいだよ、風呂から上る時は必ず水を浴びるんだよ夏は
いいけれど冬になつてもやるんで他人迷惑だよ、先日も風呂で「君は水にさへ
入つてれば氣嫌がいいんだぬ」なんてやられて居たよ」

カ「泳ぎは速いのかい」

ス「ウンニヤそんなに速かないよ」

カ「泳ぎだけかい」

ス「ホートもやつてたんだよ、兎に角水に縁の深い人間だよ」

カ「では出身は」

ス「東京生れの普通部育ちだよ」

カ「最後は島田信勝君だね」

ス「唯一の甲種合格だよ、去年二月に入営だよ、それで当人張り切つて居るよ」

カ「どんな人だい」

ス「此れ又隅におけない所か臭ん中でも役不足の様な多藝多趣味の人だよ」

カ「煮ても焼いてもつて口かい」

ス「云ひ様によればね」

カ「いやに悪はせ振りだね」

ス「お座敷藝術からスポーツ、勉強なんでも来いだよ」

カ「可成り面白そうなんだね」

ス「一寸見るとどつしりした苦勞人だね、それが一朝……の力を借りると俄

然朗らかになつちもふんだよ
カ「やつぱりたのよく利く方かい、
ス「でも今では何でも神棚へ「禁酒」とか「セツシユ」つて張紙したとか云つてゐたよ、

カ「近酒に接酒か成程ぬ、それで、

ス「おつと皆まで云はずとよろしい、生れは福島、普通部出だよ、

カ「此れで一通りすんだと云ふものだね、だけど一寸褒めすぎた感がありはしないかい、

ス「そうだね、でもぬ永い間居るんだからこれからよくベオバハテンすればいいよ、

それについて、面白い表を上げよう、僕の種類法によるものなんだよ、

A、 八人の新入局員鑑別法（下に記せしは九回生公認通稱）
眼鏡を掛けざるもの

1. 体軀偉大なるもの

ヒボタタマス 村山

II. 顔面蒼白なるもの

庶務長

七八

若林

B. 眼鏡を掛けしもの

I. アツペをぶら下げて居るもの

a. ロツぷりの甘いもの

會計課長

浜名

b. 朗らかなるもの

ぬけさん

島田

c. 落ち付いたもの

町長さん

神山

II. アツペなきもの

a. 頭尖りたるもの

キン干バ

栗本
成内

b. 脚太きもの

セン公

c. 細長きもの

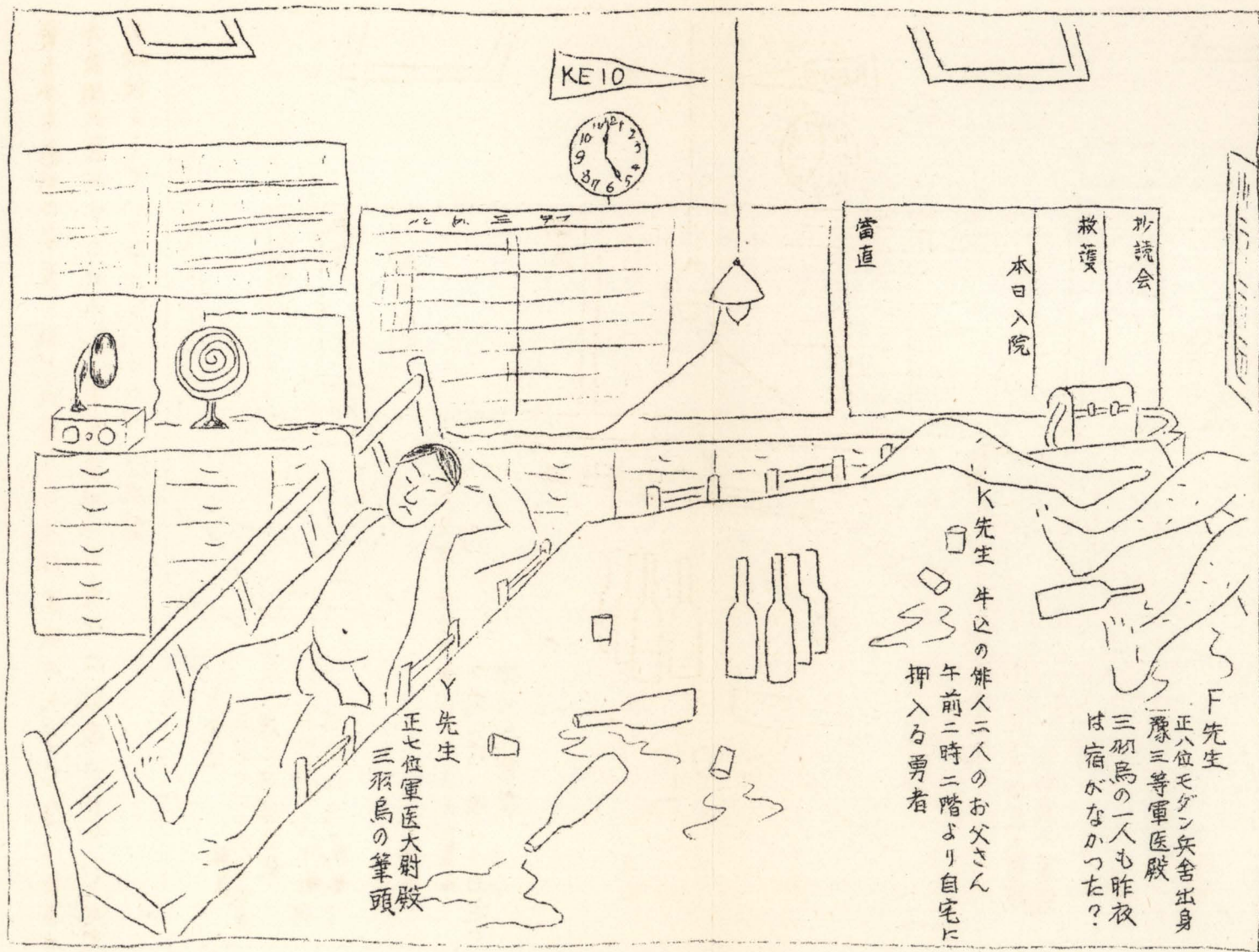
おきん

笹島

カ「成程こいつは便利だ、ではもらつて置くよ、アバヨ
ス「一寸一寸待つて下さい

今僕の云つたことは一切公開しないで下さいね、

カ「どうして、刀林の編輯員から矢の催促だやつと今迄の話で原稿が出来た



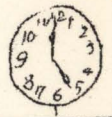
昔も今も医局の姿変らねど只変りたるは黒板の大きくなりたると
 外套棚の整列するのみおつと失敬第一の変化は従來の「メガホン」文
 の相役として「ラヂオ」の「ラッパ」の出現

F先生
 正八位モゲン兵舎出身
 豫三等軍医殿
 三羽鳥の一人も昨夜
 は宿がなかつた？

K先生 牛込の俳人二人のお父さん
 午前二時二階より自宅に
 押入る勇者

Y先生
 正七位軍医大尉殿
 三羽鳥の筆頭

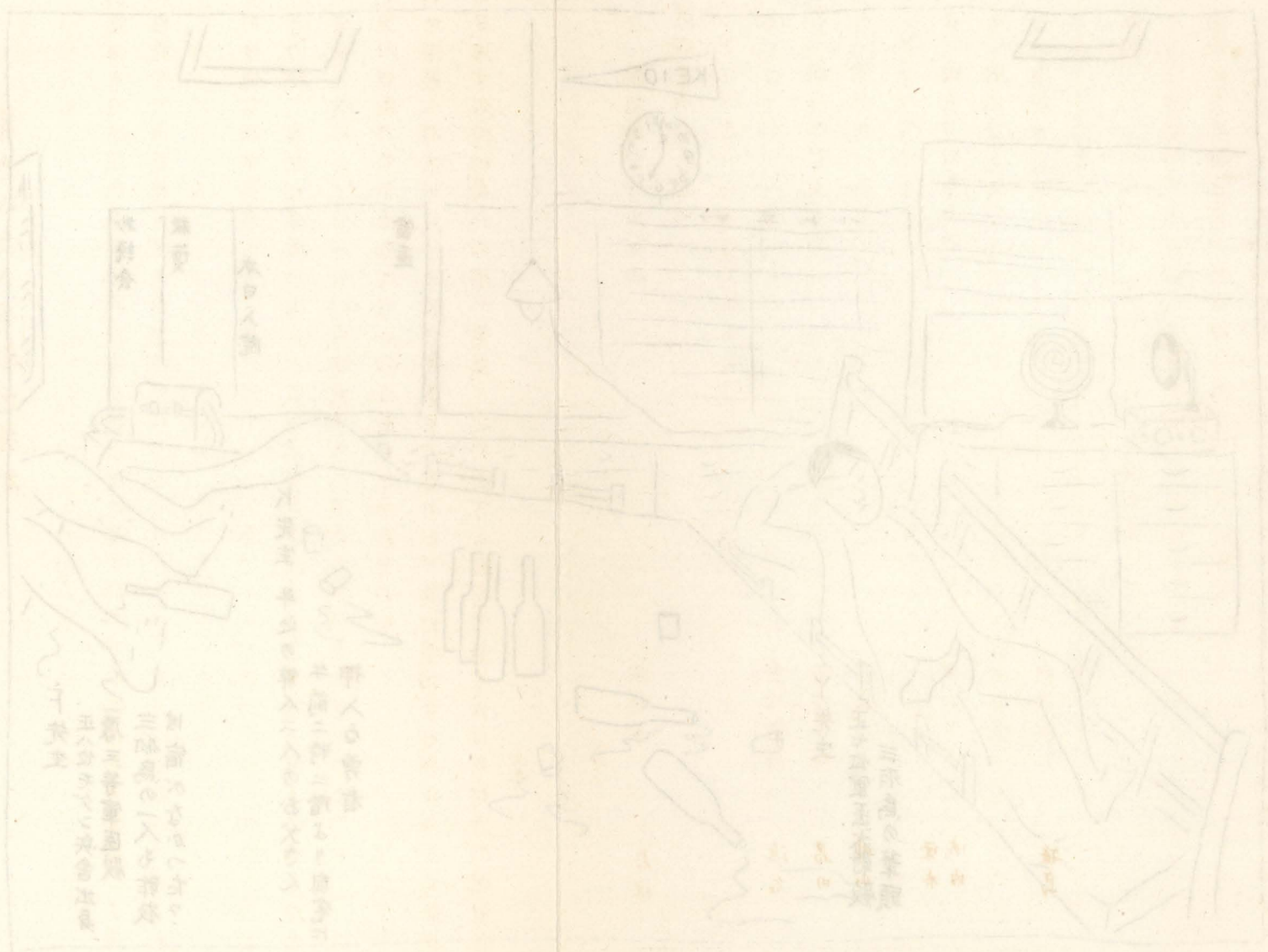
KEIO



當直

抄読会
 救護
 本日入院

の跡始「J」の「モキ」の「モ」の出
を各階の壁に貼するのよは「う」夫は第一の妻は白粉米や「入」水「文」天
昔と今と「理」の「突」突は「時」つ「只」更「く」さ「る」新「東」郷の「大」ち「ん」さ「り」式「る」



研人の書
二箇二箇ニ割る「時」
才美主 半少を「入」入「の」は「文」
割「の」は「の」ハ「オ」マ
三味「の」ハ「入」ハ「オ」マ
五ハ「オ」マ「ハ」ハ「オ」マ
「オ」マ「ハ」ハ「オ」マ

「入」水「文」天
「入」水「文」天
「入」水「文」天
「入」水「文」天

んだ、何で内緒に出来るもんか。
口は禍の門、聞いた方は利口、うかくしやべつた方が阿呆、アホー、アホーく。

第九回 生入局 歡迎旅行

丁 H 生

時は陽春の候花到る処に笑ひ入亦到る所に酔ふ時天下に其の名声の高い吾等の外科教室では珍客を迎へた旅行が四月十一日十二日に亘り伊東熱海に催された。

之の愉快な非常召集は青くなる処がペンを棄てメスを抛つて持つ物は一斗盞とつまみ物、異様な準備のもとに威風堂々東京駅に向ひ混雑と騒ぎの中を煙と塵の東京を後にして早くも心は伊東の町へ湯女の町へと急ぐのであつた。

汽車の混雑の不平を言はないのは最もと合点される。

爾來伊東への旅行は一年越の懸案なのである。其に参加する今年の入局者諸君は見渡す処何れ真らぬ強か者揃、之に對する医局の者も云はれ付きの強者許

り、何れ無事に名まぬふ筈はない。

之の異様の団体の入々の面は皆元氣でしかも得意満面である端で見ると氣候の加減かなと思はれる位。実はそんな呑氣なのではないとの事如何に有効に樂しき一日を送ろうとするので深慮遠謀の姿を見せた処との事である。

汽車はそんなことにはお關ひなく時と共に田を越え川を渡り、山を滑り細雨降る中を熱海の驛に着いた。

稍々平衡を失つた此の団体の氣分は異常に昂り一番乗の氣勢物凄し眼の色変り三色旗のある自動車さへ分らず大きごつき。

暫時して七名の三色旗の自動車は滑り良く明日の宴會場の熱海を後に海上二里初島の青螺もほんやりと房總の連山は遠く水天駭駭にあるを頭に画き伊豆大島の噴煙も細雨の脂に見えず奇峭怪巖波と戯れる錦浦の勝地を左に途中町の入々の驚きの目の中に薄雲天城の連山を包み夕暗細降る頃に後から後からと自動車競争の様にゴールのカテナヤ旅館に入った。

之の伊東温泉は猪戸、松原、玖須美等に分れ、無色透明の塩類泉で胃腸病、関節病、脳病等に効があると云はれて居る。

地は名の如く伊豆の東端で前は相模灘に臨み、後に天城山、箱根山等の支脈を貫ひ海上三里の初島を首み、宇佐美の大崎、伊豆山、真鶴崎の黛影は繪の如く晴れた日には遠く三浦半島を指す事が出来る。

冬暖かに夏涼しく湯の湧出の豊富なる事と地勢が似て居ると云ふので東の別府と云はれて居る。湯の起原は清少納言の枕の草子などに散見し、鎌倉時代に入つては伊東祐親の祖父家次が此地を領して居たから祐親の時源頼朝之に寄寓し、種々のローマンスを残し更に日蓮上人の配流によつて一層歴史的色彩を見せてゐる。

玖須美の音無神社の森は頼朝と八重姫の傷まじいローマンスを語り、近時灰燼に帰した佛現寺は日蓮上人流藪の遺跡で上人の高徳を傳へ内に上人の眞筆の曼荼羅を藏して居る。

伊東祐親の墓は地藏原の丘上にある。

其他玖須美神社、東林寺、天狗の謝證文、潮吹岩、阿武丸造船所趾川奈のお岩窟、河津祐泰の墓、赤の宮神社、淨の池等の史杖地がある。淨の池は池水徹温で湯鯉、毒魚、迅奈良、蛇鱈等の珍らしい魚類が棲つて居る。

之の伊東への一番乗の切名者は定七郎君、後からワンサくと押寄せる無慮三十五名の猛者連、来るが早いか風呂に飛び込み磨きをかける者、悠然と見せて茶菓子に寄せて思ひを宴會の美妓に走らせる者、忍術使の如く風の如く消えし、早くも新聞地の名物を眺め、カフエーの情趣を探り得意の者来る可き嵐の宴會の前の静けさである。

型の如く宴會は始まる。本年は殊に前田教授の御出席を得まして、錦上更に錦を添へた感があり、亦林先生の送別を兼ねた會とて一層之の旅行が意義深く印象の深いものになつた。

宴會場が酒の香りでよくなる頃皆の五臟六腑はアルコール中毒者の様に意識と遠くなつて行く。加ふるに伊東選り抜き的美妓のもてなしは一同の魂迫も骨抜にせずに置かない程の猛烈さ。其の矯艶正に其の想像をだに許さない。中に酔つばらひの美人真紅の蹴出を意に介せず飛び廻る様は一同を益々喜ばせる。盃の往来烈しくなる頃伊東小唄、伊東音頭につれてK先生のカツホレは流石東京仕込一堂の人をアツとさせる。

踊りが始まる。例によつて疊上の何物かを探し求める藝当が始まる。美人を

推して口説く者座は丁度其の半頂天に走る。

やがて一角から度庵の應援歌が始まる。三々五々はね廻り舞り廻りして居る中に一人減り二人減りして兩の止む頃之の宴會場はヒツソリとしてしまつた。

突然電話のベルは響き渡る、スワー一大事と駈け寄れば

「モシ／＼幹事誌が違ふぞ」

「モシ／＼幹事〇〇を頼む」

「モシ／＼幹事酔ひて付が付けられん」等

夜が次第に更けて行くに連れて頼朝のローマンスを之の塩類泉に誇らんとする者江戸つ児の氣概を見せる者、何しろ之の珍客連は伊東の町にとつては枯木に水との事

之の珍客を包む伊東の町も静か夜寝に落ちた。明くれば昨日の騒は何処えやら一同の寝ぼけた目と同じ様に天氣はどんより風少し出て浪の音さへ遠く聞へて来た。

朝餉に珍談、珍対面を演じつつ一同天候と不良の為一碧湖の名趾も探り得ず廣大なエルフ場にも接するを得ず、只附近の名所を見、且つ北里先生の御庭園

を見物せるのみにて徒に時間は進み波浪高き爲め汽船行きを中止して思出深き伊東の町を後に自動車に分乗して匿路伊東の思出を熱海の貫つてお宮の物語りにはせながら鈴木別館に何ふ。

熱海町は東京に近く便利を爲め入出が多い。天氣の宜くない癖に団体客が多勢来て居る。然し吾等の一行風景氣の良い者はない。

正に天下でも取つた様な気持の者許り。自動車も之に連り込まれてスピード物凄く予定より早く鈴木別館に入る。

此処には温泉プールあり、丑突あり、一同の休む間もなく氣分の異なる亦新たな宴會が始まる。昨夜の騒ぎし一同元氣なく黙々として會が進行する。

之の沈黙を破つて急にはしやき始めた。見れば小妓の一人アレの〇〇に似て居ると云ふので大騒ぎ。熱海の名物美人が表はれる。

氣分の新たなる処に亦新しい氣勢が充る。實際連者なものどと云ひ度い。

医局の此の歓迎旅行の目的を充分果して夕方宴を開けて散會した。

東京の家路に急ぐ者、東京の地で新たなる進路を求むる者、熱海に尙も奥深く探検隊を組織せる一隊之等の謎を包んで四月十二日の夜の扉は開められた。

茂木先生御招待御宿旅行

茂木先生御招待御宿船遊び

八月九日午前六時半西園驛集合 七時出發

と医局の黒校に掲示されて数日後の朝避暑客の雑踏する西園駅頭に到着、カンカン帽の整裝の一團がある。これこそ茂木先生恒例の御招待に心からの感謝を以て應じた外科医局員、旧医局員、済生會外科医局員、其他本院事務、理學科勤務の人々凡そ五十名と、この行をいやが上にも盛にせんとする四谷津の神の女数名である。

「何時故つて来たし」「昨晩し」「あんまりゆつくりして居るので来られぬいのかと思つてぬた。何か好い事でもあつたのだろうし」「否や雨ばかり降つて居て内に許りごろごろして居たよ」前休暇をとつてすつかりエントспанネンした者と將に張り切つて了つた者との對話。

「マア一暫らく、近頃すつかりお見えにならないのぬ、何か好い所でも見つかつたのし」「そうでもない、忙しくつて、あつくつて……」でも時々位頻

を御見せになつたつて好いわし、商賣區域外に来て迄商賣氣を出不將者と心掛
けのよい御方との會話。

改札が始まつても仲々入れない。信濃町駅長の心配で吾々は特別扱ひの筈だ
がと各自一斗腕をさげたり風呂敷包みを持つたり、落ちつき拂つて改札を待つ
て居る間に乗客は皆居なくなつてしまつた。そして最後に吾々のために入口が
あけられた。既に改札口を通つて了つた乗客と同じ列車と知つて喫驚、特別扱
ひにも上と下とあるものかと考へて見る開眼もあらばこそ、飛び込んだ箱は氣
が付いて見れば汽鐘車に續く油煙の一番澤山飛んで來そうな所、今じ箱に入れ
ない者は次へ同乗者の張る驚異の眼もやつと廣々とした坐席をとつて居たのに
と云ひたげな顔も一團の眼にうつらない、只愉快が心にあるだけ。席の稍々あ
たたまつた。それでも三四回は停車した頃だつたらう、「今日持つて来たのは何
と云ふ奴だ、毒味はしてあるか知らし心の底まで見透せる程の意味を言外に含
めて言ひ出したのが生理のNG氏「嚴密にしてあるけれども再吟味と云ふものを
しても悪くはないねし「一本位少なくなつても構はないのだらうし等々提議と
も、賛成ともわからぬ中に酒盃は用意されて忽ち開始される再吟味、朝飯も濟

まさか西國驛の勢揃ひにはせつけた篤志家のため、万事万端心付く吾が親愛なる幹事が千葉で辨當、アイスクリーム、番茶等そ求めてくれる、「誰だ!! アイスクリームが一つ足りないぞ」、「俺は知らないぞ」千葉を過ぐる頃最初の一列車は全く吾々の世界になつた、箱の中央に起つた酒の吟味は、あちらにも、こちらにもメタスターゼを起して「悪くはないぬ」、「少し甘口の様だぬ」と如何にも研究的態度の言葉を耳にするかと思ふと高い声で「アラ!! いけないわよ、そんなことだろうと思つて今日ッロースニ枚もはいてゐるわよ」、「そんならこつちもくさくならないで安心だ」と低い調子の声で應酬して居る。

朝と言つても眞夏の事。いくら汽車が走つて窓から風が吹き込むと云つても熱に燃える外科匠局の人、嘗つては〇〇で有名であつた人達を満載して居る列車、涼しかろう等はない、然し折柄用意した扇を医局で置いて来て了つた事を云ひ出す人も、あついと云ふ人もない程一同全く愉快な氣分に酔つて了つて居るのだ、此処に新聞に雑誌に、居眠りつ靜的愉快をむさほりつ、ある者あるかと思へば彼処から、わい／＼と騒ぐ声がびじく、抱札をめぐつて故意か本心か敗けて女から手をたたかれ、「誰か代つて呉れ」と悲鳴をあげつつも決して止め

様とはしないMF氏、「浮氣するとフラウに云ふぞ」
「註！フラウは次の列車に乗
つて居る」とおどかされつつ敗けつづけて手首をさすつて居るOI氏

吟味のつもりで始めた吟味が吟味でなくなり、いとも朗らかな氣持で「今日
はH先生が當直で居ないから淋しいだろう」と酔ふと悪い癖を出す津の神女に
からかひつつ酌をさせるNG氏、「浦安で小使しようとして海へ落ちたのを助けた
命の恩人だ、挨拶位赤てもよさそうだ」と花札引いて居る、若くて美しい女に
うそぶいて居る濟生會のKT氏「酔つちやつたら海へ入れないぞ」「海なんか入
らず留守番して飲んで居る」とVS NGの西氏

車中和氣霽々暑さも忘れ、千葉辺りから乗り込んだ濟生會のKT氏に挨拶する
事もなく、どんな所を何時間走つて来たかも氣付かぬ中にいとも朗らかに、い
とも賑やかに氣分で目的の御宿へ着いた。

十一時頃であつたらう。

坂本先生、奥様、お嬢さん達に迎へられて一升瓶肩にステッキ振り振り砂つ
ぽい小道を潮香に海岸に生垣をめぐらし、廣い庭には芝生ひきつめた清楚な先
生の別荘へ。

米水の御心盡しを受けることこそそこにて庭のあちこち、座敷の隅々までほつぽつと海水着に着換へる。先生の指圖で今じ様に生垣を圍らして居る別荘の間を半町も行ききれない水のテヨロク、流れる小川に沿ふて右へ折れるとなどらかな砂丘を越へて濃紺の海面が眼下に展開される。汀に立てて見る数町の階隔き置いて突出する二つの岬によつて抱かれた砂浜。岬の根元の二三の漁家、休憩所らしい急造小屋の外目にとまるものもない。八月の陽に照らされて白砂飽く造もあつく、陽炎さえ立てて居る。水にたむれる女児童にも眼に立つ程々バク、しい海水着をつけた者もなく設備としては名前だけの様な見張り櫓が一つ、非常にあつさりとした気分になる、一同揃つて目じるしの鉢券きをして水に入る。水はきれいだがとてもからく、眼へ入れれば開けて居られない程痛い泳ぐには少しく荒く、波のりをするにはあまりに静かな波だ、やがて一人上り二人あがり、熱砂に身体を埋めて日光浴を始める。その中茨木先生もお嬢さん達と連れ立つて来られ、佐藤先生造水の誘惑に負けて皮膚の癢痒を氣にされ乍ら之亦海へ、同行の女、海水着の古い事を残念がる事甚しい。海水着を貸してやるといつても「でも此処では……」と何のためのはじらひか、親切を無にす

る事も甚だしい。

九〇

水に砂に雑談にふける中突如海水浴場の興味を一ヶ所に集めたかの如き感ある事件——と云つては余りに針小棒大になるかも知れないが兎に角浴客の注意を引き、人々をその周圍に引き寄せるに充分な興味ある催が始められた。それは外科医局相撲大會である。演車の中では留守をすると云つて居た肥つたYS氏と医局でも衰せ型では代表的なKM氏との肉弾戦、腰投げ打つても腰弱く面入つぶれて砂まみれになる。

MF氏の首投げに首をさすつて憤慨するFF氏、足取りの上手なKT氏、大間格のNT氏、何れが勝つも敗けるも、その格橋の面白さ、呼吸はづませる姿に見る者すべてが拍手をおくつた。相撲に水泳に興味がなくなつて初めたのが関東關西対抗裸体の野球!!手さばき妙にYS氏の球審、壘審の兼任、回数には四回打てば草履をバタ／＼させながらも走者は本壘に届つて来る、陽はギラギラして仰げば選手の眼のくらむ為だ、技能拙劣のためではない事筆者確言、接戦に接戦、関東軍の主將MF氏の奮闘の幼もなく遂に惜敗、強い陽から舌々、裸体の見物人をおぼふものは只急造の葦簾張りだけ、辛い海水を飲んだためばかりではなく喉

の乾くこと夥しく先生宅から運ばれる飲料水は見る間になくなる、見物も百か
く、に苦しい、その苦しきさも知らぬ風に氣持好さそうに葦簾の下で眠つて居る
人が一人。

野球の試合終れば水泳と、喫の盡くる所なく見えた時引きあげて未る様にと
の先生宅よりのお知らせ。

やがて宴會がはじまれば御馳走澤山酒あんまり、空腹に疲労と重なつて通帝
の謹嚴もすぐ破れ、寸時した朗らかな氣持

「茂木先生萬歳!! 万歳!! 万歳!!」 医局独特の三唱後 T 氏リーダーの下に應援歌
の合唱、さては座敷藝だけでは物足らず庭にとび出して酋長の娘ダンス、佐渡
のおけさ、伊那節、草津節、さては踊の名人、前医局長 R 氏のオイトコ節この
間盛に活躍する瀬尾プロダクション、喫は益々つにつて先生達が庭に下りて、子
トコトコ口目隠し鬼。

總ての歡樂につかれ切つて体を持ちこたへる力も失ひ庭のあちこちにごろご
ろと寝そべる様になつたのは夕鶯の靜かな漁村を押しつつむ頃。

すべての理想は高く華やかと教へるが如き煙花を後に房總廻りをすると云ふ

YS氏KM氏YT氏MG氏と別れ電燈のぼんやりとする御宿驛を出發した。

亨樂しつつした後の無愁状態に在る五十餘名を乗せた廢車はまつじぐらに闇を這つて帝都へと走る。朝に比して全く静寂な車中。二等車に乗つた洋装婦人の変化極まりないポーズ、その度毎に振りまくシタイ、シュウタイにとろりとした眼を無理矢理に開かざるを得なかつた幸運児が何人あつたか。

斯くて恒例茂木先生御招待の旅行は愉快に終つた。

筆者云ふ迄もなく医局は一家、医局員は家族、手術場の術者と助手に見る如く専心一事に熱中する所に医局の意義がある、百人百色各人に意見もあり多少の不満もあろう、然しながら總てを押し已んで医局の氣分にひたり、一致團結にて癩瘵外科の目的のために努力する時此の擧の意義の最もよく表はれた時であると思ふ。

折に觸れて

治生

もう出たかしらまだかしら

折に觸れては憶ひ出す

折に觸れては憶ひ出す

医局の前の大芭蕉

普直室の古ベッド

冬の仕度の藁圍ひ

壁に張られたポスターは

もう出来たかなまだかしら

変つたかしらまだかしら

折に觸れては憶ひ出す

折に觸れては憶ひ出す

い号の横のレンガ道

玄関屋根の大時計

並木の潤葉ひろば秋風に

朝を夕日に仰ぐ日が

もう散つたかなまだかしら

又来るかしら、いつかしら。

折に觸れては思ひ出す

屋上庭園バルコニー

パンの印しの汁粉椀

咲かざりし花

心 憧 生

九四

北國に下と云ふ小さな町がある。十一月に入ると朝夕はもうすっかり嚴寒を覺ゆる。遠からず名物の雪景色が描出される頃であつた。此の町の北方に位して小高い旧城跡があるが、その一角にラヂウム温泉旅館があつた。此の旅館の上にはお稻荷様があり、その上にはまた鐘突堂があつた。旅館の下には数軒の住宅があつた。温泉旅館は老夫婦が經營してゐたが此の家へ突然Kと云ふ二十歳前後の青年がトランクを持って訪れた。何でも彼は受験生で去年三月或る医科大学の入学試験を受ける準備の爲、しばらく世間の雑踏をさけて勉強すべくやつて来たと云ふのであつた。Kは非常に真面目で、よく勉強をした。朝夕僅かの散歩以外は殆んど部屋へ閉ぢこもつた。又他に入浴客もなく静によく勉強が出来た。それは朝霜の深い明方の事であつた。K青年はブラ／＼旧城跡の小徑を登り続けてゐた。その途中に例のお稻荷神社があるがそこに小さな二つの女の姿があつた。

彼の女達は朝詣りをしてるのだつた。彼は大して意にも止めずに過ぎた。所

二五ノロ
が翌朝もそれを見た。又翌朝は小径の途中で出會つた。
こんな事がくり返されてゐる間に、彼もいつしかお稻荷様へ朝詣りをする様
になつた。そして一日も過ぎた時に、彼等はたしかに及連になつてゐた。二人
は姉妹であり妹はみち子と云ひ尋常科三年生、姉はH子と云ひ女學校の四年生
であつた。みち子はオカツパの無邪氣な愛嬌のある小供だつた。姉のH子はそ
れに引き換へ非常に内氣な容姿端麗な美少女であつた。口もとがきりつとしま
つていかにも惻口そうに見えた。而もあつさりしたその化粧は一層天性の美を
引き立てた。

此の姉妹はよく彼の宿を訪れた。今日もなほ一日の勉強に疲れて夕食後ぼん
やり雪にとざされた東北の町景色を眺めてゐた。突然下の方から可愛らしいみ
ち子の声が聞えた。

「お兄様御勉強ですの、みち子あがつてもいいでせうか。お姉様もご一詣ですの。」
「おや、みち子さん、いらつしやい、さあく、おあがんなさい。」

もうその時みち子は二階へ上つてゐた。そして遠慮もなく、K青年に愛嬌を
振りまくのであつた。

「お兄様、あんまり勉強をするとからだが悪くなりますつて、お姉様が心配しててよ」

「アラッ、みち子さん……」

「だつてお姉様が今おつしやつたでせう」

「いや有難ふ」

K青年はみち子の頭を撫でた。然し姉のH子は真赤な顔をしてうつむいた。冬の裏北を吹き廻す夜風は寒かつた。その寒さを逆の街の灯を見下しつた話も續けた。

こんなことが何回となくくり返へされた。そしていつかほんとうに仲の良い友達になつてゐた。みち子はK青年をほんとうの兄の様に親しんだ。毎朝三人打ち揃つて霜柱を踏みつつ小径を登つてお稻荷様へ朝詣りをするのが何より楽しい日課となつてゐた。みち子はよくこんな事を云つてお祈りをした。

「お稻荷様お兄様が試験に及第致しますように、そして三人はいつ迄も楽しく出れますように」

然し年の瀬もせまり、新年を迎へたかと思へばはや二月の聲を聞くやうにな

つた。浮世の皮肉は此處にも現れて来た。樂しかりし三人の生活を離れてト青年は近く受験の爲め上京する事になつた。いよいよ彼が憶出多き温泉旅館を引き揚げる前夜であつた。相変らず元氣なみち子は姉と共に彼を訪れた。

「お兄様今晚きりですわね。明日御出發でせう。」

「え、明日は家へ一先づ帰つて二三日お母様のお乳をうんと吞んでから東京へ出掛けるんですよ。」

「あら、おかしいわね、姉ちゃん、お兄様がお乳をのむんですつてハハ……。」
一同は大笑ひをした。然し姉のH子はなんとなく沈んだ面持ちであつた。

「お兄様はお医者さんの試験を受けるんでせう。きつと立派なお医者様になれてよ。」

「さあ、さうなればいゝんですがね。」

「きつと大丈夫よ、だつてあんまりお稲荷様へみち子が祈りをしたんですもの、それにお姉様が試験及弟のお守りを持つていらつしやつたわ、ね姉ちゃん早くおあげなさいよ。」

「アラッ、升つちちゃん何ぞ云ふの……。」

余り穴作なみち子の追撃に一寸躊躇したH子は後が出なかつた。

「いやH子さん、有難ふ。じやいただきませう」

姉はそろく裾すそからお守りを出した。

「ア、いやだ、お姉ちゃん、お恥しがりぬ」

襷を見る事敏なみち子に又しても打棄りを食はされて面喰つた。

「お兄様はお医者様になつたらお髷そのはずでせう。それから奇麗なお嫁さん
を貰ふんでせう」

「え、お医者様になつたら髷もはやしますしお姉ちゃんの様を美しいお嫁さん
も貰ひますよ」

「アラいゝわぬ」

みち子は大聲をあげて笑つた。他の二人も笑ひくずれた。殊にH子は頬を被
ふて笑ひ續けた。詔はそれからそれへと繰り出された。やがて十時を告ぐる鐘
の響きが寒空になり渡つた。姉妹は明朝の見送りを約し立去つた。

いよいよ出發の朝になつた。H子は早くからきて柙作りの手傳ひをしてくれ
た。汽車の時刻も迫つて来た。

「ではH子さん、永々御世話になりました。きつと及弟して帰つてきますよ。
制服に制帽をつけてね、寒いからおからだを大事にし

「有難お御座います、私も及弟の電報を楽しみに待つて居ります。あなたも御
大事にし

H子は涙で眞正面に彼を見る事は出来なかつた。然しKの力ある握手に再び
我に返つた。

突然みち子がねむそうな目をこすりながらやつて来た。

お姉様はみち子を起してくれないんですもの、ずるいわ一人で来るなんてし

「御免なさい、あまりよくねんねしてたので起しては悪いと思つたのよ」

「もう時間があまりありませんよ」

旅館の主が知らせてくれた。そして懐しい旅館を後にした。姉妹と宿の主が
停車場迄見送つて呉れた。やがて汽車がプラットフォームへ横付けになつた。

「皆さん、色々御厄介になりました」

Kは車窓より顔を出して言つた。

「お兄様今度お目にかゝる時は大學生ね、お帰へりの時はきつとおお姉様とお迎

へに出ますわ」

「迎へに出て下さいぬ、みち子さん、きつと及参しますよ」

Kは姉妹に固い握手を交した。突然発車の汽笛は響いた。汽車は静に滑り出した。

「皆さん左様なら」

「左様なら」

盡せぬ名残りを無理にも汽車は引きさいた。Kは三人の姿をいつまでも見守つた。

梅の香もいつしか消え失せ大和櫻に浮かれ出づる頃であつた。Kは上京しとある旅館に滞在して相変らず勉強に余念がなかつた。それは試験期日が後数日に迫つた或朝のことであつた。あはただしく女中がKの部屋へ入つて来た。

「電報が来ましたよ」

Kは何氣なく受取つて聞いた。

「アネキトクミチコ」

彼は思はず立ち上つた。そして電報をにぎりしめた。然し又それを擱げて讀んだ。矢張り間違ひはなかつた。余り突然の知らせに彼は唯忙然とした。全く吾を忘れを如く煩悶の一夜を明かした。只管電報の無根な事を願つた。

然しそれは無駄だつた。その夕方次の様な電報が来た。

「アネシスイサイフミミチコ」

彼はもう悲感のどん底につきのめされた。電報には涙が沁んだ。ジツと頭を押したままき動かさなかつた。悲哀落膽に捕はれつつ涙の追憶を辿つた。

やがて突然何処からともなく開ゆるレコードの響きがあつた。

若き血に燃ゆるもの、光輝満てる吾等希望の明星仰ぎて此処に勝利に進む我が力常に新し……

じつと耳を傾けてゐた彼は救はれたように蘇生つた。

そうだ、俺には入學試験と云ふ難關を突破すべき義務があつたんだ。此の義務を果しそして朗らかにあの應援歌を歌ふ、それが悲しくも咲かざりし花への責任だ。

それからの彼は以前にも増して生々とした快活な青年となつた。試験も無事に

過ぎ、待ち焦れし及落発表の当日が来た。然し美事彼は及弟した。宿に帰つた彼は輝かしき今日の自分を想ひ出すにつけ、なきH子の追憶を辿るのであつた。此の喜び此の幸福をせめてH子に見せたかつた。然し今はすべてが遅かつた。

陽春うらかな小春日和に、いよいよ錦を飾つて一先づ帰省することになつた。そしてその途中想出のT町へ下車する事にした。黄昏時汽車はT町へ着いた。みち子は母と共に出迎へて呉れた。又以前世話になつた宿の主もきてゐた。みち子はKの姿を見るやいきなりKに飛び付いた。

「お兄様お目出度う」

「有難ふみち子さんお蔭様で及弟が出来ましたよ」

「ほんとうにお目出度う存じます」

みち子の母も心からKにお祝ひを述べた。又宿の主も祝つて呉れた

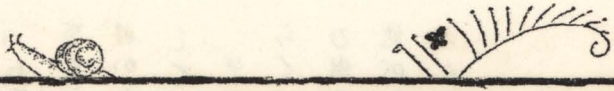
「それはそうとH子様は御病氣にて突然逝去され誠に驚きました。改めてお悔みを申し上げます」

「色々御心配に預りましたが急性肺炎で何とも致し方が御座いませんでした。みち子の母は涙新たに之だけを答へた。

四人は語りながら驛を出て街を通り、楽しかりし旧城趾の丘へ向つた。突然
みち子は声を慄はせてKに話した。

「お兄様お姉様が御病氣の時お目にかゝりたいと言つてたわ、然しお兄様は大
事な試験をお受けになるんだから決して私の病氣を知らせないようにつて、そ
れからお兄様が及弟したら是非學校のお姿でお家へ来て下さる様につて涙を流
してみち子に頼みましたわし」

そう云ふみち子の西顔にも涙はとめどなく流れた。母も、宿の主も、Kもしば
らくは無言のまゝであつた。登り行く旧城趾の小径や例のお稻荷神社は誠に想
ひ出の数々を印した。ラヂウム旅館とお稻荷神社を一目に見下す所にH子の墓
地があつた。墨痕鮮やかなH子の靈魂に及弟の喜びを告げた。而も制服制帽の
ままで。黄昏の宵暗を突いて憶ひ出の鐘は響く。(一九三二、一、一九夜半)



俳句

(兵營生活中に作れるものの中より)

さる家の塀より高さ尾花哉。

水守の鋏にはねたる蝗かき。

雲のある水際にも生ひにけり。

野遊びの尾花を捨てて傍戸より。

水草の蜻蛉のせて流れあり。

再びの風間の萱の蜻蛉かな。

筑紫寺や凌霄の葉の散り初めし

泥濘の水際はぬぬる小海老かな

泥濘や阿蘇の山々雨をらむ。

簑虫の低くおりぬる秋うらら

秋の夜のすだれのままに住居けり

秋の夜や波止場の窓の三味の音



糞釣^{ハゲ}りや洲まだ見えて石叩^{イシウツキ}。

背戸の柿今日も目白の未^マて鳴けり。

下^シり舟柿のある瀬の見え初めし。

月の出の峰^{ミネ}ほのかなり山むかふ。

エウカりに空の見えぬる時雨かな。

待宵のほのけさにあり秋櫻

コスモスの月のかげある銅家^{カヒヤ}哉（カイコを銅家）

秋耕や萬珠沙華ある道の上。

障子張りて秋冷とみにまさりけり。

障子張りて友の年忌を想ひけり

破蓮^{ヤシタス}に鴨の抜け羽かかりあり。

敗荷^{ヤシタス}の池ひろひろと月ありぬ。

北窓を立てておろりの夜となりぬ。

カラタチに霧立ち初めし日ざし哉。

よき月や、芭蕉の塚の外の道。

瓜弾の丸窓にある芭蕉かな。
行軍の山路つきて蕎麦の花

(本年二月アツペにて入院せし時作れる)

歌の窓あたかかokus雪の枝。

高ひさしに風の見えけり粉吹雪。

いつき身を看護る婦夢にありにけり。

梅の鉢雪あるままに飾りけり。

退院の頸ウヂにかかる吹雪かな。

ないものづくし

治 生

皆様ないくはないものは

人権お命二つはない

はたで見る程氣樂ぢやない

病氣に時間は決まらない

お医者稼業も樂ぢやない

どうしてく粗末にや扱へない

夜もおちく眠られない

明日にしろとは言はれない

寝呆け眼じやわからない

失つ張り起きなきや仕方がない

アツペが腐つちや放つとけない

手術の仕度をせにやならぬ

切つても命は受け合へない

御家族心配無理はない。

と言つて放つときやなほいけない

メスをとる身もいゝ事ない

汗をかいてもふかれぬ

お腹のアイテルよろしくない

臭くて臭くてやり切れない

けれども逃げてはゐられない

まともに嗅ぐより仕方がない

アツペの癒着ははがれない

はがさにや手術はすまされぬ

患者が泣いてもやめられない

こつちの苦勞も容易ぢやない

腰のだるさも一ト方ない

手術はすんだがいいんぢやない

あとの注射がちよつとじやない

リンゲル、カンフル未だ足りない

輸血もせずにはおいとけない

お腹がはつてはこりやいけない

おならが出なければ助からぬ

おならも馬鹿にはしちやいけない

命のもとにはかたじけない

おならを待つのは粹ぢやない

これも商賣やり切れない

それでもなほ此は悪くはない

こんな苦勞はなんでもない

やつてもやつても効目がない

その時やほんとに情けない

と言つて尙賣換へられない

換えたらおまんま喰べられない

矢つ張り医者より仕方がない

つがしがきかぢきや始まらない

矢つ張り医者より仕方がない

矢つ張り醫者より仕方がない。

彼と云ふ男

不志草

「〇〇先生御面會です奥野さんと云ふ方、手術室で見學してゐた彼ははつと我にかへつてスタク」と手術室を出た。薄暗い廊下を曲つて少し行くと医局の前の長い腰かけによつてゐる奥野の姿が目についた。

「やあしはらく」「随分久しぶりだねあ、奥野は粗末な脊衣を着て蒼白い顔をしてゐた。某電燈會社に勤めてゐる彼が大酒と女遊びで大部さんだ生活をして居るのを噂に聞いてゐたが目の前に實在の顔を見ると其れ等の事がふと頭をかすめた。

「すまないけれども診断書を書いて呉れないか、少し休んで仕舞つたものだから」

「あゝいいとも」

しばらくして診断書を持つて帰つて行く奥野の後姿を見送りながら彼は深い思出にふけた。

彼と奥野は同村で小學校も同級であつた、彼と奥野は狭い土地の小學校では頭がいいとか出来るとか云ふ仲間であつた、否彼等の級では彼と奥野とが毎年代る代る首席を占めて毎年進級式の日は小さな袴をつけて級の總代として修業証書を校長先生の前に貰ひに出るのを誇りとして小さな胸をおとらしてゐたのだつた。

彼等がそうして尋常六年生になつた時遠くの田舎からの先生と云ふ人が轉任して来られた。彼の姉も町の女學校を卒業して帰宅し代用教員とし婚期の前の数年を父の膝下で手助けながら勤める様になつた。そして勿論〇先生とは毎日顔を合せる間であつた。その頃から〇先生の彼の家を訪れる

事はしはしはあつた。田舎の事とて入浴等の時、彼の家の知らせで〇先生は必ずやつて来られた、そして入のよい彼の父―その頃五十歳位で村の有方者であつた―とざる甚を圍んでは夜半おそくなつて帰つて行つた。村人の口に彼の姉と〇先生の事がのる様になつたのも勿論當然であつた。彼の姉も土地の娘連に比べると一寸垢抜けがしてゐて内氣なくせに早熟な彼はいち早く〇先生が彼の姉を惹いてゐる事に氣付いてゐた。ところが姉には何でもその頃既に戀人があつたのだ。その人は隣村の小學校長の息子で既に土地の中學校を卒業して高船學校に入つてゐた、その男―太田は何時から彼の姉と解があつて夏休み等は彼の家を訪れ父母の了解の元に夜おそくまで彼の姉と語してゆく事があつた。〇先生が首席訓導であつたとて風彩のあまり上らぬ上に何か話す時は大変どもる様子など彼の姉の直ちに〇先生の申出を拒絶したことは当然であつた。彼にも其の間の事情はうすく解つてゐたが、彼とては村人殊に同級の奥野等が彼の前で彼の姉の事をはやし立てるのを聞くことは死ぬ様につらい事であつた、何処でもいから遠くへ姉が早く嫁いで呉れたならなあと毎夜の様に彼は夜具の襟を涙

でぬらしながら願つた。

やがて〇先生が彼の父母及び姉からはつきり拒絶せられたことは、〇先生の彼に對する態度から彼には、はつきりわかつた。今迄彼が迷惑な程、彼の肩を持つた〇先生は手の裏をかへす様に彼に冷淡になつた。従つて彼と競争の位置にある眞野少年を愛し出したことは當然である。彼等が小學校卒業の春であつた、彼と眞野とは又しても首席を争ふ位置にあつた。ある日の事、彼と眞野とは夕頃小學校の校庭で彼等の成績の事を語り合ふた。そして眞野にしようと教員室に忍び入つて考査簿を見る事を彼はさそはれた。おそろく彼等が目的を達した時〇先生の眼が後で冷たく光つてゐることを彼は一寸も知らなかつた。その翌々日その頃彼は卒業式を控へて中學校入學試験の準備に忙しかつた、眞野少年も共に他の五六名と共に毎日學校で補習教育をうけてゐたのであつたが、帰宅して見ると姉が炬燵にうつぶして母を相手に泣きながら何か語つてゐた。彼にはすぐその事情が分つた。その日學校で職員会議のあつた席上〇先生は彼や眞野が前日教員室に忍び込んで重要書類を盗み見た件を發表し主謀者の彼は操行を丙にす可きだ、

この如き行爲をする生徒にはたとへ察誤は出来ても一級の總代にする事は出来ぬ筈だと主張し、彼の總代に定つてゐたのを奥野少年に変更したと云ふ譯であつた。

彼は姉の様には悲しまなかつた。むしろ先生の鬼えすいた卑怯な行爲を知つて胸がほりさける程残念であつた。○先生に對する憎鬼の念がむらくと起つた。

又一方大人のくせに自分等小供に對してこれ程迄の計畫を行つた○先生がひどく衰れに見えて自分はそれに超越して○先生を衰れんでやろうと云ふ氣にもなつた、今に見ろと云ふ氣がひしひしと起つた、彼の流した涙は自分の決心に感激した感動の涙であつた。やがて彼等の中學校の入學試験がすんで成績發表があつた。當時は田舎の事とて應募者も少なく、希望者は全部入學許可せられるのが常であつた、従つて入學試験は成績順番が問題になるだけであつた。試験の結果は奥野少年は抜群であつた、彼の成績はそれに比して甚だ吾はしくない百名中六十何位であつた。村の人達は彼の父が有力者である處から中學入學試験がほんとの賞力の成績で小學校在

學中の成績はひいきの爲のであつたと云ふ様な陰口をもらした、彼の小さな胸中は又も怒りで一杯になつた。「今に見ろ」再び彼は心の中でそう叫んだ。彼の内氣を性質が災ひして入學試験の時の成績は事實面白くなかつたものだ、しかし一學期あつた。彼の成績は数十番とび越えて一躍十位になつた、第二學期、第三學期が濟んだ、第二學年進級の時は尋常小學校卒業者中では首席となつた。全部を平均しても五番以内であつた。

當時級は高等科修業者と尋常科修業者とを區別して二級に別けてあつた。第二學年に進級した日彼は各級の選抜者数名と共に校長室に呼びれて第二學年組組長に任ずると云ふ辭令と共に腕章を貰ふた。彼が以前からアコがれてゐたあの兵隊さんの善行章の様な腕章、彼の心はおどつた。

「どうだ」心の中で呷んで彼はそれをポケット深く仕舞ひこんだ、けれども内氣な彼はその腕章をつけるのが恥しく受持の先生が何と云ふてもそれを嫉はなかつた。

彼等の通ふ中學校は彼等の村からは一里程離れたS町にあつた、彼等はそこを夏も冬も洋服にホー齒の下駄と云ふ田舎ではハイカウな姿で通學し

た………

彼が三年生になつた頃彼等とは反對にS町から彼の母校へ教鞭を取つて通ふて来る女教員下子と出會ひ初めた。毎日時間が決つてゐる爲め彼等の會ふ場所も大体決つてゐた。その頃彼の姉は未だ奉職してゐて従つて下子は彼の姉を先輩として毎日學校で顔合せた時には彼の家へ姉のもとに遊びに来る様な事が有つたので彼が下子と登校の途中出會ふ事は何かしら彼等を結び付けることになつたのも當然だつた。下子はその頃十八九歳で小柄な相当美しい娘だつた。

當時十六歳だつた彼は内氣な事及び理性が決して感情に支配せらるる事を許さぬ性質のため「お早う」位の挨拶の外には決して餘分の口を聞くことは出来なかつた。そのくせ彼の内心の悩は非常なもので前からさうであつたが彼の孤獨性は益々深まつて唯独り物思ひに沈む日が多くなつた。「出家とその弟子」等を耽讀し出したのもその頃だつた。○先生はその頃既に職を去つて遠くの人と東京へ出掛けたと云ふ話を聞いた。

彼の姉も前に書いた高船學校出の太田と結婚し上京して夫の留守勝を宅

を守る身になつた。彼の中學生活も順調に進み再び受験生活に没頭せぬは
ならなくなつた。彼の理性は兄からの激励の便り、種々の受験雑誌の刺戟
等でしばらく異性の問題を没却することを命じた、彼は孑々として勉強し
た、彼は醫學を好んだので折から新興の評高かつた某大學醫學部を志し幸
運にもパスした。新しい生活が始まるとさすがに彼の頭から丁子の影もう
すらいで彼は相当快活な青年になつた。兄と共に下宿屋に起臥して愉快な
學校生活を過すことが出来た——。

彼が七ヶ年の長い學課を終へてやつと社會に出、更に外科學を專攻科目
として数年の研學を志した時姉は既に三人の子供の母になつてゐた。丁子
も既に同職の某氏と結婚して一人の子供を得てゐた。

彼の兄は某建築會社に就職し、尚独身で暮してゐたが、兄も姉も涙を流
して喜んでくれた、彼が業を終へて帰省した時老ひたる父母はやつと重荷
を下したと來る人毎に自慢して喜び合つた。

彼はその様な様子を見せられると口に出しては決して肯定する事は出来
なかつた、「この位の事あたりまへの事じゃないか、自慢なんかみつともな

いよゝ等とたしなめた。否、むしろそういふ父母に及感を持つて強い語でそれを否定した。しのし夜等床の中へ入ると、たまらなく父母が可哀そうに思はれて熱い涙が流れるのであつた。一方彼は又自尊心が強く他人から輕蔑的な語を受けた様を時は普通の人ならさして感ぜぬ程度のことでもロンと頭をひびいて痛烈な皮肉なり及對なりを表からぶつつける様な性質に支配せられてゐたと云ふて、彼は決して實際の下手な人間ではなかつた。同様、先輩達には意識して充分誠意を盡した。そう云ふ彼であつた。

ある年の暮、吉例の觀劇會が〇座に行はれた時幕間の十数分を群衆の内から逃れた彼は安樂椅子に寄つてそつと目をつむつてゐた、その時数人の人達が声高に話し乍ら彼の目の前に立つてゐた、その内の一人は見違へる程肥満してはゐたが忘れもせぬ彼の舊師〇先生の姿であつた。彼は少しくうはづつた声で叫んだ。「〇先生ではありませんか」この偶然な會合に一別以來拾餘年を過てゐる。〇先生の頭には早白いものが見られた。名刺を交換してしばらくの間は互の身の上を語り合ふた、〇先生は決して彼の姉の事を聞かなかつた、意識して彼は言ふた「姉も子供も四人も持つて幸福に

暮してぬますし。○先生の面上に瞬間猿猥の氣配が浮んだが「そうですか、それは」彼はしばらく沈黙が續いた、彼は一寸この様なことを云ひ出して相手を猿猥させた自分が卑怯に思はれて不愉快になつた。後日を約して直ちに分れたのであつた。

「奥野、○先生、丁子、皆いゝ人間なんだ……」彼は医局に引き返して冷たいお茶に喉をうるほして叫んだ。(一九三二、十一)

半 歳 漫 録

秃皮不精

六年正月十九日から六月廿一日迄の彼の「アドレスト」は慶大病院「ろ」の九号であつた、入口の「ドア」には「御親切に御見舞下され候各位に對し甚だ勝手申状に有之候へ共、奇數日は注射相受け発熱致すを常と致し候間、御面談の時間を五分以内に願度候」と揭示して居つたから、頭の良い奴なら察して帰らうし、頭の悪い奴でも室の中では枕も上らぬ重。症患者が呻吟して居るだらう位に思つて大概帰つたらしい。所が其の實御本人は平氣を頼として盪ト棹マを着

込んで寝台の上に足坐アゴをかき同病相憐む悪友の江崎岩吉君を向ふに廻はし、渡
 邊外勤嬢を先辺に控へさせ「カード」をやるやら、癡談さすやら、時には疊の
 間で「シヤンペン」ぬきの晩餐會をやつて居ると云ふ始末、茂木先生が廻診に
 来られて「ヤア今日も會議ですか」等と慰問の御言葉を頂いたこともあつた。
 何せい五ヶ月も居たのだから種々思ひ出がある、一番開口したのは血液検査だ
 つた。生れてから善い事はかりをやつた彼氏であつたが、若し顕微鏡下に梅の
 花でも咲きはせぬか、又「外國」の血液が逆に流入して居て、大和民族には見
 られぬ血球でも発見された日には一門一族の名譽にも関ると實は一週間ばかり
 と云ふもの夜の眼も眠られなかつたのであつたが先づ之も無事に通過した。毎
 日毎日の行事や珍事を、そこはかとなく書き出し連らねたら到底数枚で盡し切
 れぬから少々旧式ではあるが本平記句調を借りて簡單に之を評述する事に致さ
 う。

慶應太平記抜粹

禿頭朝入院のくだり

脱疽の足に踏み迷ひ

片方の腹も裂かれけり

茂木の恩を着て帰る

一夜を明す程にも

お正月より文月と

嘘や無聊におわすらんと

医局諸員を始めとし

心の眼りを蓋さるる

病室電燈影淡く

さすが寢坊も眼を覚ます

別荘で暫く黙禱し

脛ハシもあらはに端折上げ

玉をあやむくみ体を

悪友岩吉同浴し

蒸氣腰推吹射とて

霧にかすめる曲線美

標の儘の西人は

彼氏の宿の初夏の夕

伎懐となればもの憂きに

丸イッ五月の佗住居

人の問ふまで答へける。

看護に侍べる手弱女も

などて淋しと感ずらん

鷄鳴既を催せば

体温脈搏捏造し

浴場争議に打ち勝てば

鍋子の君は擧ツキがけ

流す手先のあでやかさ

笑聲「ろ」踊にいや高し

藤浪博士の御名案

湯氣に上つて悲鳴上げ

担タカきもならずウロくし

東 岡田の西君の

「嘘をつくと云ふのは誰ですか」

思はず時の打ち過ぎて

ろ号に帰る暇もなし

好意にすがりて江崎氏と

四本の毛脛ケネネ列べつつ

森田婦長の温顔に

熱氣赤外汗流し

飲んでお午ヒトとなりけり

空いたお腹をふくらませ

頭髮ウツ粗コ野田さん

富田、辻岡、布留三氏

共に助手をば勤めけり

静脈残る隔もなく

玉の肌ウツも何のその

助けに胸を撫で下す

部長回診程近く

に子杉崎主任君

同室バンドに匍ムひ上り

閑足ヒト式を済ましける

西人最敬禮をなす

餘程カリイと苦味丁儀

(沃度加里)「マイマレード」と「トリスト」で

午後のコースに進みゆく

主治医の役を司り

神山、若林シロ西君と

何れ劣らぬ腕のさえ

蜂の巣ハチの如孔コをあけ

二を目と見られぬあせれさま

之を助くる「呂」の諸嬢

さすが美男に寄り添へば

持つ手自オッと振へ来て

野崎、扱入、ツ葉 四居

大島萩原の面々も

柯れ劣らぬ花葛蒲アヤム

注射の後に整ひ来る

調劑室に尻まくり

除かん為めの親切は

郵長並びに医局員

治療調藥効を匂し

厚き看護に打ち敗けて

晴れて嬉しき此の月日

早アツキや文月アツキとなりける

光るの禿はありとても

木村、兼重、内藤君

注射ホンプや注射針

又譏度も差し直はず

菅原 小林 藤原君

又高橋君 小野田君

ラデエーターに目白押し

悪感戦慄防がんと

只管ヒトス患者の苦痛をば

今も嬉しき限りなり

心を込めて施せし

専属内勤諸嬢まで

さしもの難病跡もなく

夢の如くに過し来て

やらずの雨の降りしきり

別離の涙に見えわかず

自動車止めて顧みる

かたを雲やへだたらん (了)

と云ふことにして駄句を、三つ添へ

畫からの試合で手術早くなり…………… 雑感

御向ひは時に「待合」時に「バー」…………… 隣室

今が一番痛い時でと手を握り…………… 手術室所感

謹而、刀林諸賢の御健康を祈りつつ筆を措く

(昭和六年十一月廿日)

縮者註 禿皮氏は半歳の久しき咽喉病院に起臥せられたるスボガンの患者さんです、特別

寄稿として本編を頂いてのせました。病院に對する患者さんの言葉も汲みとれる

かと思つて。

或る時

逸名氏

受持の患者死なしたのでそこぼくの後のいとをみするが不樂しき

夕ぐれの廊下のそめきいらだたし人死なしめてぬが聞けらくは

八巻に並み立つ灯の一つ毎に怖之いとしき我心かも

梅うめに似しわだかまり持ち夕暮足を速めて我れ帰るなり

潮 騒

寄する波又百重の波の湯きくずれ夕方まけばけぐる伊豆山

山かげのもの静けさや夕汐のとどろく頃さ杉の露おつ

さびしさはやせし小牛あのうしの赤牛の眼にうつる山茶花のはな

牛去りて夕となりぬ足跡に細々として雨注き居り

雨降りて夜汐は鳴らす姿しく一人し居れば人のこほしき

外科雑詠

逸名氏

外未嬢^{ダイライ}はお医者様の様に説き明し

廻診で部長の言葉判し兼ぬ

夜なべして落はつけたが貪乏し

ネーベン^{ネーベン}はヘッド丈やる痔の手術

髻剃りが四入手術場に悪口^{ワッロウ}の華が咲き

當直は碁を知らずして退屈し

よく遊びよく學ばず年がたち

月末は小さくなつてあくびをし

お掃除で追はれた医者^{イシヤ}が本を讀み

飛込はフレの素足が氣にかかり

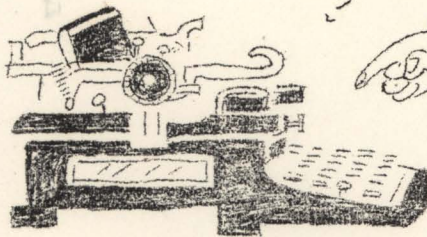
六清會ゆくへ不明が四人出来

「入局の當座タイプを習つてみ」

「エトRはどこだ」

タイプ

「ポツン…ポツン」



帰つたと云ひきれもせぬ電話口

舊作二つ

遠く離れて 治生

(先年浜松の梅村先生のお手傳ひを
してぬた時風をひき發熱四十度減

しかつた)

遠い田舎で病氣をしたら

その時ヤネ

ソレ

いつものネ

K・Oの元氣を

お出しやんせ

くよくよしたとてせんない事よ

のんきにネ

ソレ

いつものネ

K・Oの歌でも

唱はんせ

熱が上れば上ろとままよ

それよりヤネ

ソレ

いつものネ

K・Oの事でも

おもはんせ

どうで壽命は神様まかせ

氣樂にネ

ソレ
いつもの木

K.Oの夢でも

見いしやんせ。

◎

泣いてゐる

どうして生れて来たかも知らずに

死ぬのはいやだと泣いてゐる

何も自分の自由にやらぬに

死ぬのはいやだと泣いてゐる

泣いた所で仕様がないうのに

死ぬのはいやだと泣いてゐる

たゞもう子供がだだ云ふ様に

死ぬのはいやだと泣いてゐる

ハイ

死ぬのはいやだと泣きます。

アワ・タテヤマ

治生

千葉縣安房郡館山町は

山が南で海邊は北で

下駄屋と八百屋が澤山あつて

水兵が尺八吹く所

朝の目覚めりや航空隊の

飛行艇やら水上機やら

陸上機までがぶんぶん飛んで

どんな寝坊も寝てられぬ

仕事すませて疲れた時にや

海の散歩も二度目にも飽きて

山を歩いて帰つて聞けば

こわやママシの名所とか

赤屋の隣りの立看板を

往診帰りに横目で見たら

女流浪界大立物が

花火合圖にうなるげな

何ほなんでも聞く氣にやなれず

北條キネマは一昨日おとこひ見たし

秋の夜長を疊に寝れば

猫が水飲む音がする。

宿題（童謡）

治生

宿題の

算術を

二つといつて三ッ目は

といどもといても解らない

いただいた

キヤラメルを

ニアツ食べて又食べて

も一つ食べても解らない

お机に

ひびついで

窓から見れば秋の空

きれいに晴れた青い空

お隣りの

瓦屋根

雀が一つとうまつて

チユン チユン ジュク ジュク 鳴いてゐる

あの雀

打ちたいな

空気が銃があると嬉しいな

狙つてホンと打ちたいな

おやさうだ

宿題だ

二つは解けた三つ目が

といつてもといつても解らない。

夏の館山

浴生

一三八

仕事チヨイとしてチヨイと服脱いで

裏へチヨイと出りや海がある

ソレ海がある。

風をサツト切つてサツト波蹴つて

沖へサツト出りや陽がおどる

ソレ陽がおどる。

明日始めての抄読会

一人ボツチで

夜が更ける



「川越と喜多院」

H B 生

秋日麗かな一日、池袋より東上線の電車、クツシヨンゆるやかに身を寄せ
て一道路を西北に走れば十分間位にして早くも郊外に出で講談雜誌によく
名の出る下板橋、上板橋を通過する、此越野らしき入口なり。更に一直線
西北に進めば独歩の名文とそのまま、緩かに起伏して蜿々換がり続く楡の
林、楡の森、翠緑の松杉其の間を突抜して四季折々、或時は麦畑、大根の
瑞々しさに重疊して沿道の櫻花之に彩をす、処萬里の春長閑、或時は芋の葉
と桑の芽に上の吾懐かしく、遠く北方に秩父の連山をひかへ、西方はるか
に富士の青嵐を仰ぎ、クスギや楡の黄葉と相俟つて眞に名状し難き雄大な
る油繪を展開する。一度落葉地に敷き一望千里細雨蕭々として主れば寂々
として起を泣くにふさはし。新春再び廻り白雪粉々万目の拓樹に時ならぬ
花を盛り、田を埋め、野を蓋ひて涯しなき白皚々と廣原と化せんか、旺然と
して詩も亦可なり。

斯くして池袋より四十五分遂に川越に達す。

そもそも此稿を起す所以のものは一般東京のみならず全日本の人が川越と云はず芋を聯想する程其の地名は人口に膾炙するも其の地理由緒を知れる人殆んどなく且つ芋にのみ心引かれて重要なる史學的優地なるを忘れたるを以てなり。然れ共小生嘗て九州の福岡に在りし時「川越女學校の運動會に芋堀競争あり」との噂を半ば信ぜしも当地にて某女學生の猛烈なる抗議にあひ事實無根なる由を主張せられたるを以て附言するも慌し一步郊外に足を入れんか大根と芋の細は際限もなく打續けるは事實なり。

東京を去ること西北に十二里、高田馬場より所澤を通りて約一時間、池袋より四十五分、東京街道と稱する所謂川越街道は此線に沿ひて隱見す。更に上野より浦和を通り大宮に出で、これよりガタガタ電車にて約一時間二十分。

東京、松山、青梅、大宮、所澤、八王子等の諸街道皆此地に出で優雅なる情景に往時をしのぶ。

古人の所謂「四方八百里の草の原、月の入るべき山もな」と詠ぜし武蔵野

平原の稍奥地に位し江戸幕府近世の重鎮たりし川越及其の附近は、天孫出雲氏、天神物部氏等の上古時代より太田道灌、更に源平二氏より徳川時代このかた其の史料は枚擧に遑なく、其の探訪も一日二回の短日に終るべくもあらず、其の詳述は紙面の許さざる処、只題字につきて略述するに止むと雖、近く入間川ありて香魚狩の清遊に長く、秩父連山遠霞の跡渺茫として武蔵野の涯を思はしめ、西方はるかに芙蓉の靈峯雲表に聳え、數年前、市政を布き人口凡そ四万、洋々たる沃野、樹林の嵐氣索々たる勝地、興味津津たる史跡に抱かれ武蔵野原頭巖として一方の雄都となす川越。四谷の谷に沈滞せる鬱氣を晴らすに絶好の地ならんか乎。

「沿革」河越及河越氏の名は既に鎌倉時代より現はる。頼朝幕府を鎌倉に創むるに當つて太郎重頼、小太郎重房等ありて彼の畠山重忠等と共に馳せて之に従ふ。更に太平記、保元物語、平家物語等には其の前行の史述に興味油然たること一瞥に堪へたり。正平年間一揆蜂起して河越域に立籠りたる時、基氏、氏満は畠山備中守をして之を攻の遂に落城に至らしめたるを以て河越氏も亦史上に趾を没するに至る。(是迄を第一期川越と稱す)

上述の第一期川越は現在の川越市と同一地なるや否やは大いに疑問なき能はずと雖も、進行道真の廻國雜誌に依れば

「限りあれば今日分けつくす武藏野の

境もしるき河越の里

此処に常樂寺と云へる時宗の道場はべるしとあり、且つ此寺は現在川越近郊に残れるを以てすれば現在は現在の川越より大なる距離を有したりとは思はれざるもへつたに歴史家として断定をばかる。

川越附近が往昔交通上、軍事上重要な位置を占めたりし事は数多の記述あるも先づ延暦寺の高僧慈覺大師は己に天長七年此処に台宗の重鎮を造り（喜多院の附近）、北條時宗は東明寺を、南北朝時代には行傳寺を造營せり更に足利氏は老練にして眞望ある上杉持朝、明敏にして致為なる其謀將太田道真、道灌をして此地に着眼せしめ遂に一城を築きたり、思ふに武藏野の東北端、洪積層の台地に在りて北東に入間川を廻らざる天然の要塞は彼の扇谷家が古河に對する作戦上見遁すべからざる地矣たりしならん乎、後北條氏之を奪ひたれば爾來当地は上杉氏對北條氏の決戦の衝をけしが北條

氏四十五年間の平和時代に民政、産業、文教興り再び城塞としても又市街としても面目を一新するに至る

徳川氏以後

徳川氏覇府を江戸に構え天下に号令するに及びてより勿論江戸の盛に比肩すべくも非ずと雖、武蔵一團内に於ては依然として一方の雄にして徳川氏は世々川越を直隸関内の藩屏となし、常に勤王親故の家を封じ城廓の拡大社寺の造営、市區改正を遂行し其の繁昌想像するに難からず。

川越城に元来川越城は世人多く太田道灌の造る所とせるも疑矣多く上述の上杉持朝の築城するものなるべし。第一期河越時代に於ては現川越より一里足らずの上戸と稱する地なりしが如く、其後変遷極まりなく山内對扇谷の軋輓には扇谷家の川越に對するに山内氏は上戸に營せし者の如し。更に川越城は松平信綱により大増築せられ、本丸、富士見櫓及虎櫓、二丸、三丸、外曲輪、内曲輪、新曲輪等ありしを以て相当完備せる城廓たりしが廢藩置縣後漸次荒廢し、それ等の建物は種々の用舎に利用又は廢棄せられ現在に於ては地形に依り僅かに判断し得るに過ぎざるも昔日の城下町の繁榮は豊富

なる史料により想像するに難からず。

歴代城主の主なる者を擧ぐれば酒井重忠、忠利、忠勝、堀田正盛（母は春日局）、松平伊豆守信綱（智慧伊豆なり）、同禪綱、信輝、松平美濃守吉保、秋元喬朝、松平大和守朝矩、同直克（現松平直之伯の父）、松平康英、同康載等なり。

「喜多院」是日現在小生宅の横にて道一筋を距て、境内の鬱蒼たる古木を連ねてゐる。淳和天皇の天長七年慈覺大師勅命を奉じて此処に伽藍を創む、後兵燹ありて伏見天皇の永仁四年尊海僧正勅を奉じて再營し後東園台宗の本山たるべき勅書あり、重ねて兵火に遭ひ微々たる折彼の「君臣豊樂國家安康」の鐘銘に事寄せ豊臣氏を遂に滅亡に導きたる家康の奸智深謀を助けたりと傳ふる天海僧正之れを継ぐ。

始め天海の此地に在るや家康再三鷹狩の爲め未遊せし機を良く捕へ遂に信を得て大宇を爲す、家康薨じ屍体を久能山より日光に轉葬するに及び二三日当院に泊し爲めに現在の東照宮を造營す。後川越の大火は再度当院を鳥有に歸せしめたるも家光復之れを建つ。

現在の喜多院は旧院の本境内に限られ大師堂、慈眼堂、方丈、客殿、庫裡、長樓、五百羅漢、経蔵、多寶塔等にて東照宮亦幽幻畫尚暗き老杉の間に存す。

嘗ては輪兵の美濃下に冠たりし社殿牆垣も漸く瘵頽に傾き衰草寒烟の趣あれど境内を半公園化して境内静寂、二個の大なる垂糸櫻、家光誕生の間、友成の太刀、更に團寶岩佐又兵衛の三十六歌仙及び狩野昌庵吉信筆數十枚或は探幽の筆十数矣、後水尾帝の勅筆等此寺にして此寶あるかと世人を感嘆せしむるもの實に多し、此の外限りなく数多の宝物貴品ありし由なるも何時の代とも知らずナマ奥坊主共の酒色の代となりたりとか口惜しき事なり。

ある時歌へる

夕暮の伏き冷氣に誘はれ

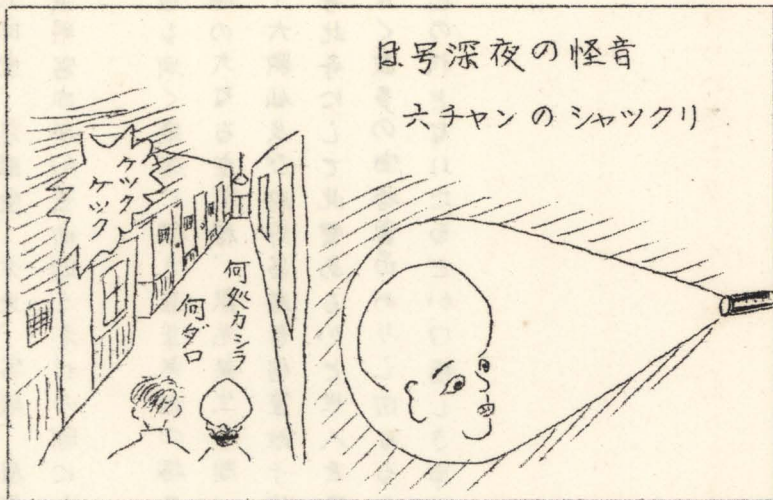
人影まれなる喜多院の森をさまよふ

昔の傳へに川越の公方を想ひ

徳川の旗を伽藍にしるぶ



雲往き星移りて歴史は古び
新らしき代の燈火をちこちにかすみ
幽巖の氣を填ふを恨む
されど尚老杉畫を欺き
鬱冷としてそいろに寂たり
晚鐘の余韻陰として流れ
冬枯れの森の梢を渡る
千年の歴史を此処にたどれば
感慨轉々つきるを知らず
余韻の消ゆる処に泪は光る
夜氣更に加はり人影更に消え失せ
思ひを残して歩みを返へせば
クックと呼ぶ鳩に哀れは更に深し。



似而非者

丁 生

昔男女ありけり、雪の國に育ちて色黒きこと墨の如く物高ふ家に生れたるに口を利くことも希なり、厄介制と祿する人の集ひに支りて仁術を業となしわけても小刀とさぐりを用ふる道を修めはやとて笈を衆の都に負ふて早幾歳未だに鬼手帰心の悟道は奥儀深くして肉切る腕も覺つかなく、日夜刃物執るものふのあはれに腐心する中、早年の瀬も迫りは世は昭和も大歳のホツ方とぞなりにけり。

昔男ありけり、師夫に入りて、物のあはれを知りたるにや、つくづくと延びたる爪を見る曰なりとて、仁術不況をかこちぬ、頃しも海を越えて戎西の方、表秋の抜くあり世は物議騒然たるに、この男女事にうとくつれづれなるままに、筆のすざびを急りては情ある武士の恥辱とて白道三昧の境地に達せんと試みぬ。

もとよりその道のたしむみあるに非れば徒らに過ぎ方、人の顔、去りし事ども頭に浮びて、似て非なる者出来たり。

舟出より歸る後や還月

浪花路へ野郎の旅や南の風

布圍着す寝たる姿や芳野山

三羽鳥今宵は何処まで行つたやら

秋の夜や殿もいぶせき吾が閨に

名月や机の上にあごの影

菜のはぢや胡てふのゆめを知るひとぞ知る。

その條に熱氣とられてもらひ床

暮るる日やどこからともなく主の影

そのかみ、俳偈の道にうとき武士ありて春雨なる「課題」に「舟底をがぢ
く嗑る春の鼓」とも比して、おかしけれ。

病院詠草

ももたに生

食研の階級の数覺えけり

燈消えし夜に通へば

院内やなぎだる

匿名氏

数百の人々が毎日出入する病院若い数百の匠者看護婦の勤務する病院、そこには至る兜エーモアのオーケストラがかなでられて居ります。私達外科医局を中心として川柳行脚をやつて見ませう。

近頃外科医局負は熱氣宿泊を封せられて大部不自由して居ります。

禁熱氣高く付いと朝語り

「この垣一重が黒鉄の……と袖萩もどきで嘆ずる人も少く有りません。外科は月、金、整形は火、木土の總回診、之はなかなか夜半まで活動の私達医局員の悩みの種で有ります。どうかして遅刻した時の氣まり悪さ、その日一日はどうも氣分が勝れません。

總回診の日は寝坊助も緊張し

この位の内は未だ宜しいのですが

親爺居るかと圖書室へそつと逃げ

こうなるともう取り返しが付きません。

医局の人が時々病氣になつて入院を療をすることがあります。一同心配して毎日の様に見舞ふことは誠に當然美しい情の發露であります、所が

うまいものないかと物騒な見舞なり

こんなエーモアが時々見られます。

病棟及び三階の方から少し拾ひますと

二十八出ましたと付添ひ得意なり、三階を今日も食はれるかもある人

通な人先づ六ちゃんへ案内し、又今日も高くついたと「かも」嘆き

ものすごき痔とは思へぬ美人なり、三階へ今日も来てぬるモグとモホ

我が外科とスポーツ救護とは又切つても切れぬ關係があります、御承知の様に呼び物の試合のある時等は希望者が多くて大変です、そこで

サイレンの鳴る日病院空になり

看護婦に連れられて行く救護班

パスのない奴はカバンを奪ひ合ひ

救護品医局の人も助けられ

と云ふ様な事になります。

近來輸血が盛に用ひられます。

あの人はB型だものと陰で云ひ。

等と云ふ事も病院内では意味が通じそうです。

又我々外科医局では

盲腸炎俺もやつたと得意なり

血を見れば頭痛も治る外科の医者

こんな事は当然のことです、次に吾々の根城宿直室のユーモアを尋ねて見ませう。晝食時間等の賑かさ大変な騒ぎであります。

食休み氣弱な奴はみ出され

夜の風景を拾ひますと

重症は皆直室を満員し

一枚に二人がもぐる仲の宜さ

朝見ると人のふへてるベッドかな

次に食堂の様子を見ませう。何れも血氣盛んな若者達の戦場の事とて

又「メキシコレ」とやらふく喰つて顔しかめ

さしみだとつるして見せる奴もある

どうもあまり上品ではありません。

最後に看護婦諸嬢を題材にとりますと叱りを受けるかも知れませんが

不寝番馴れて居眠り上手なり

ホテトーで暖をとつてるさとい入

名譽毀損の訴へを起すのはしばらく待つて下さい。

赤い梅になつて仕事も堂に入り

ネーベンの内はアレ氏に牛耳られ

あまり出まかせを書いてお尻の末ぬ中この邊で行脚を終ります。

(一九三一、十一)

映画解説

『白銀の旅』

184

昭和六年正月休を利用してドクター田村と小生の二人は前から一度訪れて見たいと思つておた冬の北海道をついに訪れ得た。

そこで其の折にスツアした十六ミリ映画をいろいろとデツテ上げて白銀の旅なるタイトルを付して約三百五十呎物とした、次にこの楽しかつたスキーファレンの記憶を再び思ひ出して映画解説となすだけ刀林誌上の埋草にする次第である。

昭和六年正月二日の午二人は羽越線に乗つてうす寒いどんよりとした裏日本の沿岸を走つておた日は暮れて翌三日の朝まだき青森で連絡線に乗り換へた。

冷へびへとした本州北端の港青森波止場の標識燈も漸く昇り来る暁の光にほんやりするころ船は静かに港を滑り出した、デッキに上つて寒い風に吹かれながら氷山の如く見へる津軽の山々をながめて映画では此処へ去年二月に撮ってきたスキーの駕真をみんなぶちこんで二人の甲板上の物語りの如くにした。や

かていつの間にか二人とも船室に入つてそろく、寝てしまつた。船がゆれるをと思つて居る中に又静かになつてもう函館の港に正午の大陽をあびてはがらかな汽笛と共に停車場枝橋にヒツタリと横付けになつて居る。やがて旭川行きの汽車は粉雪をさきさき上げて大沼駒ヶ岳の高原をひた走りに走つてゐたがもうこの頃には二人とも話にもあきてほんやり煙草をくゆらしてゐたり起きたりしてゐた。夜の九時やうやく南小樽の駅に到着、山本先生のお迎へを受けて小樽病院の一室に更け行く真冬の夜馬車の鈴音を物珍らしく聞きながらベツトの上に横たはつた。

明くれば四日天氣はよいしかし小樽の町は初めてである、二人足に覺へはあつても土地不案内を如何にせん、スキーにはやる心をおさへて午前中は町で二三スキー用具の不備を買ひ整へて午后から小樽病院の先生方に熱員の大島氏を加へて小樽のスキー場聖ヶ岳に案内していただいて始めてスキーを足につけた。二三時間も足ならしをやつてから皆で所謂金比羅廻りなるものにかけた。途中牧場の牛乳屋でのんだ新鮮そのもののミルクは實にうまかつた、それから夕闇せまつて足元もさだかならぬ頃までコースを廻つて滑走した、さすがに北海

道の雪、足もとに堅く舞ひ上つてぢんの抵抗もない、山本先生のガンバリたるや實に美事なるものであつた。かくて一日の練習も終れば夕食を山本先生の御宅に御招きを受け扱れた体にアルコールのききめはできめんにてすつかり酩酊なし、ストーブのかたはらにぐうぐうねてしまつたにはあきれはてたり。

五日の朝体中がいたい、前にはこんなことは無かつたはずなんだが、そしてとろとろ午ごろまで寝てしまつた。日頃都に於ける生活のかくは成らしめたるものか、午后より空は曇つて居たが、天狗山と云ふ小樽全市を眼下に見る高地に案内して頂き、帰りは又日の暮れるまで愉快にスキーファールンを楽しんだ。

六日晴れて居るか寒い一寸起るのがいやだ、しかし床を蹴つて起きてしまへばなんともない、こういふといやに早く起きたやうだが午前九時だ。古城の上に立つた小樽病院の坂下をキリンキリンと走つて行く馬車の鈴音もはがらかだ。今日は二人きりで昨日行つた天狗山へ出かけた、そしてだんく、慣れて来た足で面白く滑り廻つた。そして帰りには得意のスキー移動撮影を前日見つけて置いた並木道を走つて小樽郊外に下る道まで行つたが田村先生のスキーが一向に滑らないので困つた、これを書くとき田村先生におこられるがもつと他の場面に

於ては氏の實力以上にスキーを撮しておいたはずだからそれで勘忍してもらふことにしよう。これじや謝まつて居るんだか冷かして居るんだか解らない。

まあこんなことをして半日は暮れ午後は札幌へ行くので荷物をまとめたなりなにかして忙しい。兎に角あはたどしきスキー話でしかたがない、用意も済んだところへ山田先生、青木先生が十勝岳で雪やけした元氣をお頼で話して来て下さった。全く一日も早く小樽へ着けば皆さんと御一緒に北海道の眞の粉雪を十分に味へる十勝へ行かれたものを實に残念であつた。

夕方の汽車で札幌へ、そして小生の伯父貴の家へ上りこんでもうすぐと明日からの計画を立てた。先づ北大に柳先生を御訪ねして北大山岳部の山小舎へ入る便を得させて戴く事それが午前中で午後は山小舎歩きの食料とか其他の買物札幌スキー場たる三角山見物兼滑走と云ふことにした。幸ひ小生の親類の家では柳先生をよく御存じ申上げて居るので、明ければ七日晴、早朝から電話で先生の御都合よき時間を伺つて午前十時頃北大のクリニツクに先生をお訪ねして木村先生から書いて頂いた紹介状を差し出し身分を明らかにした。先生もお忙しきところを種々二人の山歩きのプランに御相談下さつて山小舎使用の方は萬

事解決、だがまたここで土地不案内なる難関にぶつかつた。始めの考へではどうせ冬休みだから學生諸君はぶらぶらして居るへ一寸こふ云ふと偉そうだが、から誰か一諸に行つてくれるだらうと思つてゐたら大違ひ、北海道の學生は賢澤であるみんなよりよき粉雪を求めて十勝岳とか青山温泉だとかへ行つて居て札幌には居ない。これには全く困つて仕舞つて先生も電話で方々聞き合せて下さつたが萬策盡き、まあ兎に角小生親類の北大學生の友人をさがすことにして手稲山のヒユツテとヘルベチヤヒユツテとの使用許可を先生に得てもらつて一先づ御暇申し上げ鈴木婦長に會つて手術場等を見せてもらつて、二人は少々ぼんやりして伯父貴の家に歸つて来て早速従弟にさがして貰ふ事にしてまあ少々のん氣に考へやうじやないかと云ふ譯で三角山へ一滑りに出掛けた。電車にスキ持ち込んで行くなんてさすがは雪の都だと思つた。午前五時天吾を見捨てお相川修君と云ふて醫學部の學生しかも北大山岳部員と云ふ屈強なる人が案内して下さることに決まり、現金をものご今までの憂鬱はたちまち元氣、皆で牛鍋などを伯母さんにして貰つて行程を相談し、買物に出掛け歸りに柳先生の御宅へよつて御禮を申し上げ、ゆつくり安心して床に着いた。山の氣持を知つた

三人のパートテイーは一寸計畫通りにはできるもんじやない、でこれは全く今度の旅行中の大なる喜びであつた。そこでこれからの小舎歩きがどんなに楽しかつたことか、さて翌日八日も晴、手稲山のパラカイスヒツツテまでは半日の行程なりとて午前十一時の汽車で札幌を出發する、久し振りの山歩き空も美しく晴れて居る、足も整い、良い氣持になつて輕川驛下車、それから四日分の食料を入れたリエクサツクの重みも心よく肩に來て午前の四時半手稲山の谷間にゆるやかに夕餉の煙の立上るパラカイスヒツツテに着いた。此の外觀誠に氣持よく建てられた小舎の一夜は思ひの外不快なるものであつた。そは大勢の泊客がありそしてうるさかつた。山歩きの連中の誰しもが持つ自分達だけのグループでゆつくり暮付き度いと云ふ氣持、それは我儘な考へかも知れぬがしかし又此を樂しみにわざわざ山歩きをするんだから、やつぱり大勢でちやくしてゐては面白くない。しかしまたこんな混雜にはしはしはなれて居ることとて自分たちだけで荷物などをちやんと仕末してしまつたへ最も之れをお互ひにきちんとしてしまへばいくら大勢混み合つても山小舎は又楽しいものなんだが時々勝手に振るまはれる連中と同宿した時こそ災難である、こんなことは小舎の生活のみ

に限つたことはないんだけれど。

一五〇。

そして夕方の一時を小舎の裏の斜面で遊んだ。さて翌日（九日）は早く起きて仕度は前夜にちやんとしてあるので朝飯も出発も早い。そしてもう八時頃には手稲山の中腹をたどつて奥手稲山をさして歩いた。しかしこの登行は樂ではなかつたと云ふわけは今年雪量が少く小さな藪が丁度頭の高さに出て居て帽子をひつかけたり足にからんだり全く一苦勞したがやがて奥手稲へ續くマウンテンの森の台地に出ると實に今までとはうつつて変つた良い氣持になつた。空はドンよりと曇つてはゐたが大きなたんぬんがみんなクリスマストウリーの様に雪をいたゞき足もとにはさうくと粉雪の平地ゆるやかにスイ〜とスキトは滑つて行きます、樂しきものの一つである。ここに於てカメラマン兼監督は盛んにこの森の中の景色を寫す、此處の一部は編輯の都合で色々と前後して居るが中々感じが出て居ると自画自讃をいたす。

こんなことをしながら午頃奥手稲の頂上のすぐ下に来た、ここで荷を下りて頂に登り一度の直滑走で再び前の所に来てそれからこの谷間に今年より新築された鉄道省の山小舎を訪ねて午飯と云ふことにした。

三ノノ 氏
約一時間も休んだのち再びぶら／＼と最後の泊り小舎たる朝里岳の下ベチヤヒユツテに向つた。この頃から雪がちら／＼と降つて来た。やがて下りになると又小さな藪の中を走ることになつた。そして吾れ老いたり云ふ氣持ちをしてみじみと味はつちやつた。案内の相川君は實に巧みにくるくると廻りながら下つて行くがもう小生にはあんなにこまかく廻つて下つて行くことが出来なくなつた。田村氏曰く「昔日の面影はないぞ」と来た。

こんなことをして小生今までに味つたことのない位雪だるまにしはしはなつて少々ものあはれを感じちやつたが白樺の間にシユワイツ風に美しく小ぎれいに健てられたヘルベチヤヒユツテを見ては又氣持もよくなつて早速上りこんで一生懸命に三人がかりで火を焚きつけて温まつた。全くスキーで歩いて居る中はいよいよが一度立上ると雪の日のたそがれはしんじんと身にこたへる。

ヘルベチヤヒユツテこれは北大の教師だシユワイツ生れのヘルカブラーと云ふ人が自分の故郷の思ひ出に自からこの小舎を作つて自分もウイクランドの日をここに來て楽しんで居て又一般山歩きに訪れるスキーロイフパーに宿泊の便を與へて居るものである。全々番人は居らぬし、それだけここは自分たち三人だ

けで十分に氣分の出せる所であつた。これではまはりの山が岩山だつたらなどと
思ひながら未だ見ぬアルプスの山小舎の樂しき雰圍氣のことなど思ひながら又
のつて歩いた内地の夏の山、冬の山の小舎で樂しかつたことなど思ひ出て、小
舎の外粉雪の音靜かに異なるころ大きな割木をどんどんストーブにくべて三人
で食后のお茶など飲み例によつて奥太をとぼしたり、駄鞆つたり、ヒユツテン
アツクに名を書いたりした。

この手帖には畧くも秩父宮の御暑名が載つて居る、又柳先生御夫妻の名も見
えた。

ほんとうに又し振りの山小舎の素林なたのしみ。田村は秩父宮の書いてお休
みになつたベッドに寝るとがんぼつてどうとうそこにとまつてしまつたが實は
ワラ藪圍が悪かつた。ぬくぬくと寝たがやけに面が冷へびへとするので目が覺
めた、未だあたりは眞暗だ、マツチをすつて時計を見ると五時半、もう一睡り
と思つたが寒くて睡れぬ、どうとう起きて手さぐりでまづパイプに一服火は赤
く吸ふたびに明滅する、それのからもそもと起きて立つて下り降りストーブに火
をたきつけやつと火勢の強くなつたころ三人は皆な起き上つて各自だぶくりに

着太つた妙ないでたちで朝飯は分業でたちまち出ま上つて仕舞つた。今日はすぐ上の朝里岳に行くことにしてある、半日行程の樂な登りでもあるから前夜から用意はして居なかつた、でも最後に熱い紅茶をテルモスに入れたのはもう九時にやつてゐた、外は残念ながら粉雪がふんぷんとして降りじきる、さて三人小舎の火の用心もすませゆるゆると朝里岳めざして登行をくほだてた、映画では晴天で途中から空怪しく頂上近くにわか吹雪に頂上を見捨てて小舎にのくれたことになつて居るがこれは興業價値をよくする為めでいや實は出ま上つたファイルムのやり場に困つて一寸編輯の腕をきかしたまでのこと、此の日は一日吹雪で頂上すぐ手前一〇九七米でタンネンの森もつきてそれから頂上まで広々と吹雪を真向に喰はされる平地を行くと頂上になるので帰りのスキーには全々無駄なところである、よつてあつさり先をオミットして此處の木影に一休み熱い茶など飲みぐるりと廻れ右をして吹雪の中の滑走と云ふ實に苦しいが又愉快なる場面となつたのである、滑る／＼今日はすつかり前の調子がでてブン／＼走つたりアルクタンネンバウムの間を廻つたり隊の前になり後になりして吹雪にほやけるファインダーをのぞきながら各種の撮影を試みた。こんなことを

しながら途中軽く午飯をとり又森の中へ入つてからは斜面を求めて廻り道をしながらそれでも十二時に一の九七米を出發して小舎へはもう二時半に帰つてしまつた、そして軽くつかれた軀を赤々ともへ出したストープの圍りに腰かけて三時の紅茶を飲んだり險約して買つて来たテヨコレートをかぢつたり、カメラマンは又此所で小舎の氣分を出すべく有り合せの小道具でセットを作つたりして樂しき一時を過した、夕食はもう明日鉄道へでる分と方一の時のパンを少々残してありつわけの材料と云ふと大げさだが持つて来た味噌小さな玉葱がやつと三つ残つた、これを二つは汁の實にし、残り一つを細かくきざんで小舎に残つてゐたコンビーフ半分と持つて来た鮭の罐詰の残りとまぜてバターでいためて醬油で味をつけて怪しげなる御馳走、外に新巻の切身、三人で分けて喰つた、それに最後まで残して置いたハムの罐詰を開けたが戸棚の中から豚鍋をやつたらしい、残りが鍋にあるのを發見してハムは半分明日の御馳走に残した、實はかくの如く食料の缺乏を來したのは出發の時ヘルウインクラーがヘルベチヤへ行つて大分其の御馳走や米が残つて居るらしいことを聞いたので肩の重さを必要範圍で極少量にしてかつきこんだところがやつと前に書いた様にコンビ

トフと豚鍋の残りとラード(このラードは田村先生の靴の油になつたか)しか
なく悲觀した、だが名コックの腕前はとうとう目の皮のたるむ位に三人共満
腹して、ほんやりとゆる石油ランプの下で紅茶をフキく、タバコなど一服と云
ふ贅澤なことになつてしまつて話はとりとめもなく山歩きの思ひ出ばかり。

あちらのスキーファアの山小舎日記にある如く *Eaem. Ranacher plankeisen*
n. Grim Reut の *Huttenleben* を三人は心ゆくまで此のスキス風とこじんまり
と作られた北海道の小舎に過ぎた、外には粉雪がサラ／＼と今夜も未だ降つて
居る。

十一日朝いつの間にか雪はぱつたり止んで一夜の中にもつぞりと積つたのは約
三尺小舎の玄関台がかくれてしまつた、こんなことは内地では珍らしいからぬこ
とだが相川君は北海道は一寸こんなことは珍らしいと云つて居た。九時小舎の
中をきれいに掃除して岳物はキチンと片付け小舎料三人分金五拾銭を備へつけ
の柱をくりぬいた金唐に投げこんで三人はスキーをつけ今日の午飯と外に少量
の萬一に備へる食料だけでもうすつかり軽くなつたりユクサツクを肩に履まで
うまる雪の中に三人で更る更るラッセルをやつて銭函の町をさして出發した。

谷の上の空はだんく、と晴れて来て日も輝き出したが深雪に道ははかどらぬ。ラッセルと代つて列の最後にぼつと一息する位くたびれて仕舞ふ。

かくて次第に晴れ上る太陽にキラキラと輝くタンネンの森の中をぬつてゆるやかに谷からの登りにチツクザクのスキーのあとを残しながら遙か山が見える処にやつて来て午飯を食つた。此の間盛んに森の景を撮る、やがて銭函峠近くなるころやうやく斜面もウインドザイテとなつて足もあまり足もあまり深くうまらずに、あたりの景色もすつかり谷間から抜け切つて開け、まじ方を顧れば美しい朝里岳のゆるやかな頂上もよく見られる出發後四時間のラッセルアルバイトの後漸く峠の頂に立つた、前面には晴れても尚どんより暗い海、そして波のうねりがはるか下の岸にせまる寒臭々として銭函の町が見える。これからの景色をバツクにしてすぐ前の針葉樹の樹氷が午後三時の冬の日ざしを受けて真白にくつきりと浮彫りの様に美しい、さてこれからスキーのびつたりはりつけたアザラン皮も取りはづし峠から裏道傳ひに一氣に下の里さしての滑走であるが、これは折しも日曜日のこととて峠までのスキー遊びに大勢の人が登つて来て下りた跡道は丁度樵道のごとカチカチに固められじかも戻もらの穴で凸凹は

げしく其の上各等の深雪のラッセルに足のコントロールも乱れ勝ち或はカーブを廻りそこねて道の外に飛び出したり、狭い橋の上を飛び越したのはよいが向ふ側へスツコロンドリ、やつと平地に着いた時はみんな真白にやられちやつてふうふう云つてゐた、まだスキーを折らなかつたのがよい位、これで四時の汽車に時間がないので服の雪も落しあへずどんどん急いで大きな波がドロドロと押しよせて居る岸邊の停車場にたどりつき、温い紅茶をすつかり飲んでしまつた所へ札幌行の列車が入つて来て、其れに乗つて札幌に無事帰つて来たのが五時半頃であつた。

あはだしいこの旅は此處で夕食を御馳走になるやすぐに相川君にも又柳先生には御電話で厚く御禮を申上げ、尚先生は空沼岳の秩父の宮の小舎の使用許可も得て下さいましたがこれは後日に譲ることにして小樽病院へ夜の十二時頃帰り着いた。

そして明日は十二日だ、東京へはもう帰らねばならぬ日だ、そして未だ青山温泉又晴れた日の下でスキータクニツクの写真も撮りたい。

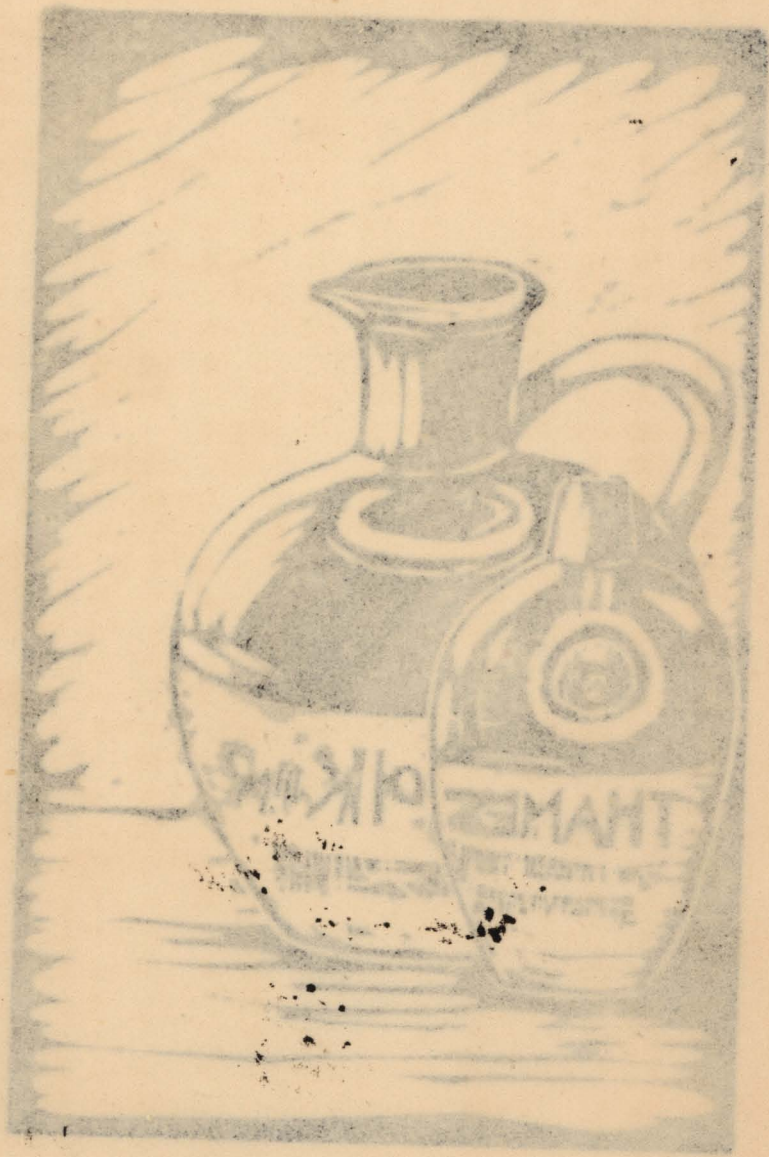
十二日、晴、二入で再び小樽郊外の山で今日一日暮して其夜帰京するかそれ

とも青山温泉へは今日夕方には入れるとして十三日晴ならばニセコアヌプリに登ることが出来るしその日の夜行で帰られる。この二つを相談して折角来たんだ、青山温泉へ行かうと云ふことにきめて山本先生始め皆様が今夜歓迎會をやつて下さると云ふのを固辞して其れぞれ御殿申し上げ、山本先生に御無理を願つて医局おてに少しおくれる悪しからずと云ふインテキな電報を打つて戴いた。

午前十時の汽車で急いで青山温泉へと向つたが途中から空模様悪くこんなことなら小樽でカメラを振り廻り廻して残して置いたフィルムを其の予定通りすつかり美しいスキーファールンでうづめちまへはよかつたと思つたがあとの祭り車中もう温泉も止めて其の儘函館へと思つたが、明日の空に希望を持つて昆布駅下車それから馬櫓を仕立ててニセコアヌプリの麓の高原をゆられゆられて日も暮れる頃青山温泉に着いた、出で湯にゆつくりと入つて明日の行程を考へた旅館の待遇中々宜しい。

十三日、希望は見事裏切られて朝から雪、これでは山登りも出来ない、附近の斜面で夕方迄スキーをやることにしてカメラと午飯だけ持つてぞして時々薄日のあたりとところで今度は田村がカメラマンで小生自演と云ふことにして残り



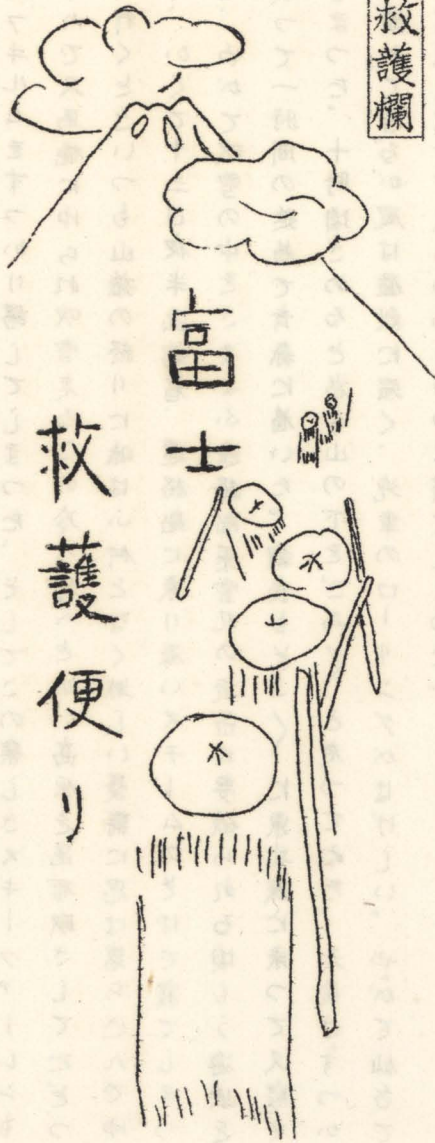


のフ井ルムをすつかり駕してしまつた、そしてこの楽しきスキーファールンも
すんで又馬焼にゆられ吹雪走るこの冷へ冷へと広い高原を昆布駅さしてたどつ
て行くときいつも山旅の終りに味はふ何となく淋しい憂鬱に思は落ち込んでゆ
く、かくて十三日夜半函館着、連絡船に乗り湿いスチームのそばで寝てしまつ
た、やがて吹雪の中をさまよふ連絡船乗客の泣声に夢破られる頃もう海峡を
渡つて一時間の延着で青森に着いた。朝食もどこくに東北線に乗つて又寝て
しまつた。十時頃さめると岩手山の下をごろくと走つてゐた。天気はすつか
り晴れて居るが風は猛烈に強く、汽車のローリングがはげしい。やがて仙台で
日は暮れはてて又うつらうつらと寝てしまつた。

長い汽車も十五日朝五時上野驛で終りを告げ、そのまま病院へ、あんまりの
ん氣に遊んぢやつたので少々恥しい。その上山本先生に打つてもらつた電報は
浅水先生に最先に見られたにはすつかり恐縮して仕舞つた。此んな様にして冬
の北海道のスキーを味ひ、フ井ルムもどうか編輯して作り上げた。

最初の予定は今夜の旅行で粉雪舞立つ純スキーのみのフ井ルムを寫らうと思
つて居たが忙しい山歩きを兼ね、其の上滑走のところは皆悪天候に災されて、

救護欄



これを旅行映画にまとめる外のなかつたことは残念であつた。天氣と暇に恵ま
 れたらきつと美しいアーノルドフランク又はハンスシネーベルゲル或ひはゼン
 アアルモールのスキーアンドカメラテクニクにも劣らぬスキーフィルムを作
 る自信は十分にあると思ふ様に云つて置かう。誰れも真にしないから。
 終りにこの旅行につき大変に親切に御世話下さいました北大柳教授、小樽病
 院山本先生の功、先生に厚く御禮申上げます。(六、十一、七)

富士救護だとり。(外科班)

富士の救護のまことの姿を現はし度い爲めに、一人一人の手でなつた登山日誌の一部を缺かんとつて、原文のまゝを寫しました。

時。自昭和六年七月十日至九月六日

医師。小野田 肇 村山 成一

神山地真氣 粟本勝之進

成内頼三郎 浜名 元中

若林 研爾 森 豊明

笹島孝次郎 島田 信勝

A 君

七月十日。五合目。山開きより時浅く、山頂近く雪積猶深きものの如く、山容は時々霽れ来る間に透視せらるる間係上、且昨日を以て初めて八合目の小屋の雲を挿ひしばかりとの話し。八合目を中止して五合目に留る事と成す。五合

目の救護所近く毎日の食事所の三色旗の幕のペン章を中に引きめぐらしありし
 なつかしみは一時に到来し。學生らしき一團は急に整歌を合唱しつつ行き過ぎ
 とかく慶應の気分は本校護所近くに横溢して居る。

十三日。八合目。風雨強し。

午後幾分の雨も小やみとなり、風もなきし傾向を見せし時、わづかの女連我ま
 まをおし通し、豚の様な体さその頂上をさしてのほり出せしには驚くの外なし。
 彼女等の容姿海女に等しく、霧をすかしてうごめく屍の動きは、屍を海表に浮
 べて浅き海表に働く海女のそれと比し、グロカエロかとかく屍大明神に祝禱あ
 り！

日君

十六日。朝晴。石曇。風烈。今日の中に八合目まで登らねばならぬのですが、
 M君（内科）と二人でへはつてしまつてどうにも足が動かぬ。責任上八合目に
 電話を掛けて見たが不通で駄目だった。

十七日 武井氏（巡查）が一つ一つ途中の小屋へ寄つては帳面を検査する間
 係上、一つ一つの小屋で番茶を頂戴し休むので大したことをなかつたが、然し

八合目近くで、すつかりへばつて、お真けに帽子を風で吹き飛ばされたのにはおはてた。午前十時生理のK先生、〇助手が元氣でお見えになり、御疲れもいとほずとグルタチオンBの研究に着手せられたのには敬服した。

昨日、八合目に居ることを忘れる程、救護所の空気が面白い。可恐らく気圧の關係でせうといふ言葉が断然流行してゐる。K先生のエトモアが仲々面白い。女給の小唄をほがらかに歌つてゐる者がある。更に憂鬱を意識せぬ。只昨日往診した外傷患者が、今朝死亡したと署から報告された。一寸憂鬱を感じずる。M君は頭痛で朝から起きぬ。然し時々五合目のお金ちゃんから内科の先生へと可愛いい聲で電話がかかるのには歎息した。

山のホテルのコックが昨年吉田の里で〇を買つて運悪くx x x xを頂き署に引かれたそう。所がそれは巡査の好きを奴だつたのか警察署でさんさんをぐられたそう。また、ロソクを友に三名（K先生、〇君、僕）で愉快に話つてゐる時、けたたましく電話があつた。出て見ると患者にあらす五合目の寫真屋から八合目の寫真屋への電話である。〇君が寒氣と雨をつけて上の小屋まで言つてやつた。所が寫真屋電話をすませると直ぐ帰ちうとしたので小生むつ

として目こら駕真屋換移位して帰れりとなつたところ。先生すつかり恐縮してゐるひまがら堂に入つて御禮を云つたのは三人ともふき出した。

廿一日、コツクが頂上からほむ鏡を持つて来てくれたのは感謝した。

C君

廿二日。午前七時半八合目校護所へ。生理のK先生、O君に會ひ更に寂寞を感じせず。夕食をうまく食したが、どうも頭痛してたまらない。

廿三日。校護所掛りのボーイ山崎君、コツク某、その他小屋の連中は僕達には随分好意を持つてくれるので嬉しい。何処でも変わらないのは人情だ。しかも素朴な田舎人のいゝ氣持が僕達を慰めてくれる。

夕方は美しい影富士も見へた。緋の様な白雲の波が六合目の下あたりにはなびいてゐる。

廿四日。夕方は可成り曇つて影富士も見えない。走りの上部の岩壁を見ながら先年この岩が落ちた時、某學生が吉田の走りの途中で突きあたられて脳味噌が飛んだとかの悲しい出来事を聞いた。

廿五日。晴。生理の先生達も今日下山。午前中のよく晴れた時を幸ひ頂上へ

出掛けた。胸突ハ丁も八合目からは樂なもの。北側は五合目以下曇つて見えな
い。南側は可成り晴れてアルパス連山の存在もわかる。駿河湾、伊豆半島巨
とに浮き出して居る。お銀をのこつた。K先生はどうしても須走りハ丁目から
吉田八合へ新路を作り度いと一人でお出かけになる。仲々勇敢であらせられる。
くるりと廻つて茶屋でほど餅を食ひ走りを下つた。○君下駄がけで登りは人々
に讀められ、鼻高々だつたが走りで拙者につき合ひすつかり消げてゐる。

午後四時丁君（内科）一行到着。五合目から患者ありと云ふ電話。丁君可成り
の歳莫き感ずるとは思つたが、仕事は仕事致し方はない。おそく返つたので誌
もろくろくせず用意を整へた。

北からの風はひどくなり、下からは霧が吹き上げて出発には就いたが氣後れが
する天候だ。七合五勾までは霧の中を一さんに、それから走りに入つて飛
んど。見上げると岩壁がおほひかぶさる様で甚だ心地よからず、下を見つめて
五合目まで半分、和光の小屋に落付く。

此処もしきりなしに登山者はあるが登るべき元氣を貯へてゐるので人間らしい
氣分で一杯だ。

廿六日。暴風雨。爐はたで山の荒れた時の話が始まる。和光のおやぢは先年にあつた不浄流しに十人落されて死んだ事や。六合の小屋で止めたのに無理に出で、未だ新鳩も聞もない夫婦連れが吹き落され、探しに行つた時ははるか下の方で男は頭のみ出て生き埋め、女は全く埋つてしかも尻手と尻手はしつかり握られて居たことや、山の神秘を軽視して無謀を通す人々の数々の悲惨が次ぎ／＼話された。

廿七日。晴。朝外科の看護婦と従姉妹の連中に起された。いい日に來て仕合せだ。山の注意をして送つてやつた。一回元氣だが六合目へ皆つけばいいがと懸念しつゝ。

廿八日。曇。いよく下山の日だ。六合目に來てからは患者は少なし、和光では一言目には先生々々の連發で恐縮する。がよく世話してくれるし、里に居ると少しも羨らない。それに景色はよし全く愉快だ。此の分ならもう一週間位も居たい様だ。

D君

廿八日。六合目。八時には既に郵便局員もホリスも就床。吾一人風の音を聞

きつつ日誌など読む。ゐろりの火は赤い。恙くない氣持である。下山せし一行はもはや東京着も間もあるまい。夕飯を喰べ、患者を診て後は疲れも忘れの様頭痛なども知らず至極コンファアダブルである。

廿日。晴。今シーズン最初の好天氣なる由。今朝の御末光はとても奇麗だつたそうだが寢坊として見損なつたは残念。六時半起されて七合五勺まで下る。

廿一日。風強し。五合目。久し振りに風呂へ入つて、三日間の汗を流す。お金ちやんのよきサーヴィスと相俟つて、久し振りに愉快に寛ぐことが出来た。

八月一日。晴れたり曇つたり。朝七時頃登つて来た外科の看護婦に起される。途中まで送るつもりが、二人とも可成りへばつた様なので到々八合目まで行く。

E君。

四日。晴。登山者少く、和光にて終日を暮す。本日は河口の湖上祭なれど下界は雲にさへぎられて唯花火の音を聞いて、そのにぎはひを察するのみ。まるで盲人の花火見物みたいだ。

八日。晴。正午霧深し。八合目。朝四時起床。周りが五月蠅ので起されて仕舞つた。知事の一行が頂上へ出掛る。中々よい天氣だ。知事の取巻きの若い奴

が虎の威をかゝる狐で大きな顔をして威張りやがるんでシヤクに融つて不愉快で不愉快で仕方がない。禮義を知らざること、言葉も知らざること甚しい。此方が下手に出ればつけ上つて来やがるんで遂に一發爆發させてしまつたが、益々不愉快になるばかりだ。

夕方お金ちやんより電話来る。曰く「暇だつたら下から登つて来る別嬪さんでも眺めてゐらつしやいと。根つから別嬪さんも上つて来ぬーや。

夜天氣は山神の怒りにも觸れず、極めて晴朗で東京、横浜、八王子、甲府、吉田、御殿場、鎌倉方面から山中山荘の火まで見える。平素心掛けのよい人は違つてもんだ。又明日も快晴だろう。

F君

十二日。五合目。夜ぬろりのほとり、和光親爺の昔語りには話ははずむ。盃を手にした彼の舌は妙にもつれてトーキの如く所々がわかるだけだ。朝般して兎に頬をひつかかれるかと思ふと、ごうまんを警官殿をカロツキーにするたのもしい我等の先輩も現はれる。美妙な尺八の音を天竺の境に漂はして和光の親爺を泣かせれば、爺さんから教はつた即席のりとで小御嶽の神主をへこませる

天才的外科医も出て来る。霧深い五合の宿は更け行くままに、親爺の黙舌は止る所を和らさない。

十三日。つれづれにまかせて八合目に電話するに、午後二時頃、内科の丁君は頂上してS先生が代理で外傷処置中であると云ふ。局長の聲は一度聞えたら間違ひはない。

十四日。和光の子供達と七合目まで遊びに行く。七合の小屋の親爺の曰く、昨日頂上して来たら、八合目の先生は御留守で局長も、も一人素人の者が傷の手当をしておたよ。時間をたゞすと正に午後二時頃と云ふ。私は妙なほがらかさで、外科のS先生が素人で内科の丁君が外科の大家……と口づさみながら帰路に就いた。

午右霧は相当に深かつたが近くの山々を遊び廻つて、野いちご等をとる。近所の子供さん達救護所の下で御飯をたき、かるめを焼く。これは當地御盆の年中行事だそう。救護の先生はお客さんになつて御馳走にあづかる。

山の中腹に腰掛けて、雲の往来や、霧を透して見へてゐる峰の常緑樹など云はん方なく美しい。小鳥の声、虫の唄き、すべてが平和だ。子供達と遊んで法要

を忘れた良寛法師を懐ひながら、いちごをべたべた時々のぞく陽の光の壯麗さを
 楽しんで

夜十一時、和光の人は皆寝てゐる。空はとてもよく晴れて、北斗も見えるし、
 天の川もはつきり出てゐる。少しうすら寒い空気が暗がりからやつてくる。明
 日は下山だ。G君はもう新宿駅へ来る頃だろう。

G君。

十六日。天気晴朗にて見晴又なくよし。午前中登山者も少ない模様なので徳
 ちゃん、しげちゃん、梅ちゃん和小御獄まで行き、富士五湖を恣に眺めて来た。
 救護班の身、急ぎ帰途に就く頃、霧何時しか足下に張ひ来り、忽ち眺を奪はれ
 る。やがて雨さへ降り出し、クランケは無く、山の淋しさ深くなるのみ。客あ
 り和光親爺しきりに飲んで居る。夜は静寂に響くレコードの浪花節の音と共に
 シラエヘンドに更けて行く。

十八日。晴。五合目の机に最後の夜を明かし、六時起き出でるに南アルプス
 雲の海、雪かと思れば雲なり、奈良巡査登ると云ふによりN君の下山を待たず
 八時頃共に登り始む、同宿の行者等おきんちゃんも登る。十二時頃八合目に着

き、局長に會ひホテルを見る。天氣はれて見渡せば南アルプスの山々相模湾迄も美しく照り映へて居る。……

夜はホテルのドテラを引つ掛け外に出れば遠く都の灯がなつかしく輝いてゐる。

H 君

廿一日。晴天。午前九時吉田の警察署長及び池谷先生に送られて内科のS學士と馬に乗り、赤松や落葉松の林をぬけては林に入り、晝頃馬返しに到着した。二合目の少しく前でG君の一行に會したので山道で引継ぎを終つて更に進む。五合目着は午後二時。警部の案内で八合目に向ひ午後五時、八合目救護所に達した。

I 君

廿七日。昨廿六日、午後十一時半飯田町駅に約束通り下君と落ち合ふ。満月に近き月を旅路(?)の友として古風なる出發なり。それに調子を合せてか駅も亦古色を帯びたり、型の如く汽笛一聲なり。推開の標本の如き、さしもの新宿駅も人影なし。時十一時五十六分。道理こそ、車掌君に大月で下してもらふ様願んで一と安心なすこともなく、睡りに入り、猿橋近く目を覺す。トンネル内よ

り窓に額を当てて猿橋にひと目御目にかかると。月夜の猿橋又よろし。

二十八日、晴、四時半柵から鉢首をもち上げて、先づあかね色の東天を眺める。ホテルへ下つて爐端で東天とにらめっこ、小半時御朱光まぶしくて正視に耐えぬ。大根清浄なわけはないが。救護所で伊藤巡査としぶくさし向ひの膳につく。コソク居れども何もなし、昨夜の味噌汁と怪しげなる鑑詰。今日限りの室のこことて是非もなからん。

廿九日、雨時々上る

何處へ行つても俺について廻る早起きの癖、五時半に目が覺める。隣の柵の下君は頭らかに夢に遊ぶ。隣室のインテキ行者奴が先生々と云はれながら若い女にからかつて居る。聞いちや居られない。行者としての道具立ては一人前だ。一本歯の下駄、腰椎の方まである長い頭髪、「ハンコ」だらけのよごれた白衣、白袴、白足袋、白鉢巻（但し白と云つても白くない、始めは白かつたんだろ）腰のあたりで鳴る鈴。川崎の方の或る教會の行者さんで先生なんだそうぞ。その先生の御弟子さんが二人若い御婦人だ。毎食前お祈りをする。くどくどと日本語で文句を云つた聲白ミュー／＼ウイ／＼ウアイ／＼とイレウス患者のナウ

せやみたいな奇妙奇手烈音を出して終了する。その食ひものはそばがきと来てゐる。こんな所へ若い女を怪しげなニキビだらけの下品な先生と稱する男にまかして放置する親御さんも親御さんだと人事ながら氣がもめる。

廿日

午後一寸の時間に先づ相棒の下君が小御嶽へ小一時間も行つて来る。次でコタツでぬくもつてぬた庵を叩き出して自分でもぐり込んだ。追ん出されたので行く行く程に上る程に陽が輝き出した。神苑でベンチに寝る。暖いので一枚脱ぎ、二枚取り遂に半身裸体になり晝寝する。陽はうららか！。四圍寂として聲なく、富士の一部に白雪掛るのみ。

一日。例の行者お供の女と下つて来て、此の家の不淨掛つた人が居るか来たかするとぬかしやがる。實は行者出掛ける前に渾力か何かの親父さんが死んだ報せが来たと云ふことを聞いて行きやつたもんだから、そんな種を悪用しやつて愚民をまどはしやがる。お供の奴も奴だ。

「先生はお葬ひ帰りの人でもお墓参りに行つた人でもすぐには居られないんですよ」とぬかし。行者に聞える様に「俺は廿四日にお墓参りして

来たよ。不淨掛つて悪かつたぬ。親父の余日に墓参りして何が悪いんで」と大きな聲で怒鳴つてやつて少しばかり清々した。でもあの「遊はせし女郎と行者野郎の居る間はどうも芯から清々しそうもない。

夜は例によつて爐端。町田先生のお話が出る。現今五合目で皆さんの踊る「お船々々」つて踊りは先生が種を蒔いて行つたんだそうだ。それ程この踊りが上手だつたんだそうだ。此の踊の元祖様だそうだ。

丁君

九月一日、午後三時半吉田に着き、居ると自動車中にルンペンの夢を結ぶ。池谷先生、警察に立寄り、自動車にて馬返しへの途中工長、内科の丁君に出會ふ。曰く、五合目は退屈しない。先づ例のお金ちやんのサトビスにてお茶を御馳走。一入奇人あり、年の頃二十三回にして死女二入を引きつれ。小御嶽神社に行となす。但夜に入ると歓声、奇声高くして安眠を妨害する甚し。蓋しや。

九月三日

宿の主入昼間より酔興高まり盛にはしやぐ。館内誠に陽氣。夜は相変わらず主人の風変わりな歌の文句に苦笑。例の行者内輪喧嘩にて帰るの帰らぬのと甚だもめ

るが聞えて、子供のすねたみた。主人仲に入りて漸くして止む。

九月五日

患者なし、ステツキの製造に日を暮す。

六日

下山！

(終)

外科救護班患者

○患者数 一〇九(男七九、女三三)

○病類別 高山病 八七(象管支炎合併者三名)

外傷 一〇(死七一名)

フリツペ 五

下痢 二

脚氣 二

耳痛 一



外苑救護便り

○使用薬

胃痙攣

齒齦炎

— —

アスピリン、
胃散、モヒ、
置材料

安那カ、
カンフル、
赤酒、
ミブレミン、
ブランデイ、
ビス、
グレラン
及外科的処

(以上)

外苑救護便り

大六學野球リーグ戦

救護と云へば野球かと云はれる程リーグ戦は吾々医局員にとつてうれしいなつかしい離れ難いものになつてしまつた。そして野球が年一年と隆盛を極めるに連れ吾の救護も多忙になつて来る。ビッグゲームの時は午前十時より押しかけ、切符前賣の日に迄出張しなくちやならなくなつた。春の慶明戦には例の應援團の暴行で球界未曾有の不詳事を出し、合々の救護班もファンと共に外野スタンド下に夜八時迄鐘詰の憂目を見るに到つた。

春のリーグ戦は危くも慶應優勝に終つたが秋は凡て乱戦に次ぐ乱戦で應援に眠らく慶應も武運拙く遂にBクラスに陥落し救護班も完全にクサクサしてしまつた。リーグ戦開幕當時は未だ夏の日射が強く軽度の日射病或は脳貧血等の患者多く一人は重症で直ちに入院、内科病室でステツた男もあつた。病名は脳溢血とか。その他球場での救護は四五十人に達して居るだろう。

早立戦 早大審永選手は投手の猛球を喰らつて倒れ溢血の爲入院す、現代チャ
ーナリズムの愚習で致命傷の如く喧傳され遂に審永死すと迄の流言が飛び爲め
に医局員電舌口に呼び出されホカンとして返事に困惑した事数十回。今や新國
劇に上演され、慶應病院病室的一幕も加へられて居る。主治医K先生のおのユ
ーモラスな姿を登場させたらどんなに都下の人氣を拍するだらうに、唯プロの
みしか出て来ないとは脚色者も頭がないと云ふものだ。

審永も予定通り全快し早慶戦には敵ながら天晴宿將の賞録を示し勝因を作つ
た事は皆様御承知の通り。

慶明二回戦、小川の問題のホームラン、その日試合終了後事務所へ怒鳴り込
んだ男がある「あれはホームランに違ひない。俺は左翼ライン内に居て御覽の
通り、あのボールで足部に打撲傷を受けたのが何よりの証拠だ、何とか手当し
て呉れしと。事務所でも弱つて、翌日病院外来へ送つて来た。成程ボールで受
けた傷がある、新聞批評にも疑問の一打とあつたが、此れが明らかに誤審なる
ことを裏書して居る。

早慶二回戦 慶應選手入場の際その自動車で五歳の女児が母親の不注意の爲

め驟かれ、人事不省で入院、輸血の効なく内出血甚だしく直ちに死亡したのは可愛相だつた。

以上が主なる救護で他は簡單なものばかり。

明治神宮体育大會（十月廿七日—十一月三日）

今年の大會は絶好の天氣に恵まれ、初日には早くも世界記録二つも生れたに拘はらず、不景氣の爲か時局重大の際とてか、見物人少なく至極閑靜にして救護も特に記する事はなかつた。救護人数約七拾名。

日米野球大會

讀賣新聞社主催の爲め救護は勿論見物も出来ないかと大分心配したが、神山先生の御盡力で救護も半分我医局で引受ける事になつた、讀賣診療所からも大勢来て居るので舌々は見物又だ。でも一度は先生グラウンドへ出て一壘外野寄り迄往診（？）せられ、翌日新聞誌上の漫画欄を賑やはして居た。

米選手には医師（？）ノールスト云ふトレーナー同行し、マッサージし、應急処置等をやつてゐた。この人の講演を一寸聞いたが、米團式の大風呂敷で内容は貧弱だ。面白いと思つたのは突指の療法だ、爪床の血腫を成るべく早く取り出す

即ち爪根の血腫は小切開をやり、爪頭では針で誘導する。その結果痛は軽くなり血腫凝固に依り爪が浮く事なく、プレートに支障を來さず治るとの事だ。

ラグビー救護 一時中絶して残念に思つてゐたがこれも今シーズンから青山外科と半々に救護することになつた。今後全部取り返へす様にしたいものだ。

赤倉三四會ヒエツテ救護(スキー)

十二月中旬より開かれる三四會ヒエツテにも救護班を當医局より出張することになつた。医局員同窓會員の御来訪を待つ。

プール救護便り

新装成れる東洋一の新宮プールをあれども吾々の医局の附屬物の如く使用し得る我が医局員は實に幸福ではないか。

完成後最初に行はれた早慶第五回水上競技大會を手初めに救護に出張せし競技會の主なるものを挙ぐれば

早慶水上競技 日米予選

日米對抗競技 全日本選手権予選

全日本選手権 インターカレッジ各種目

明治神宮大會

以上であつた。

尚其他暑中は毎日午后より三三伍々交代に一般に公開されたるプールの游泳者の救護の目的で出張せるも、何等特記する如き事故もなく、溺水者もなく、プールに常置した救護函も暇で時々、丙寅紙漿繖帶材料ロートワイン等の補給を要したに止る。(以上)

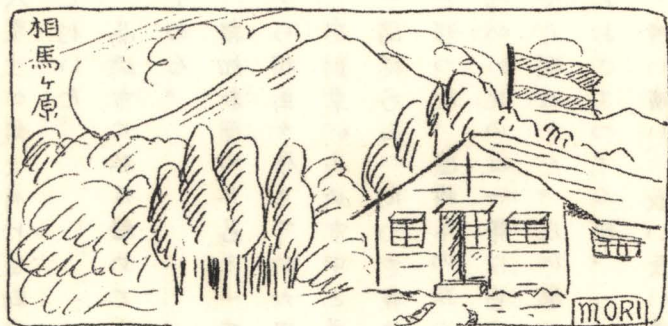
軍教野外演習救護班便り。

森豊明記

本大學予科並びに高等部學生の軍事教練野外演習は、毎年春秋の二回、相馬ヶ原、富士裾野、或は習志野等に於て行はれる。

本年度に行はれた野外演習の救護班として当外科教室から出張した諸學士の状況を簡単に報告して見ると次の通りである。

班 級 負 護	學 生	場 所	時	
森 豊明	予 科 第二學年	群 馬 縣 相 馬 々 原	昭 和 六 年 四 月 十 六 日 ヨリ 同 廿 三 日 マデ	1
小 方 則 六 郎	高 等 部 本 科 第 一 學 年	靜 岡 縣 富 土 橋 野 濃 々 原	九 月 廿 四 日 ヨリ 同 廿 八 日 マデ	2
寺 田 泰 三	予 科 第 三 學 年	靜 岡 縣 富 土 橋 野 濃 々 原	九 月 廿 八 日 ヨリ 十 月 五 日 マデ	3
武 藤 藤 六 郎	予 科 第 一 學 年	千 葉 縣 習 志 野	十 月 廿 日 ヨリ 同 廿 三 日 マデ	4
富 田 勝 郎	予 科 第 一 學 年	千 葉 縣 習 志 野	十 月 廿 九 日 ヨリ 十 一 月 一 日 マデ	5



群馬縣相馬ヶ原軍教救護班日記

この軍教の野外演習は予科第二學年生のため、四月十六日より同廿日まで、榛名山麓相馬ヶ原で行はれた。教官は澤渡中佐、八田少佐、渡辺大尉、佐藤中尉、折館特務曹長等で、救護班員は森豊明であつた。

外科は十六日から廿三日迄で、それ以後は内科の櫻井學士と交代した。

四月十六日（木）快晴

午後救護の藥品材料を整へ、病院を出発上野駅へ向ひ午後一時十分上野駅の列車に投じた。岩道、熊谷あたりには下度櫻が満開で非常な賑ひを呈してゐた。

高崎駅のホームに降りたつたのは夕刻の四時近くであつた。駅前にはニ三人塾生が鏡を肩に自動車の運轉手を取り巻いて自動車の交渉をしてゐるのが目に付いた。

高崎市に私は始めて来た。相当賑やかな町で伊香保へ行く電車が市中を通つてゐる。

報知新聞のK君を一寸尋ね、直に自動車を雇つて相馬ヶ原へ向つた。高崎市から相馬ヶ原まで約六里ある。

自動車が高崎市中を通過すると急に開けた平原へ出る。自動車は桑畑の間を一路榛名山へ向つて疾走する。私は運轉手と色々話す。話は野球より早慶隊へと移つた。運轉手の談によると、高崎市の助役は慶應出身の人だそうで、その為めか此の辺一帯は皆慶應員員の由、それに續いて色々と慶應禮讃をやるには少し開口した。だが譽められて氣持の悪いことはない。私も好い氣持で自動車におさまつてゐた。

廣い廣い、長い長い桑畑を通過すると、いよいよ榛名山麓地帯となるのである。道は次第に登りとなつた。約十分ばかり登ると、箕輪と云ふ小さな町があ

る。

自動車が箕輪の町に差し掛つた。

「この町は大した町ではありませんが。」

運轉手はハンドルを手に私に話し掛けた。

「御承知のデブイスクップの清水善造さんはこの箕輪から出られたのです。今その家の前を通ります。」

運轉手の口吻にはいゝ知れぬ得意さがあつた。

箕輪の町を私に理解させるのに運動の選手を引合に出した所が面白い。今から柯年の前だつたら、こんな場合に決してスポーツマンの名などを持ち出さなかつたであらう。兎に角スポーツの世の中となつた。私もそれで箕輪と云ふ始めて知つた町を理解したような氣持になつてしまつたから不思議だ。時代の推移と云ふものは面白いものだ、とつくづく考へさせられた。

「これが清水さんの家です………」

突然運轉手はふり返つて云つた。

私は一寸頭をかき上げてその家を窓越しに眺めた。

道は登るばかりである。少し退屈して来たのでクツシヨンに靠れながら煙草を吹けし始めた。

相馬ヶ原廠舎に着いたのは夕刻五時頃であつた。廠舎の門を入ると大勢の塾生がキヤツチボールなどをやつて遊んでゐる。中庭には高く三色旗が飄つてゐた。

私の宿舍は廠舎中で最も高い所に在る將校宿舍であつた。入口には「慶應義塾大學本部」の看板が懸けてある。

入口を見ると小使が出て来て

「四谷の先生ですか。」とおぢきをした。

そして宿舍の中央の「医務室」と書いてある部屋へ案内した。

部屋の中はホントのバラックで、棚が一つ、テーブルに椅子が各一つ、寢色が二つ（一つは患者を診察する時に用ふるものである。）火鉢が一つ、痰壺が一つ、洗面器が一つ、それに電燈。その他に何物も無い。至つて簡素なものである。その備品も總べて軍隊用の最も質素なものばかりである。

小使は軍隊式に忠實に働く。

「お湯が沸いて居りますから。」

小使は直立不動の姿勢で云つた。

「うん。それでは入らうか。……」

私はゆつくり云つて上衣を脱ぎ始めた。小使は早速私の背後に廻つて上衣を脱がせてくれた。

午後六時夕食のラツパが鳴り渡つた。

間もなく小使が夕食の準備が整つたと報じて来たので將校食堂へ行つた。

そこには既にS中佐を中央に各教官連が席に着いてゐた。そして私が入ると一齊に私に注目した。私は一寸目禮して席に就いて自己紹介をした。一同も順々に立つて同じ様に自己紹介をした。

間もなくO持務曹長は藥罐を持つて一同の茶飲茶碗に何物かお茶の様な液体を注ぎ始めた。一同はお茶でも飲む様にガブリと飲む。私もお茶のつもりでガブリとやつた。……お茶だと思つたのは實は酒であつたには私も少々狼狽せざるを得なかつた。

一同は賑やかに話す。S中佐は中々話が好きらしい。一杯機嫌で長い鬚をヒ

ネリ／＼色々の話題を持ち出す。その間絶へず黙々としてゐるのはH少佐である。W大尉は元氣に軍人らしい態度でよく談じ、よく飲む。S中尉も話好きだ。少し飛びかかつた頓頂部をなでながら話す。供し酒は中々強い。ここに一寸面白い人物がある。それはO特務曹長である。彼は誰の云つた事に對しても一應は必ず反對する。それが反對する余地のないと思はれる事に對しても一度は必ず反對して見る。上官だろうが何だろうがそんな事には遠慮しない。一寸眞似の出来ない面白い性格の持主である。

食後は事務室に集つて明日からの演習の相談が始まる。地圖を中心にしてS中佐が種々演習の計畫を説明する。そこで私の診察時間も定められた。

午前、七時卅分より八時迄。午後、〇時卅分より一時迄。と掲示が出た。S中佐の談によれば、患者は毎年たいたものはないが、東京へ帰り度いため病氣を大きく云ふ不心得者が出て来るから、それを注意して欲しいとのことであつた。

午後九時、消燈ラツパは鳴つた。

將校達もホツ／＼自分の部屋へ引き揚げた。

私も自分の部屋へ入った。學生の廠舎の方からも人聲が聞えなくなつて來た。相馬ヶ原の夜は實に静寂そのものである。風は全くない。カサとの音も聴えない。夜の九時。こゝ、相馬ヶ原では深更の様な氣がする。夜に入ると急に寒さが襲つて來る。火鉢に火を澤山入れて置かないと寒くて堪らない。

私は火鉢にあたりながら東京を離れた淋しさ、なつかしさ、或は愉快さのコンビニールにした複雑な氣持にひたつて、たゞわけもなく、煙草をふかしてゐた。

間もなく生れて始めて軍隊の狭苦しい、堅いそして冷たいベッドにもぐり込んだ。

だが私の眼はいつまでもく／＼冴えてゐた。

* * * * *

四月十七日（金）快晴

午前六時。起床ラッパはけたましく鳴り渡つた。

眼をそつと開いて見ると、窓越しに麗かな朝日は部屋一面に充ちてゐた。併し寒氣は中々強い。服を着て室外へ出ると、小使が洗面の用意をしてくれた。

驚いたことには水が堅く張つてゐる。ベッドが堅いので安眠出来ず、睡眠不足の不愉快な気分で廠舎の中庭に降り立つた。中庭には高く、アノ懐しい三色旗が朝風に颯つて居る。私は榛名山を眺めた。朝日を浴びた榛名山の絶景き……その瞬間私は思はず深呼吸をした。睡眠不足の不愉快さは拭ふ様になくなつてしまふ様な気がした。

「とうです、中々景色が好いでせう。」

S 中佐は叔頼に微笑を遣へ私の後から落付いて云つた。

「烏、榛名の右手に並んでゐるのが赤城、それから左手に面白い形に見えるのが妙義です。」

S 中佐は右手で指した。

「なる程、いい所ですわ。全く絶景です。」

私はゆつくりと云つて、軟らかい朝日の光を受けた。佛蘭西のシャバンスの描いた畫の様な山々を、ツツムと眺めた。朝のスガくじさは一入沁み渡つた。

午前七時。朝食。

朝食后医務室で新聞を讀んでゐると、二、三學生が診察して貰ひたいと入つて來た。皆擦過傷程度のものばかりであつた。

八時を過ぎると學生は廠舎を出て、山麓の所謂相馬ヶ原へ演習に出かけてしまつた。

そうなると私も用事がなくなつた。そこでステッキ一本持つてブラ／＼廠舎の松林を抜けて附近の高原を散歩し出した。

太陽が登るにつれ、氣温は次第に暖かとなつた。

私は廠舎附近の林の中を春光を浴びながら黙々と歩いて歩いた。時々停つては前方の榛名山を眺め、又ステッキを打ち振り高原をさまよふのであつた。

午后になると少し風が荒くなつて來た。高原一帯を學生の後に従つて歩いた。本日の患者八名。

四月十八日(土) 快晴

午前中は學生が教練に出掛けてしまふと、ステッキを手に、ステッキ一本の身軽さで高原をさまよひ歩く。

私の様に都會に生活してゐるものがたまにかう云ふ迄々とした所へ来ると、
縣中がのびく、した様な氣持がしてなんとなくうれいものである。

それが暖い春光を必び、陽炎萌ゆる若草を踏み、然かも高原である。

私は唯わけもなくうれしい、鬼に角うれしいのだ。

時々立止つては名も知れない花を眺め、又歩き續けては高原の春の雰圍氣に
身も魂も融け込んでしまふのであつた。

* * * * *

午後は學生の抗防演習の觀戦に出掛る。敵舎より約二十米程登つた所が旧敵
舎跡がある。ここには何百本と云ふ櫻の大水が植えられて、今それが満開で、
實に壯觀である。この地奥を中心にして學生の戰鬪が開始され、休戦後挾撃射撃が
行はれた。私も射撃に参加し、十發中七發命中したら、教官から譽められた。

夜に至り風大に吹き寒氣を加へた。學生は夜間演習に出掛けた。

本日の患者二十五名。多くは感冒であつた。

* * * * *

四月十九日（日）快晴

午前中は演習休。

學生等は三々仏々と打ら連れて廠舎附近で吞氣に日なほつこをしてゐる。私も特別用事が無い。教官等と雑談に耽つたり、附近を散歩したり、非常に暇であつた。

午後は旧廠舎から約千米程登つた地奥で抗防演習が展開された。私は防衛軍と供にこの地奥で觀戰することになつた。この地奥は頗る眺望良好。関東大平野を一目の中におさめることが出来。恰もパノラマを見てゐる様である。私は學生の後方に腰をおろして、○特務曹長と煙草をふかしながら眺望を恣にしてゐた。

「もうそろそろ攻撃軍も姿を見せるでせう。」

○特務曹長は腕時計を見て云つた。

「攻撃軍はどこいらから来るのですか。」

「そうですね、向ふに少し高く聳えた松の木が三本ばかりかたまつて見へるでせう。アレを中心にした攻撃軍は出て来る筈です。」

「ははア………。」

私は煙草の煙さのどかに吹いた。

○特務曹長は双眼鏡を眼に敵の観測をやつてゐる。

「松林の中に一人、二人見えませぬ。」と云つて、

○特務曹長は立上り學生に其の旨を傳へた。

學生等は急に緊張したように、雑談を止めて前方の松林の方を一齊に見た。

やがて松林の中からポツポツ攻撃軍の黒い帽子が見へ出した。次第に其の数を増して来る。

「来た、来た……。」

學生等は云つた。

八田少佐、渡辺大尉の指揮する攻撃軍は盛んに前進して来る。敵影は明かに見えへる様になつた。

防衛軍も少しく前進して敵兵線と數き、敵を待つてゐる。攻撃軍も勇敢に前進を続け、西軍の距離も接近して来た。

忽ち射撃の命令は下り、勇ましく射撃は開始された。敵も前進して盛んに射撃をする。一しきり西軍の銃声は相馬ヶ原を壓した。

兩軍はいよいよ接近した。

俄然！防衛軍も攻勢に轉じ、前進命令は下つた。

忽ち兩軍に突撃の命令は下り、兩軍は勇躍銃剣を振るつてわァ！わァ！と喊声を擧げて突込んだ。あはや、ここに劍戟相摩す白兵戰が續ぜられるか、と見る間に嘯鳴たる休戰ラッパは高らかに、相馬原頭と鳴り渡つた。

本日の患者、五名。

四月廿日（月）快晴

午前九時頃第一班の學生は全部帰京した。文代の第二班の學生は明日来る予定である。

今日は全く職となつた。

教官達とゆつくり晝食をすることになつた。廠舎の附近に古田と云ふ陸軍の御用商人の家がある。その二階を借り、風呂を沸かさせ、入浴後久し振りに疊の上にすはつて鳥料理と食べた。

今日から明日の夕刻までは學生が留守なので吾々は何も用事がない。

そこで私は高崎へ遊びに行くことにした。かう云ふぼんとの田舎に四日間も

居るとなんとなく都會が悪しくなつて来る。殊に夜などはそれがひどい。夜廬舎の窓から遠く、高崎、前橋あたりの灯を眺める時、東京を思ひ出さずには居られない。東京に居た処で別に面白いことがあるわけではない。

病院に毎日入り込んで、大工の手間取りの様な仕事をしてゐる。人と人との間のくだらぬ交渉をやる。余り愉快なものではない。

だがやはり田舎の單調になれると都會が悪しくなる。都會へ出て来る所を通る人の顔を見たい氣が起きて来る。

二時頃私はボツ／＼と箕輪の町へ下り、自動車で高崎市へ行つた。

報知新聞のK君を訪問し夕刻から市中を見物した。

高崎聾啞のすぐ附近に公園がある。公園のベンチに腰を下してK君と浅間山の後に入る赤々とした夕日を眺めた。浅間の噴煙は黙々として大空に靡いてゐる。私はこの壯觀を異様の感に打たれ、太陽の全く沈むまで静かに見守つてゐた。

灯の市中を散歩して、K君の家へ引きあげたのは九時頃であつた。今晚は又し振りに疊の上に寝る事が出来た。

四月廿一日（火）快晴、後雨

朝十時頃ト君と共に町に出て聯隊の前で再會を約し別れた。

私は別に當てもなく市中を歩いた。ここは商業の町だけあつて商人風の人が非常に多い。

晝頃になると、銃を携つた新らしい第二班の學生がボツ／＼来るのに出會つた。

午後は前橋市へ鬼物に行く。

前橋市は群馬縣廳の所在地だけあつて、高崎市よりはすつと整然とした町である。道路なども堂々としたものが出来てゐる。電車やバスも通つてゐる。市中を見物して再び相馬ヶ原の廠舎に帰つて来たのは夕刻五時頃であつた。新しい第二班の學生は既に廠舎に居てゐた。と元氣に賑かに廠舎の庭で遊んでゐる。夜に至り大いに雨降り氣温少しく上昇した。上昇したとは云ふもののやはり火が無いと寒い。

夕食後小侯室の爐を圍んで教官等と話をはげむ。

○中尉が日露戦争の話を聞かせてくれる。○中尉は日露戦争の大きな巨戦、例

へは黒溝台、南山、二〇三高地、奉天戦の沙河等に皆参加した勇士で戦争中二回も敵陣に當り、一時は戦死を傳へられたこともあつた由。殊に有名な黒溝台の戦の時はS中尉の聯隊は全滅し、聯隊長に至るまで戦死を遂げたが、S中尉及び二三の者は負傷はしたが、幸ひ命を全ふすることが出来たのである。

「戦争中最も痛快だったのは敵を追撃した時ですよ。」

S中尉の顔は晴れやかになつた。

「もう半年も前のことですから少し忘れましたが………、そんなにか云ふ村でしたよ。その村の敵を掛腕から攻撃する命令が下つたのです。前の晩、聖壕の中に入り敵と對峙してゐる時の氣持つやらありませんね。」

S中尉は煙草に火をつけ語を継いだ。

「勿論煙草を吸ふことや、大声で話すことは禁ぜられてゐるのです。時々敵の照明弾が飛んで来ます。と見るまにバツとあたりが明るくなる。その時は決して動いてはならないのです。少しでも動くと怒ち敵の機関銃に見舞はれるのです。」

「聖壕の中では少しも眠らないのですか。」

私は中尉の顔を見た。

「少しでも眠って置き度い、とは思ふのですが興奮してどうしても眠れないのですよ。その緊張した氣持はなんとも云へません。」

一同は中尉の顔を熱心に見守つてゐる。

「いよいよ夜は薄く明けて来ました。前進の命令は下り、私達は塹壕より這ひ出して前進を始めました。敵はそれと知り、忽ち射撃を始めました。彈丸と云ふ奴は面白いものです。盛んに自分の周圍をシュー／＼と音を立てて通過しますが、中々当たらないものです。併し敵もある場所へ目標をつけて射撃をやつてゐますから、そこへは、彈丸が来になつて集まつて来るのです。さふ云ふ所へ運悪く入らうものなら、一たまりもないのですよ。」

外は盛んに雨が降つてゐる。中尉の若は次第に佳境に入つた。

「私達も射撃を開始し更に前進を続けたのです。敵と余程接近し、敵影も充分わかる様になつた頃、敵は不利と見たか、突然退却を始めました。さうなると私達はもう氣が楽です。ソレツとはかりに追撃に移つたのです。」

敵は算を舛して總崩れとなり、吾れ先へと逃げるのが平に取る様に見へるので
 す。それを目がけて私達は射撃をする。さうなふ時はよく弾丸が密り、バタ／＼
 と斃れるのがよく見へるのです。その度に如何にも自分の撃つた弾丸が余中し
 た様な氣がして、實に痛快でしたよ。

中尉はお茶を一息に飲み干して更に語を継いだ。

「いよいよ敵陣を占領して見ますと、敵の陣地の後方に約一米ばかり低い、幅
 が約三米ばかりの道路がありまして、敵はその道路を先を争つて逃げたのです。
 つまり敵の密集して居るところを後ろから浴せかけた訳になるのですから、堪
 りません。その道路は敵の死骸でギツ干りと満ちされて居りましたよ。私達は
 その敵の死骸を踏んで前進を続けたのです。私達はこの惜い奴とばかりに、敵
 の死骸を銃剣でぶつり／＼刺しては進みましたよ。實際あの痛快さは今でも忘
 れませんですよ。」

中尉は少し上氣した顔に、感慨深さうな表情を浮べて私達を見た。

兩は相変らず降つてぬる。

* * * * *

四月廿二日(水)、伏晴

午前六時、起亦ラッパに眼を醒ます。昨夜の雨も全く晴れ、麗かな日光が医務室に輝いてゐた。

ビール瓶のこはれたのに櫻の花を澤山挿して小俵が持つて来て呉れた。

廠舎の軍隊生活にもソロ／＼飽きが来た。

だが毎呑氣にノビ／＼して殿い春光を浴びながら高原をさまよつてゐるのがナントも云へずうれしい。

例によつて午前中は高原の散歩である。

午後は晝寝をして過した。

夜に至り風吹き始め、寒氣を加へた。

夕食後爐を圍み教官達と話す。

今晚はW大尉の西比利亞出征の話に花を咲かせた。

西比利亞の冬の寒いこと、大いに呑んだこと、マーケットなどで寶石などの掘出物を賣ひ、得々として帰つて寶石商に鑑定して貰ふとそれが偽物であつたり、たま／＼眞物をつかんで来ることもある等々仲々面白い。

或る日、日本の兵隊が狸を生捕つて来たので、それを日本軍が檻に入れて飼つてゐた。

所が或る晩小使が餌をやる時に兼じて逃げ出した。小使の奴あはてて大きな声を出してしまつた。日本軍は小使の叫び声を「敵襲!!!」と聞いた。

「さア」ことが。日本軍は武裝を整へ一齊に宿舍から飛び出して来た。

出て見ると敵影更になし。唯だ寒いばかりである。

「とう／＼狸に仇を取られましたね。狸はバカされたとはこの事ですよ」と云つてW大尉は愉快そうに笑つた。

本日の患者、廿七名。

* * * * *

四月廿三日（木）快晴

晝近く交代の内科の櫻井學士が来た。教官達に櫻井學士を照会して晝食を共にする。

午後、八日間の寮舎生活を愉快ならしめた。教官を始め小使諸君に別れを告げ、天氣晴好なる橋名を後に相馬高原と下つた。

私は灯ともし頃上野驛に降りた。東京は相変わらず騒々かである。木オんサイ
ンまほゆい東京の町を久し振りに歩いた。(をほり) (一九三二、十一)

習志野軍教救護日誌より

藤太郎記

習志野の生活は喇以の生活である。―起床喇以、就床喇以さては行軍喇以、
突貫喇以―喇以に始まりて喇以に終る生活である。次に喇以の生活の一日を紹
介する。

朝まだき六時朝霧を食いて起床喇以が若人の夢を破る。夢破られたる若人は
旅の假寝の毛布ベッドより跳ね起きて洗面所に向ふ。碧空の下透徹なる朝の空
氣を吸ひて若人の身体は爽快と元氣さとに満ち満ちる。續いて朝の桌呼だ。人
員桌呼から其の日の予定の概略が各教官より申し渡される。七時ともなれば朝
食喇以が鳴る。甘い朝食を腹一杯喰べて先づ食休みとなる。医務室が繁昌する

のは此の時間である。咽喉が痛いお腹が痛いが大分。あはよくは今日の教練を休んで散歩としやれ様とする不埒者もある。集合喇叭が八時に響く。營庭に整列隊伍堂々、喇叭の音に歩調を合せて面蔵舎裏門より朝露に濡れつつ演習場へと進發する。

日漸く高く正午近くともなれば汗と塵にまみれ腹をすかして道足とりつ、各隊順次に帰營する。拾二時の昼食喇叭、晝食後の休息で英氣を養ひたる各隊は一時の集合喇叭で集合、更に隊伍を整へて午後の教練にと急ぐ。

日西に暮き薄暮漸く迫る頃各隊は一日の教練を終へて帰營する。入浴して一日の塵芥と疲労とを流し去る頃夕食喇叭が鳴る。医務室の賑ふのも又夕食後が多い。夕食後九時の消燈まで自由の時間が與へられる。津田沼の町へ散歩に出掛る者、夜の習志野情緒を味ふもの、放歌するもの、高吟するもの、等々種々雑多である。

かくて九時の消燈喇叭で一日は終りて旅の假殿に入るのである。

演習地で楽しい時は一日の勞務を終へ入浴にすつかり元氣恢復して、空腹に

山海の珍味を食べる時であらう。夕食にはお茶として灘の生一本が出る。麴腹
食べて美酒に頬をほてらせ、陶然としてあれやこれやのよもやま話に盡くる時
を知らない。S中位は緒煩を更に紅にして例のカイゼル鬚をひねりつつ談論風
発である。先づ一座の座長格と云へよう。少位は謹嚴な武入である。言葉少
に而も寸鐵の應答とする。W大尉のシベリヤ出征談、古武士S中尉は日清日露
生残りの勇士だ、談一度び實戦談に入るや舌端火を吐く如く、体験談とて他の
追隨を許さない。優に日清日露戦史の一部を飾るに足る、此の間を〇持務曹長
が福島辨で應酬する。談は近時談片より体験談に移り更に満蒙問題に及ぶ。和
氣室に満ち、楽しい夕食である。一日の疲労を慰して余りある会食である。只
惜しむらくは美姫其の座にはべらざるを王の盃に衣をきに例ふべきか。呵々

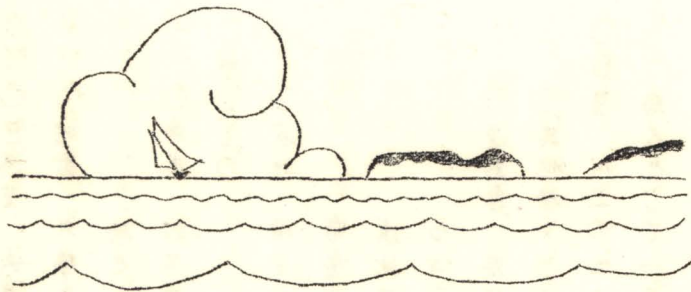
軍教中精神緊張の最たるものは夜間演習であらう。暗夜でない。秋月が隈な
く照つてゐる。梢が白く見へる。判然とは見へないが臆けながら地平線が見へ
る。森がかつきりと浮び出てゐる。小川がきら／＼銀鱗をただよはせながら流
れてゐる。それでさへ精神は緊張する、咳一つする人さへない。歩哨が出る、

連絡兵が出る、斥候の報告に耳を大にする。味方兵士の足音さへ耳に響く。敵軍が近付く歩哨戦が始まる。銃口からは火を噴く。照明弾が上る。狐火の如く尾を引いて靈火の如く青白く四方を照らす。若し其れいよいよ近付きて両軍の銃火もまばらに、突撃戦ともなれば、劍の先は范の如く突撃喇叭、喊声と相俟ちて精神緊張は正に百々に達するのである。

軍教軍事教練は軍籍によつて生れたる嬰児である。其の成果如何に就いては僕は知る所甚だ少い、然し僕の三日間の軍教救護の体験より見るときは、同じ年輩の若人が同じ學風に育つ塾生が、たとへ三日間なりとも同じ兵舎に起臥し同じ甕の飯を食ひ、斥候に歩哨に艱難を共にす、意義少なじとせざるを得ない。まして仲秋天高く馬肥ゆる頃遠く都塵を去りて、朝夕軍務に服す。此を精神及肉體上より見ると、將又國防上より見ると、時今滿蒙問題喧しき折柄、軍教は更に一層緊要事と思ふのである。

因みに教官の教練日程には

第一日 小隊及中隊教練



第二日 狭衣射撃野外及夜間演習
第三日 大隊教練。

と記されてあつた。

(終り)

葉山水泳部救護記

○期間 七月廿三日より一ヶ月間、一人五日宛とし、内科と
共に六人、外科救護員 布留文夫 小澤武雄 笹島彦
次郎

○場所 葉山堀の内 慶應義塾体育會水泳部寄宿舍

○寄宿舍 半ば三階建

○収容人員 部員一五〇名

其他約五〇名(炊事密員等)

○ベッド 棚式ベッド 一人疊一疊敷

○医務室 六疊日本間、一般寢室とは別

○部員 大學生より普通部高工部生

時としては上級幼稚園生も参加す

○海岸 約三丁 波静か、水清し、白砂青松文字通り、眺望湘南第一

○催しもの

○遠泳 逗子（三哩）鎌倉（六哩）江ノ島（十哩）

布留文夫君逗子遠泳参加成功。

遠泳の耐き物として所謂遠泳熱なるものあり（疲労と冷へより未
る四〇度以上の上昇を見る高熱）

○運動會 競技デモンストラチオン、仮装行列等あり甚だ賑やかなり。

○其他様々なるものあり。

○救護 以上の如き状況なれど何等特別なる救護を要せるものなし。

病人として一番多きは

内科的には 風邪 腹痛

耳鼻科にては 外聽道炎

外科にては外傷、及びやけど等

外傷とても縫合を要するものなく、化膿するものも少し。

一般に、沃丁、オキシフルの程度にて治癒す。又ミグレニン、アスピリン、マーゲン、ミッテル盛に飛ぶ。

會期中、前田和三郎教授御子息と共に約一週周部負同様の生活を続けられたり。

又小坂慶夫先生も亦時折御素葉の上種々御配慮を下されたり。

以上未筆乍ら西先生に感謝申し上げる次第。

水上運動會救護（白鳥）

五月第一日曜三日 可きく不可もなき天候

医員数名（成内、笹島）看護婦三人

墨堤昔の名残を微塵も止のず、唯見るモターインリバーサイドパークとやら。

拙くたる歩道、自動車の通行を許さぬ安全救護道、櫻は既に葉櫻とは云へ、初

夏としての各條件總て充たされて居る。

コンクリート造りの高大厩庫上のスタンドの一隅に納る。レースコースを一日目で見る好鬼物場所、呼物の各責任レース一勝負毎の人々のざわめき。一日唯もうのんびりと鬼物に過す、救護記としては特記する事なし。唯沃丁を二人に塗りつけた也。

陸上運動會救護（新田）

○十月四日。曇後大雨

○医師二名（島田、浜名）看護婦三名。

○出發。午前八時。自動車の中で既に雨。荷籠師の姉妹諸嬢は雨ですぐぬれ、べと、白粉をこきまぜて、げたし氣の毒である。會は始めのたばかりで中止。

○患者は、幼稚舎ボーイ二名、腦貧血と腹痛。

○御輿當の御馳走に預つて十一時帰院。はきははしい婦長はじめ外未諸姉の御見送の手前少しはづかしかった。

覗イテ居ル

昭和六年

十月三十日

禿皮生

此後テ小方先生が
一生懸命何ダカ染メテ

此窓ハ夜間出入自由

H先生
専用御入口

町田先生ハ一番
奥ニ入ツテ色々
御勉強中ラシイ

羊羹在中

此部屋ノ
戸柵ノ後テ
小野サンハ
今更衣中
ノ苦デ
アル

標本室内
常ニ医員
御連中ノ
和氣霽々
タルヲ脊後
ニシテ

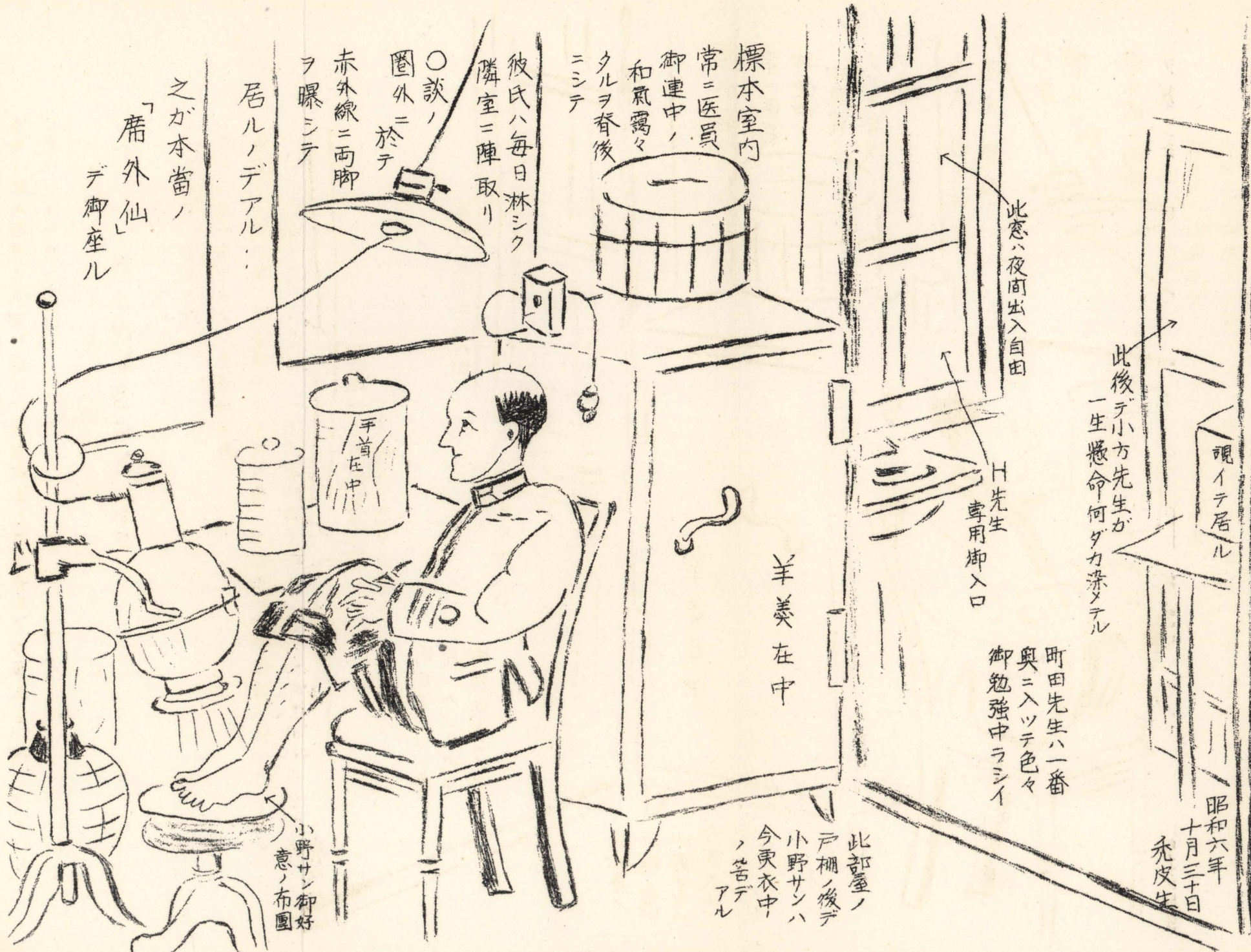
彼氏ハ毎日林シク
隣室ニ陣取り

○談ノ
圏外ニ於テ
赤外線ニ両脚
ヲ曝シテ

居ルノデアル

之が本當ノ
「席外仙」
テ御座ル

小野サン御好
意ノ布團



天候屋山

清水山

三日月山

三日月山

三日月山

赤木山

三日月山

三日月山

三日月山

三日月山

三日月山

三日月山

三日月山



北窓ハ奥向出入自由

北窓ハ奥向出入自由

北窓ハ奥向出入自由

北窓ハ奥向出入自由

北窓ハ奥向出入自由

北窓ハ奥向出入自由

北窓ハ奥向出入自由

北窓ハ奥向出入自由

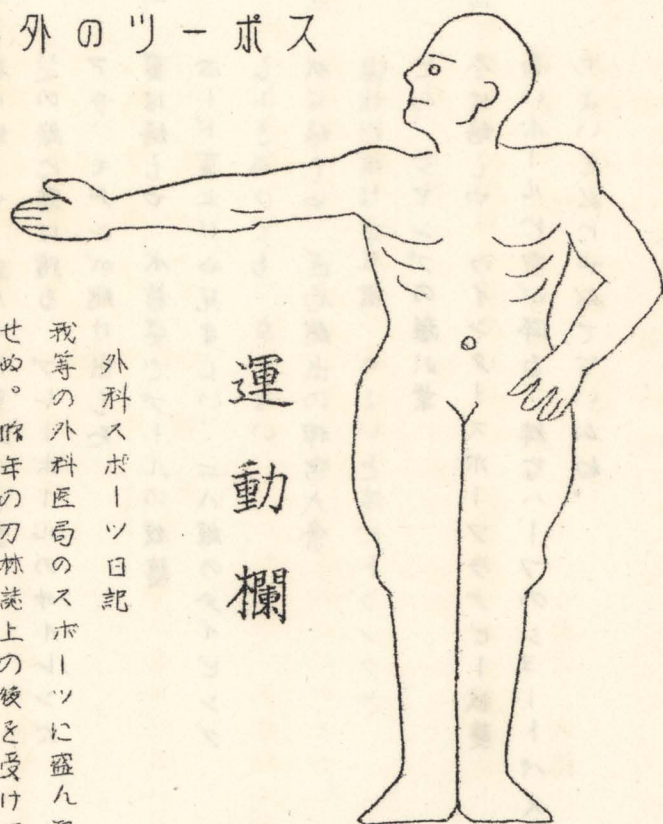
北窓ハ奥向出入自由

救護節

逸名氏

- 一、春は嬉しや 鞆虎手に野球の救護
芝の線に陽は躍る プレーボールのサイレンに
アラ、モヤンが馳け出した
- 二、夏は嬉しや 水着姿でプールの救護
ホード夏上りや見まじい、ニハ娘のダイビング
しぶき浴びても 辛かない
- 三、秋は嬉しや 医局總出の神宮大會
國技相撲は早仕舞、ちよいと序にトラックで
そら、ジャンプの難れ業
- 四、冬は嬉しや ウインタースホーツラグビー救護
高いボールに雪が降る 粋なハーフのショートパス
ちよいと私にや似てないかぬ。

外科のツース



運動欄

外科スポーツ日記

我等の外科医局のスポーツに盛んなる事は今更發言を要せぬ。昨年刀林誌上の後を受けていざや赫々たる戦績を記録して見よう。

昭和五年十一月一日（土）

とみ生

對婦人科ホートレース（三四會水上運動會）

船 整 五 四 三 二 舳

(X) 森 田 鋤 藤 神 吉 吉

ン 文 村 島 原 山 岡 野

(-バ) 森 百 古 布 河 野 塚 園

文 溪 川 留 野 塚 園

第一選手優勝（差 $\frac{1}{2}$ 艇身）

第二選手惜敗（差僅二吋）

何れも昔とつたさぬ柄腕に覺えのある連中、見事婦人科の猛者連を押へた。殊りの先生の如きは遂に油が切れて腰を切られた由、そこで誰やらが

百本も増げば流石に腰がぬけ、

十一月十七日

對藥物化學聯合軍野球戰（三四會野球部主催医局リーグ戦第一予選）

吉 森 寺 河 富 百 林 土 田

野 文 田 野 内 野 田 溪 方 村

十二A對六 快勝

- (6)
- (3)
- (2)
- (1)
- (9)
- (8)
- (4)
- (7)
- (5)

この日全軍の出来善く打撃大に振ひ敵の投手をノックアウトしたが更に近く
對内科戦を控へ一同大に激勵し合ふ。

十一月廿二日（土）

この三四會陸上運動會が晩秋の陽光輝く外苑競技場で行はれた。万能の人並
びたる我が外科は殆んど總ての種目に出場し何れも強たかメタルをかせいだ。
呼びものの對医局レースは次のメンバーで行はれたが強敵の内科の爲め遂に優
勝の譽を奪はれた。内科の某君故意か偶然かトラツタの内側に飛び込み我選手
を抜く、爲めにインテキインテキの声高く、敵も味方も思はず吹き出した。

ハレーメンバー

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

藤相 古 獨 森 布 吉 百 寺 井

原 見 川 島 文 留 岡 溪 田 上

医科教授團對幼稚舎ホーイの綱引きは茂木、木村菊先生の如き一騎当千の重
量選手を見ながら四谷組も多勢には敵せず惜しくも敗る、三四會員このユーモ
アに皆腹をかかへた。

十一月廿七日(水)

對内科野球戰 (太平グラウンド、第二予選)

6 5 2 1 9 8 4 3 7 5 7

吉布寺河 富百林 森土田 堀

野留田 野内 田溪 文方村田

十一對七快勝
安打十一

十一月廿八日(金)

對皮泄科野球戰 準決勝

P P 2 3 3 4 5 6 7 8 9

吉布堀 森 岩町土寺 藤百井

野留田 文塚 田方田 原溪上

廿三對十四大勝

この日我軍は敵弱しと見て悠々第二軍を主力として戦ひ野田匠局長自ら二壘を守り大勝した。

十二月四日(木)

對小児科野球決勝戰 (於太平グラウンド)

敵は名にし負ふ小児科殊に近年は陣容整ひ難攻不落と云はるるもの。我軍茂

長以下匠局員総動員應援の元に死力を盡せる甲斐もなく太平グラウンドの薄寒
 キタ暮に不覺の涙を吞んだ

6 4 2 1 9 8 5 3 7 7 9 8

吉林寺河 藤百田 森士布 富城 十七對四借敗

野 田 野原 渡村 文方 田 (田) (田)

同夜借敗慰勞會を赤坂鳴門に於て開催、一同互に過日末の勞を慰め合ひ更に
 將來の覺悟を誓つた。

以上で我が昭和五年度の公式運動記事は終了、時既に嚴寒連日の新聞紙は盛
 に雪のニユースを傳へ我匠局までもS先生、T先生等は冬期休職を利して遠く
 北海道の野に遠征し伏きスキートのニユースを匠局にもたらした。土産のパテ
 ベビーで更に吾々留守軍の羨望をとそつた事は勿論である。

昭和六年一月十七日(土)

浅水部長招待天越羅大食競技會 於浅草清水

これも広義のスポートとして御紹介とする。当日優勝の祭をかち得られたは
 土手評を衰切りK先生であつた。尙當日記事は他の部に載せられてる事でせう

から詳しくは省きます。

定期教室對抗テニスリーグ戦戦績

(三四會庭球部主催)

六月一日(八月) 對小鬼科(第一予選)

栗	野	堀	田	島	田	若	林
吉	野	畠	田	林	森	文	神
						戰	不
						町	山

三對一快勝

野球で惜しくも負けたる相手なれば自重して苦もなく破り見事復讐した。さ
るにても新入局せられたる島田、若林、栗本、神山諸先生の優秀なる技倆と旺
盛なる士氣は老練の町田、森、林、吉野諸先生と共に一同として百万の味方を得たる
如き感を抱かしの自信を深めさせた。

六月四日(水)

對東校舎第二予選

栗	本	堀	田	島	田	若	林
吉	野	畠	田	林	森	文	神
						戰	不
						町	山

三對一快勝

六月五日(金)

對産婦人科準決勝戰

栗本堀田 島田 若林 不神 山地
 吉野 畠田 林 森 町田
 三對一快勝

敵も仲々のものにて殊に大将組たる松本組と若林組の接戦は見るものをして汗を握らしめ接戦又接戦、遂に祭冠は我等が組に下つた、この日向島に於ては同様産婦人科とのホートレース行はれ見事優勝した

第一 船 登 五 四 三 二 一 六〇〇米

手選 森 編 神 藤 甚 前 加 艇 差 一 シート快勝

豊島山原島田藤

第二 辻 布 古 橋 村 相 小 独 漕
 手選 岡 田 川 本 山 鬼 方

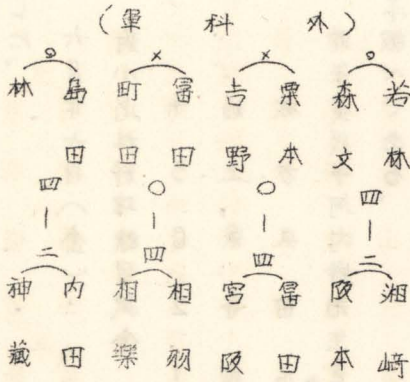
昨年のメンバーに更に後鋭加藤、佐島西先生を迎へ更に整形教授前田先生の自らオールを控られるあり、大接戦後再び婦人科の曲者連に一泡ふかせた事は當然ならん、第二選手諸先生又悠々独漕して優勝のメダルをかかせる。日

暮れての我が医局内は正に萬歳々々の声で満された。即ち陸に水上に斯せずして婦人科を破りたる次第なれば。

六月六日（土）

對禁物テニス決勝戦 於東西コート

西軍メンバー交換に就て思はざる問題が生じ戦前一抹の暗影を見たが、我軍の虚心坦懐公正なる態度によりて事なく岩つた。



(軍物禁)

○	○
神	山
堀	鈴
田	木
三	三
一	一
四	四
高	高
橋	橋

三對二、遂に我等は決勝戦を失つた、二―二
 役最後の組は決勝戦となり接戦又接戦、怒力の
 の甲斐なく優勝を失ふたる事は残念なれど、
 飽くまでスポーツマンシップに戦へる我軍の
 態度は心ある人は皆認められたことである。

同夜は大木戸自慢本店に於て盛大なる慰勞會が催され、一同快く初夏の夜を徹した。

六月廿六日(金)

對小児科野球練習試合 於太平グラウンド

4	5	6	2	1	8	9	7	3
岩	土	栗	寺	神	百	富	島	森
林	方	本	田	山	溪	田	田	

昨年度投手河内野先生を^地送り新に多数の有力なる新入局諸先生を迎へての小手廻りである。

七月三日(金)

對内科野球練習試合

同様惜しきゲームを夫つた。MEMBER不詳

七月に入つては近時盛になつたベビーゴルフが我医局にも輸入せられ諸先生は皆中庭に出では皆これを練習し遂には中庭に相当見られるゴルフリンクが出現した。「午後三時以後になされ度し」と云ふ掲示が出たことによつても熱心の度

合がわかろうと云ふもの、日々暑氣加ふるに従つて例の如く遠からぬ神宮アルに故護に出掛けては来るべき青山外科との對戰の練習をする感心な先生方もあつた。

九月廿八日(日)

對青山外科ボートレース

船 整 五 四 三 二 舢

第一 田 錦 神 笹 藤 明 加

借 敗

手 選 村 島 山 島 原 樂 藤

二 茅 森 柳 瀬 村 君 古 辻

手 選 留 尾 山 塚 川 岡

大 勝

充分優勝の實力を有しながら事故の爲めに破れた我第一軍は皆残念の程を語り合ふた。この一敗を失ふを爲の来るべき四種目の競技に於て苦戦を逃れられぬことを知り大に緊張猛練習に入つた。

十一月十一日(日)

對青山外科五種競技(の内四種目) 茂木青山カップ爭奪戰

一、野球 十四對二 借敗

5 3 7 3.1 9.2 4 6 8 1 11 1

吉森 富明 寺林 栗百 神君 鍋

昨年同様野球は再び彼等の得る所と成つた。

二、水泳 (四。米宛十人リレー) 地

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

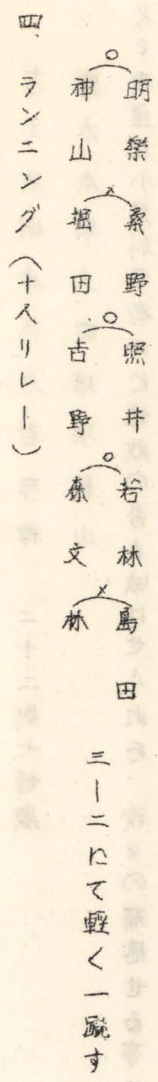
田古 君百 鍋布 神小 笹瀬

村川 塚溪 島留 地 山澤 島尾

前年は我軍勝てる種目である、地 敵はホームプールに我を迎へての奮戦、スタートより猛烈な接戦を演じや、我軍優れりと見る間もなく中頃よりや、劣勢となり主將瀨尾先生力泳の甲斐もなく約十米の差にて借敗す、我等は最善を盡せる諸選手に只感謝の意を表するのみ、勝敗は兵家の常又何をか云はんや。

三、庭球

既に三種目を失ひ本年度優勝の望を絶ちたれど士氣益々旺盛



明 鍋 照 神 若 森 百 田 藤 泉

樂 島 井 山 林 文 溪 村 泉 本

トラックのコンディション悪く各選手難戦す、敵のスタートせる選手バンドを落し我軍優勢の裡に進む、終回に迫りて我軍にパドンタツテのエラーあり、遂に回後の餘地を失ふ。

以上にて三種競技を終了し結局四一にて優勝杯は青山外科に奪換せられた。戦終り、近くの江和勝に於て盛大なる懇親會が催され我々一同充分に御馳走になり、和氣霽々裡に十時散會した。

本日 of 競技に於て鷹將栗本君はアツペの手術後日尚浅きに對はらず三種目に出場して大いに我軍の爲めに尽された事は一同深く感謝したことであつた。尚

應援團として早朝より出張された成内君は中途より癸病、即時帰院木村先生によつてアツペの早期手術を受けられた。我々一同帰院後始めて之を知り遅かざる恢復を祈つた次第であつた。

十月十四日（水）

医局對抗定期野球戦（三四會野球部主催）於太平グラウンド

對予防醫學第一予選

6	2	31	15	4	9	8	7	4	2	7
栗森	明吉	若富	君百	土堀	田					
二十三對九大勝										
本文	樂野	林田	塚溪	方田	村					

十月廿八日

對小兒科第二予選

56	4	61	3	2	89	7	98	15	17
吉土	衆明	森富	君百	布神					
二十二對七惜敗									
野方	本樂	文田	塚溪	留山					

又々我輩は小兒科の爲めに惨敗の苦を味はせられた、我々の痛感せる事は外

科チームは攻撃に比べて守備極めて劣れりと云ふ矣であつた。

十月廿日(金) 全三四對全四谷教授團野球戰

數日前から右の試合の予告があつて全四谷教授團チームは大に振り切つた。
先づメンバーを見渡すと

始球式 投手 林壑長 捕手 北島醫學部長

審判 櫻本監督

主將 加藤教授

監督 茂木教授 副監督 鎮目助教授

投手 川島、羽生、和泉

捕手 小林、浅羽、雨宮

一壘 草間 垣松

二壘 有馬 宮川

三壘 長谷川 鎮目

遊撃 加藤 雨宮(保)

外野 田宮、町田、西田

補欠 木村、岩原、平井、小柴

二二六

邊々たるものである。西軍数百の應援團が繰り込んで神宮球場のサイレンを以て開戦せられた。全四谷軍打撃、守備共に振ひ結局一ノA對四で大捷した。平常謹嚴なるプロフェサのファイナルレーや滑稽なるエラー等に一同愉快に應援した。

十一月廿四日（火）

三四會大運動會

昨びものの對匠局編成リレーレース我軍は昨年の借敗を報ひんとバストメモバーを編成して強敵内科婦人科と争つた。外科は始めてユニホームを着用し、士氣大に振ふた。

メ 明 鍋 岩 照 森 栗 布 藤 百 神

ン バ 樂 島 原 井 文 本 留 原 溪 山

スタートより接獸を演じ、猛走又猛走、應援團一同手に汗を握りたれど遂に一着内科、二着外科、三着婦人科の結果となり、外科は再び約五米の小差で覇權を遂げた、選手諸君の労を謝し来年度の優勝を祈るのみ。

拾二月四日(金)

對外科棕鳥チーム野球戰

突然の申込にて外科の人数メンバーそのはさるにも拘はらず七A對四で快勝す。敵のメンバーは前六大學專屬審判池田氏自らプレートを踏んだが我軍の猛打にノックアウトされた。

4 8 16 3 61 5 2 9 7

鍋村 神明 布百 君古 島

島山 山樂 留溪 塚川 田

以上で昭和六年のスポーツ日誌を終ります、更に医局員諸兄の御健闘を祈ります。
(一九三二、十二)

訃報

山田甫一君

昭和五年十月郷里ニテ死去

謹表追悼之意

同窓會會員名簿

(入局順) (○印在局中)

四谷區東信濃町二八(四谷四五六八)	○	茂木	藏之助
四谷區三光町五四(四谷六二一六)		犬養	六郎
福岡市住吉花園町一六六三		成松	清敏
北海道札幌市北回條四十五丁目一		柳	莊一
神奈川縣鎌倉村木座		大庭	國紀
市外野方町上沼袋一六〇		中村	復一郎
靜岡縣浜松市八幡町七二九(園八六五)		梅村	六郎
麻布區筭町八〇(青山六五二五)	○	木村	博
新潟縣柏崎町本町六丁目		高桑	武夫
水戸常磐病院内		柴沼	薫
神奈川縣小田原萬年町四丁目五七三		戸田	四郎平
神奈川縣都筑郡田奈村長津田一四二四		森	信彦
川崎市貝塚一二		阿部	貞治

深川區西平井町九三

茨城縣結城郡結城町一四一六

市外蒲田町御園一三八

芝區白金三光町二六九

桐生市西又方町二丁目七八六

南葛洲朋原藩鐵醫院杜宅

長野縣富士見高原療養所

芝區濟生會病院杜宅

北海道小樽市小樽病院

京都府宇治郡醍醐村

市外和田堀町和泉三四一

市外中野町樓山二〇

洋行中

宮城縣牡鹿郡石卷町立町三九

赤坂區青山南町六ノ五六野崎病院

○

二三〇

片柳常作

船葉俊雄

大槻正路

町田謙二

赤松常信

高木宗吉

中村武重

鎌田竹次郎

山田晟

山本順

本郷光美

本郷光美

今井市倫

新田金岩

上石英造

澤江六太郎

市外杉並町阿佐ヶ谷四八四

市外漕谷町南平台二三

芝區白金今里町八九(高輪五三五二)

市外杉並町馬橋五二九

市外杉並町阿佐ヶ谷五五四

市外杉並町阿佐ヶ谷五五九

樺太廳真岡病院官舎

市外代々幡町代々木深町一六六七

樺太大泊三橋外科病院

福井縣遠賀郡遠勢村

市外武藏野町吉祥寺二八三五

千葉縣館山町館山病院

大分縣北海郡小佐井村

富山縣高岡市旅籠町

市外尾久町上尾久九二五

岩手縣和賀郡黒澤尻和賀病院

篠原静夫

牛久昇治

○ 佐藤太平

林利治

○ 大曾根幾次郎

○ 神山敏雄

中村勝之助

近藤宗彦

三橋弘

次野碩太郎

豊田秀穂

渡邊治生

神野澄晴

吉崎純

竹下貫一

高兼三四一

市外大崎町一二五

八王寺市八日町三一

北海道十勝國帶廣町

福島縣石城郡

市外桂原郡目黒町上目黒七九七

市外代々木山谷三一四

市外井荻町下井草一九六八（荻窪一三五四）

市外鹿喜久井町二〇

四谷区左門町六八島林方

市外杉並町阿佐ヶ谷五八六

四谷区右京町二二

足利市伊勢町

赤坂区青山北町一ノ八

牛込区中野一二

市外中野町大字中野一一〇九

○	○				○	○				○									
松	森	岩	檜	桑	中	吉	川	横	生	佐	原	木	小	四	駒				
井		原	田	野	村	野	田	山	田	藤		村	内	條	井				
八	丈	寅		鐵	次	史	正	虎	幸	盛	廣	守		龍	忠				
郎	雄	猪	榮	四郎	郎	朗	雄	雄	喜	二	名	江	昇	作	雄				

四谷區左門町二八
 浅草區七軒町四東京寿病院
 赤坂區青山北町三丁目六七
 麻布區新網町一ノ五五
 市外杉並町高田寺七二四
 市外杉並町成宗
 市外野方町上沼袋二一二
 麻布區本村町二二五
 市外世田ヶ谷町下北澤九九〇
 前橋市北曲輪町
 北海道小樽市小樽病院
 長野縣小諸町馬場町五四五
 市外中野町小町二八六二
 プラデル、リオデジャネイロ
 鎌倉町大町一マニニ柴山方
 市外荏原町中延一〇八七實來方

○ 河内野 弘 徳
 ○ 高橋 福三 郎
 ○ 藤原 道 紀
 ○ 古川 明
 ○ 松橋 一
 ○ 君塚 正
 ○ 鍋島 勉
 ○ 前田 和三 郎
 ○ 村上 晋
 ○ 龍口 林五 郎
 ○ 井上 太 郎
 ○ 吉岡 勝 倫
 ○ 中村 廣 人
 ○ 八木 勝 郎
 ○ 土方 又 顯
 ○ 百瀬 定七 郎

四谷區大番町一〇三古川方

本所區若宮町一〇九本島方

市外砂町治兵衛三一九

本郷區千駄木町五八莊司方

要知縣新城町

埼玉縣川越市小仙波

市外杉並町田端一五〇

市外世田ヶ谷町代田六五二、五

浅草區八幡町四

市外荏原町下蛇窪四〇三

市外西葉鴨町池袋九五三糠森方

市外東大久保一八六

麹町區鍛冶町九段下福田アパート

宮崎縣佐世保（海軍軍医二年現役）

浅草區田中八〇

市外中野町東中野一六二一山靜莊方

二三四

○ 頼尾 睿三

○ 小野田 銀治郎

○ 加藤 元秀

○ 志田 貫一

○ 森下 貫一

○ 橋本 文吾

○ 伊藤 由比

○ 蓮江 英男

○ 堀田 善次郎

○ 畠田 勝郎

○ 小方 則太郎

○ 小澤 武雄

○ 田村 信介

○ 田中 周吉

○ 辻園 元

○ 武藤 藤太郎

頁

(四)

訂正

吉野勝衛君ハ吉岡勝衛君ノ誤

二三二

牛込区 納戸町十七

森 文雄

二三三

市外杉並町成宗 九六

若塚 正

二三四

市外后塚諏訪_{三二} 尤翠館

小方則太郎

二三五

市外武藏野町境_{八五五}

相見 三郎

二三五

京橋区植町_{二一七}

酒井 欣郎

二三五

市外駒込町深沢十七

森 豊明

以上

右訂正致レマス

市外野方町上高田一六山本方

四谷区須賀町三一塩原方

市外日黒町下目黒四三三

京橋区南鍛冶町二四

市外連谷町景丘二九物集方
在グラデル

芝区三田綱町一小島方

市外落合町上茗合六四四

本郷區湯島三組町二六宮下方

市外遊谷町豊澤慶應寄宿舎内

市外淀橋町角善三七六中村方

慶應病院外科医局内

日本橋区橋町一丁目九

市外杉並町阿佐ヶ谷五〇四

市外中野町朝日ヶ丘二

市外杉並町阿佐ヶ谷八八一

○ 布留文夫

○ 寺田泰三

○ 相見三郎

○ 酒井欣郎

○ 森井豊明

○ 細江静男

○ 浜名元中

○ 若林研爾

○ 神山真氣

○ 成内穎三郎

○ 村山成一

○ 粟本勝之進

○ 笹島彦次郎

○ 島田信勝

○ 明樂治部輔

○ 照井侃

編輯後記

二三六

○ 経験深い諸先生方に代つて吾々が第六号の編輯に取りかかつて、兎も角も形態だけは造り上げることが出来た。先づ木村、前田両教授を始め、投稿各位に深甚の感謝を表する。

○ 昨年の華やかなりし十年記念号の後をうけて今度は小粒ながらひりつとするもの、手廻りの而もどこかきらりとする所のあるものを作りたいと云ふ希望であつたのだけれども、月並みな劇作に終つたことをお詫びする。

○ 各地にあつて忙しい仕事を持つて居られる方々が、おどく寶玉の文字をお寄せ下さつた事は感謝に耐へない。心からの御禮を申述べらる次第である。

○ 又種々の御助言、御盡力を興へて下さつた医局員各位及び編輯員として活動された田村、森豊、笹島の諸君にも御謝を申上る。

○ 巻頭を飾らして頂きましたかつた扶本會長のお言葉を得られなかつたのは残念であるけれども、「刀林」の題字を書いていたいい事松のなる誇である。尚ほ昨年十月記念帖にかいて下さつた佛心庵子の四字をものせた、外科医日常の心組について、或はこの方が一頁二頁の原稿をいたしたくよりも意味が深いかも知れない。

○ 冬も漸く深く、殊に内外多事、團難来とまで叫ばれる昨今である。會員諸君の充分なる御自愛と御健康とをお祈りして止まない。尚綴り込んだ茂木先生の題字二枚は製版印刷、用紙絶て「診断と治療社」の好意の寄贈に預つたもので此処に感謝の意を表します。

(國坊記)

昭和六年十二月十三日印刷
昭和六年十二月十六日發行

非売品

不許
複製

發行者

東京市四谷區西信濃町廿二番地

慶應義塾大學醫學部
外科學教室同窓會

編輯者

吉野史朗
上方史顯

印刷所

東京市牛込區神樂町一ノ十二

田中騰寫堂
電話牛込一五二一番

東京市四谷區西信濃町二十二番地

發行所

慶應義塾大學醫學部

外科教室



酒井

